

# Network 経済

2025  
Vol.47

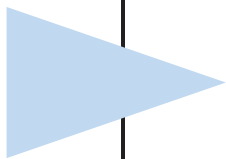
特集1

国際環境経済学科設立10周年  
記念イベント

特集2

獨協大学を卒業して金融の道へ  
～世代を超えたそれぞれの思い

獨協大学経済学部



- 03** 巻頭言 経済学部長 塩田尚樹
- 04** 国際環境経済学科設立10周年記念イベント
- 06** 座談会  
「獨協大学を卒業して金融の道へ  
～世代を超えたそれぞれの思い」
- 11** プレゼンテーション・コンテスト開催報告
- 21** ゼミ活動報告
- 34** 卒業研究概要紹介
- 39** 学生活動報告
- 52** 新任教員紹介
- 54** 退職教員挨拶



## 巻頭言

### 新しさと落ち着きとを

みな様、2024年4月に獨協大学経済学部長に就任いたしました塩田尚樹と申します。2025年3月発行の『Network 経済』Vol.47をお届けします。

2026年3月まで私と共に学部運営に携わるのは、野村容康経済学科長、堀江郁美経営学科長、松枝秀和国際環境経済学科長、高畑純一郎経済学部教務主任兼国際環境経済学科教務委員、熊本尚雄経済学科教務委員、大坪史治経営学科教務委員の6名です。学部長・学科長が全て新しい顔ぶれとなった一方、教務担当者3名は昨年度後半からの留任であり、学部 新しい風を吹かせると同時に現状を踏まえた判断もできるよい運営チームと自負しています。



獨協大学経済学部長 塩田尚樹

学部運営において心がけていることのひとつが、5年後・10年後の発展につながるようなアイデアが生み出され、実現されていく制度・雰囲気作りです。例えば、2024年度開始直後に、経済学部将来構想検討委員会を学部長・学科長から完全に独立させ、50才未満の中堅・若手教員15名全員をメンバーとして再構成しました。早速、経済学部専任教員新規採用人事について「諮問」したところ、これまでにない「答申」がありました。そのおかげもあってか、この原稿執筆時点ではまだ詳細非公開ですが、2025年4月には、獨協経済の未来を担うにふさわしい新しい仲間を複数、迎えられそうです。

2024年度における経済学部の一番大きなイベントは、国際環境経済学科開設10周年記念事業です。国際環境経済学科は、その英語名称 'Department of Economics on Sustainability' が示すとおり、「持続可能な社会の実現のために貢献できる人材」の育成を目的としておりますが、2013年4月における同学科の開設は、まさに来るべきSDGs時代を先取りしたものと考えられます。記念事業の目玉は、大野元裕埼玉県知事をお招きして開催した「伝右川再生会議 2024」です。詳細は本文に譲りますが、大野知事ご自身による基調講演のほか、「伝右川再生に向けた地域連携と大学の役割」についての知事と本学在校生との意見交換など、大変有意義なイベントになりました。

それでは、みな様。「プレゼンテーション・コンテスト開催報告」や「卒業研究概要紹介」などの定番ページも含め、『Network 経済』Vol.47を、どうぞ、お楽しみ下さい。

# ▶ 国際環境経済学科設立10周年記念イベント

## 1) 国際環境経済学科10周年事業の趣旨

獨協大学経済学部国際環境経済学科は2013年4月に開設されてから2023年で10周年を迎えた。学科開設と同時に、国際環境経済学科学生スタッフCLOVERが立ち上がり、オープンキャンパスをはじめ学内外に対して学科の広報活動や学科主催の新生歓迎会の支援や、スポーツ大会などの交流イベント開催に活躍してくれている。2014年度の大学創立50周年記念事業として、「伝右川再生会議」、講演・討論会「フクシマの未来を考える～大学生のうちに知っておくべきこと～」を開催し、コロナで不開催となった2020年度を除いて継続開催している。さらに、2016年12月には「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo”」を開催し、2017年度からは6月、12月の年2回開催となり、「地球のことを考える1週間」として学生・教員・職員の誰でも自由にイベントを企画したり参加するプラットフォームができた。国際環境経済学科は、持続可能な社会を創る人材育成を掲げており、これらの学科主催のイベントは単年度のイベントではなく、社会が変わり、社会課題が解決されるまで続けるものとして継続開催してきた。

2023年11月16日の国際環境経済学科10周年のイベントでは、学科開設10周年を迎えるにあたり、これまで国際環境経済学科が取り組んできた活動を振り返り、持続可能な社会を創る人材を育成するという学科の理念が達成できているか点検することを目的とした。また、社会が脱炭素社会やサーキュラー・エコノミーの実現に向けて変わろうとしており、大学も「埼玉県SDGsパートナー」に登録してSDGsを推進する大学づくりを進める中で、学科開設時の初心に戻って、今一度国際環境経済学科の果たすべき使命を再認識する機会とした。今回の記念事業イベントでは、第1部として「記念式典」、第2部「第10回伝右川再生会議2024」、そして第3部「意見交換会」を開催した。下記に、各イベントの詳細を紹介した。

## 2) 記念式典

獨協大学経済学部長の塩田尚樹教授より、式典開会の挨拶の中で2つのメッセージを頂いた。第1は、国際環境経済学科の英語名称が、‘Department of Economics on Sustainability’であり、その‘Sustainability’が示すSDGsという略語を目にしない日はないほど現在では世の中に定着している。このSDGsの「2030アジェンダ」の中核である「17の持続可能な開発目標」は2015年9月に採択されたが、本学科はそれより早い2013年に設立され、まさに来るべきSDGs時代を先取りしたものであったことが述べられた。第2として、現在の地球全体・世界全体を見渡すと、ウクライナやガザにおける人道危機を引き合いに出すまでもなく、SDGsの理念である‘Leave no one behind.’とはほど遠い状況にある。これは、学科に課せられた課題でもあり、今後の国際環境経済学科の果たす役割が如何に大きいかを激励とともに述べられた。

引き続き、学科設立準備段階より多大なご尽力をいただいた犬井正元学長より、学科の設立の経緯と当時の熱い思いを語って頂いた。また、学科のためにまさに粉骨砕身の精神でご貢献されている米山昌幸教授より10年間に学科が刻んできた歩みについて

ご紹介頂いた。米山教授からは、「伝右川再生会議」、「フクシマの未来を考える」、「Earth Week Dokkyo」など、学生主体、継続開催にこだわってきたこと、東日本大震災後の社会環境を背景として学科が設置された経緯から、福島県大学生事業、そして復興知事業と、国際環境経済学科が中心となり、大学全体で福島の復興・再生に取り組んできたことが披露された。そして、「持続可能な社会を創るという目的に向けて、学生が提案してきたものはすべて実現させてきた。学生ができることは決して小さくなく、むしろ学生だからこそできる強みがある。これからも社会変革を目指して、学生と社会課題に取り組んでいきたい」と述べられた。

続いて、国際環境経済学科に所属されて学生の環境科学教育に熱心にご尽力頂いた中村健治元教授と濱健夫元特任教授より、自然科学の教育も含めた文理融合の学際的な教育の推進にも期待が寄せられた。次の世代を担う若い世代にとっては、とても貴重な話が聞けた機会となった。

## 3) 第10回伝右川再生会議2024

天野貞祐記念館大講堂において国際環境経済学科・環境共生研究所共催『第10回伝右川再生会議2024』が大学創立60周年および国際環境経済学科設立10周年の記念事業として開催された。教職員と在校生をはじめ、卒業生や近隣の住民の方々にも参加を呼び掛け、合計約300名が来場して頂き盛会となった。

第1回を2014年に開催して以来、10回目となる今回の伝右川再生会議は、大野元裕埼玉県知事をお招きし、『埼玉県における川

国際環境経済学科10周年記念事業

第10回

伝右川再生会議 2024

入場無料

11月16日(土) 14:00-15:30

埼玉県における川との共生について 大野元裕 埼玉県知事

独協大学 DOKKYO UNIVERSITY

【主催】獨協大学経済学部国際環境経済学科・環境共生研究所  
【運営】伝右川再生会議運営スタッフ



との共生』をテーマとして基調講演をいただいた。本会議の冒頭では、獨協大学学長の前沢浩子教授より、英国の川との共生についての興味深いお話を交えて、キャンパスの脇を流れる伝右川に対する親しみを込めたご挨拶を頂いた。知事の基調講演では、環境・社会・経済の持続可能性の実現に向けて埼玉県が取り組む様々な河川政策の事業が紹介と、行政が果たすべき今後の役割についても貴重なお話を頂いた。

このシンポジウムでは、大野知事による基調講演に続き、環境共生研究所研究員の米山昌幸教授による伝右川再生会議の開始に至る経緯と10年間の伝右川再生会議の歩みが紹介された。続くパネル報告では、学生による発表が行われ、本学の活動を代表する3つの学生団体が行う伝右川再生への取り組みについて報告が行われた。原田奈穂(国際環境経済学科3年)と菜花千里(国際環境経済学科4年)、島田隼人(国際環境経済学科4年)の3名によって伝右川再生に向けた学生による活動の報告が行われた後に、パネルディスカッションとして、大野知事と3名の報告者に加え、米山教授をコーディネーターとして議論が交わされた。

原田氏の報告では、自転車サルベージ活動についての報告がなされた。これは、2001年から継続して行われている活動であり、伝右川をはじめに近隣の古綾瀬川や辰井川、芝川において不法に投棄された自転車などの廃棄物の引き上げを地域の人々と合同で行うものである。菜花氏の報告では、伝右川の水質調査に関する報告が行われた。2022年5月から行われた計50回の水質調査の結果を分析したものであり、1年間を通した透視度およびクロロフィル濃度の変化および透視度とクロロフィル濃度との相関について検証している。島田氏による報告では、カヌー活動に関する報告がなされた。間伐材をもとに学生が自作したカヌーを使った親水体験や川の清掃活動について報告された。



続いて行われたディスカッションでは、時間の関係により県知事への質問を行うことはできなかったものの、各学生の発表について知事から一人一人の学生活動に対する高い評価を頂き、今後も大学と行政が連携して伝右川の再生に向けた取り組みをより一層活発に進めていくことの重要性が提案され、獨協大学の学生活動の意義を再確認することができた。最後に、獨協大学環境共生研究所長の浜本光紹教授より、本会議の総括と参加者への御礼が述べられて閉会した。



#### 4) 意見交換会

意見交換会には、卒業生、在校生、教職員合わせて120名ほどが参加して、世代を超えて学科の連携を深めるための情報交換の機会となった。この会は、2023年に獨協大学の第二のキャンパスとして誕生したコミュニティスクエアで行われた。この建物は年間のエネルギー収支がゼロを実現した建築物 ZEB (Net Zero Energy Building) であることから、国際環境経済学科が掲げるSDGs推進に相応しい会場として選ばれた。

意見交換会では、初めに山根一真元特任教授から当時の思い出やこれからの時代の問題に対応できる人材育成の重要性についてお話を頂いた。また、学科での学びを生かしながら社会で活躍されている高継(旧姓佐藤)エミリー氏、阿部純也氏、西田尚弘氏の3名の卒業生に、学生時代の思い出や学びと現在の仕事との関りについてお話を頂いた。高継氏は資源の循環型社会に貢献する石坂産業株式会社に就職し、会社が運営するサステナブルフィールドで環境教育を実践している。阿部氏は学生時代から公務員を志望して熱心に勉強して経済産業省関東経済産業局に入局後、学科に関連したエネルギー問題の行政事業や政策立案で活躍している。西田氏は、学生時代からサッカーを行っており、大学入学時から将来子供たちにサッカーを教える仕事に就くことを希望していた、現在は千葉県県の公立中学校の教員として、サッカー部の指導にも熱心に当たっている。



高継(旧姓佐藤)エミリー氏      阿部純也氏      西田尚弘氏

後半の時間は、同窓生やゼミなどの様々なグループで旧知を暖めながら、和やかな一時と自由な意見交換を楽しみ、学科の10周年を共に祝うことができた。参加した卒業生と在校生の交流も深まり、とても有意義な会となった。最後は、国際環境経済学科の今後について藤山英樹教授から、学生・教員共に積極的な情報発信を行い、学科をさらに盛り上げていきたいという趣旨のお話を頂き、学科の益々の発展を祈念して閉会した。

# 座談会

## 「獨協大学を卒業して金融の道へ

## ～世代を超えたそれぞれの思い」

### 企画趣旨

「大学の価値は卒業生がつくるもの」・・・大学はキャンパスを巣立って様々なバックグラウンドで活躍する「卒業生」という素晴らしい資産を抱えている。創立60周年を迎える今、仕事で家庭で経験を重ねてきた卒業生たちは、どんなことを考え、どんなキャリアを作ってきたのか、今回は「金融」というカテゴリーで集ってもらい、それぞれの思いを語ってもらった。

### プロフィール

#### 有吉 秀樹

獨協大学経済学部経営学科教授  
博士(学術)

1997年3月 早稲田大学法学部卒業。  
富士銀行入行。1999年同行を退職し、社会人大学院を経て、2006年4月より本学に着任。2016年4月より現職。専門はマーケティング戦略、ブランド戦略。近年はゼミ生と共に様々な企業経営者を訪問し、ヒアリングを通じた企業分析を重ね、戦略立案するプロジェクトを数多く実施している。



#### 柴田 千賀

埼玉りそな銀行 浦和中央支店  
個人渉外統括マネージャー

2006年3月 獨協大学経済学部経営学科卒業。埼玉りそな銀行入行。エリア限定職(当時の事務職)として埼玉りそな銀行に入行。窓口事務業務を経て、2006年7月より店頭営業及び個人渉外を担当。2019年にマネージャー登用試験に合格。2023年より現職。3児の母として、仕事と家事育児を両立。



#### 三浦 健太

三菱UFJ信託銀行 人事部

2015年3月 獨協大学経済学部経営学科卒業。三菱UFJ信託銀行入社。2017年5月までリテール本部企画にて投資商品の導入を担当。その後、2022年3月までリテール事務企画にて、センター立ち上げや投資商品のDXを実施。現在は人事部にて制度変更等の対応に従事。



#### 加藤 大貴

千葉銀行 習志野台支店

2022年3月 獨協大学経済学部経営学科卒業。千葉銀行入行。入行店ではローン窓口業務を担当。2023年10月より二カ店目へ異動。個人渉外業務に従事。現在に至る。



### 経歴と銀行の変容について

**有吉:** 皆様、本日はお集まりいただきありがとうございます。創立60周年を迎える獨協大学が今後もその価値を向上させていくためには、卒業生の皆様のご活躍とその発信が欠かせません。今回は経済学部から多くの卒業生が輩出されている金融機関の皆さんをお呼びして、大学時代から現在までの仕事を通じた人生の棚卸をしていただきながら、これからを担う若者たちへメッセージを出せればと思います。ファシリテーションを務めます経済学部の有吉です。私もこの職に就く以前は金融の世界に身を置いていました。1997年、富士銀行に入行し、合併してみずほフィナンシャルグループとなる前に退職しました。それでは、皆様にも自己紹介とこれまでの業務内容についてお話しします。

**三浦:** 2015年3月に獨協大学を卒業後、三菱UFJ信託銀行に入社しました。リテール本部に2年ほど勤め、投資商品の導入を担当した後、事務の企画セクションに異動してDX化を進める業務に5年ほど携わり。今は人事部におります。

**有吉:** 最初から本部は珍しいですね?リテールの場合、ほとんどは支店配属のイメージがあります。私が銀行員になったときも同期が200人ほどいましたが、ほとんどが支店配属でした。

**三浦:** おっしゃる通りです。270人ほど同期がいましたが、その約半分以上がリテールに配属され、リテールの95%ぐらいが支店でしたね。私から数えて3年間だけ本部配属が行われましたが、今はないと思います。

**加藤:** 2022年に獨協大学を卒業しました。現在は2店舗目になります。



1店舗目では住宅ローンや無担保ローンなどの窓口を担当しておりました。2店舗目では主に個人のお客様を相手に投資信託や保険、相続関連の業務に携わっています。

**有吉:** 最初、銀行の場合は、まずOJTと称して各セクションを回りますよね？

**加藤:** そうですね。10月ごろまではジョブローテーションが行われました。預金窓口やローン、営業を回り、その後、担当が決まるという形をとっています。ただ2店舗目で業務が大きく変わることは少ない事例ですね。

**柴田:** 私は埼玉りそな銀行に入行した後、最初は一般職、窓口業務に携わり、信託業務、運用商品の営業職に携わっていました。育児休暇を何回かとり、現在は特に富裕層のお客様に対し、住宅ローンやアパートなどの融資、投資商品の提案などを担当しています。

**有吉:** 一般職から現在の業務に転身されたんですね。奇しくも皆様、リテールを中心に携わって来られたわけですが、お話をうかがっていると、今の銀行はこれから時代に向けてどうキャリア形成をさせていくか試行錯誤しているのではないかと思います。この点では、人事部に配属されている三浦さんはどう思われますか。

**三浦:** 銀行は人が資産ですから、人材育成や配置はかなり強く意識していると思います。

**有吉:** 人材育成について、現在の銀行は、専門性を重視しているのか、銀行の業務全般をさせていくのか、どちらの方向で進めているのでしょうか。

**三浦:** 私が勤めている銀行は信託銀行ということもあり、特に専門性を重視しています。この4月からプロフェッショナルジョブ制度を導入し、いわゆるジョブ型人事制度も意識しながら、より専門性のある社員が活躍できる体制を構築しています。

**加藤:** 私の場合は地方銀行ということもあって、デジタル化を進めて窓口を縮小させてはいるものの、やはり店舗を残していこうという方針に変わりはありません。コンサルティング提案、お客様が生まれてから亡くなるまで窓口で相談できることを目指していますから、どちらかと言えば、スペシャリストというよりはゼネラリストのような人材を育てていこうとしているのではないのでしょうか。

**有吉:** それは地方銀行と信託銀行の業務特性の違いがあるということでしょうか。

**三浦:** いえ、加藤さんのおっしゃっている内容も、投資信託だけであればいいわけではなく、総資産営業ができなければならないということにつながると思います。結局、プロを作っていくという意識が強いと思います。

**有吉:** たしかに、地方銀行と信託銀行もお客さんの要望にゼネラルに依っていくプロを目指すということでは共通していますね。高度成長期からバブル期にかけての銀行の手法は預金を集めてそれを原資として貸し付け、その利ザヤで稼ぐやり方でした。時代を重ねていくにつれて銀行のありようも変わってきているのでしょうかね。柴田さんは3人の中で最も長く銀行にお勤めかと思いますが、銀行のありかたについてどのようにお考えでしょうか。

**柴田:** そうですね。確かに最近の銀行は、個人のお客様のコンサルタントといった形が多いと思います。

**有吉:** そのコンサルティングの中身はどういうものなのでしょうか。

**加藤:** どちらかというと資産形成の方が多いです。お客様だけでなくご家族を含めた提案が求められますね。

**有吉:** インターネットが主流の世の中で個人のお客様またはそのご家族と密接な関係を構築するのは工夫が必要だと思うのですが。

**三浦:** そうですね。弊社は信託銀行ということもありますので、次世代に何を残していくべきかも見ながら、ご家族を含めた資産形成を提案していきます。お客様自身が気が付いていない潜在ニーズを深掘することが信託銀行の存在意義として多くを占めていると思います。そのためにも専門性を磨くことでお客様本位の営業を目指しています。

## お客様本位とは？～銀行とお客様の関係性について

**有吉:** 私も銀行で勤めていたので感じるのですが、口では「お客様本位」とは言っても実際はなかなか難しいのではないのでしょうか。

**三浦:** そうですね。正直なところ、最初は混乱もあったと思い

ますが、弊社では「Fiduciary Duty」という考え方を定めており、徐々にお客様本位という考えは浸透してきていると思います。

**加藤:** 難しいところは確かにあると思いますが、私の場合は変化の最中に入社した世代のように思います。以前と比べ、お客さまといかに接触し提案数を増やすかなど、成果に至る過程も重視するようになっていっていると感じます。求められる姿も時代に合わせ少しずつ変化していると思います。

**柴田:** 私も銀行の変容を非常に感じています。今はネット銀行が台頭していて、商品だけでは生き残っていきません。企業とつながりがあるという持ち味を生かし、ビジネスマッチングのお手伝いをする。金融以外のところもやっていけるように変わっていつている過渡期であると思います。

**有吉:** ただし、コンサルティングの領域まで入ってくると他にも競合があると思うのですがその辺はどう思いますか？税理士、司法書士など士業と呼ばれる人たちもコンサルティングに力を入れていますね。

**三浦:** どちらかというと税理士事務所や弁護士事務所などとは協力関係にあると思っています。彼らは商品売る人ではないので競合という意識はないです。

**有吉:** 私の専門であるマーケティングでは、企業と顧客は単に商品やサービスの購入・販売の時だけを考えるだけでなく、常に両者の関係性構築が大切と言われています。皆さまのお話から考えて、金融機関でもその方向に来ていると感じました。

**柴田:** 単に商品売る目的だと次々にターゲティングを変えなくてはいけないので大変です。そこでお客様との関係性を構築した上で、それを深めていくようにしています。

**有吉:** たしかに昔は、関係を築くために「ご機嫌伺い」と称してよく社長の所に訪問していましたね。そういう点で関係を築く上で努力していることはあります。

**加藤:** 定期的に対話を通じてお客様の近況を伺っています。地方銀行、メガバンクだけでなく多くの競合他社が入り込んでいるのでお客様の感情をつぶさに捉えていかないとニーズのキャッチに出遅れてしまうと感じます。

**柴田:** お客様に「気づき」を与えることを意識しています。例えば住宅を買いたいというお客様がいらしたときにご自身が認識しているものはもちろんのこと、プラスαに「もしかしたらこういったものはどうでしょう」「こういった解決方法があります」という具合です。こちら側は知識を身につけていますから、付随する問題や将来のことも提案できますから。

**有吉:** 潜在ニーズに気づくためには専門知識も必要になりますね。先ほどのお話にもありましたように専門分野を磨くという話と符合するような気がしました。このように考えると、お互いの信頼関係を築いていくために捉えなくてはいけないものは、時代を問わず今も昔も必要なことではないかなと思いました。その中でコロナ禍はかなり大変だったのではないのでしょうか。どのような対応をされたか教えてください。

**柴田:** 個人情報の観点からテレワークが難しかったです。ZOOMや電話で話はできますけれども対面でないと大変なところがありました。会ってお話がしたいお客様は多いですし、会ったからこそ築かれる関係もあるので一つの訪問に神経を注いで尽力しています。

**三浦:** コロナが始まった当初からインフラ整備も始めました。また非対面チャネルを立ち上げ、お客様の希望に沿いながら対面と非対面を使い分けていました。

**有吉:** 立ち上げた専門部署は現在どうなっていますか？

**三浦:** まだ縮小していません。コロナ禍が終わっても、非対面チャネルは拠点が少ない地域に住むお客様のための受付窓口として機能しています。

## 今後の銀行の存在意義について

**有吉:** 高度経済成長期を通じて、日本経済の発展は銀行による間接金融が支えており、バブル崩壊後には不良債権に悩みながら色々な変化の中で銀行に求められていることが変わっていったと思います。今銀行が取るべき道、存在意義はどう設定していますか。

**三浦:** リテールに関わらず、お客様のニーズに対応すべく様々な商品





▲座談会風景

を用意しています。その中ですと、新たに仮想通貨やグリーンインフラに特化した会社を立ち上げています。世の中の変化に対応しながら、信託銀行ならではの独自のスキームを活用しています。

**柴田:** 先ほどお話ししたコンサルティング以外でも、弊社は「ラボ玉」というものを立ち上げて、新規企業を応援するなどして埼玉県の経済を活性化していこうとイノベーションを起こしています。

**有吉:** 新産業創出を応援することは金融機関として非常に大切なことと思うのですが、預金を原資にしている銀行は難しいではありませんか。

**三浦:** 弊社は上場していない段階でもスタートアップを支援しています。特にデジタル領域では提携という形で新しい仕組みを構築することも行っています。

**有吉:** 確かにそういった意味で銀行には社会的存在意義が求められていると思いました。

**三浦:** 社会的意義という側面から言いますと、昨今の賃上げに関する世論を受けて、新入社員の新任給の改定など社会課題に対してより強い責任を持ってより先陣を切って対応していくというマインドはあると思います。

**柴田:** うちも上げました。

**有吉:** 昔から銀行は金融庁や日銀など監督官庁の存在が大きく作用し、横並び意識が強いと言われてきました。今も、「どこの銀行も新任給を上げた」というお話がちょうど出たところです。この特徴や姿勢は今後も続いていくのでしょうか。

**一同:** (笑)

**三浦:** 差別化は図ろうと思っているのですけれども、すぐ真似されるし、真似するんですよ(笑)

**柴田:** 真似するのはだいたい中小銀行です。大手銀行がやっていることを真似します。

**有吉:** 真似しやすいということでしょうか。

**柴田:** 大手銀行さんがやるならやるという感じです。こちら側から最初にやるということは絶対ないです。大手がやったらうちもやって大丈夫だろうという考えは皆あります。

**有吉:** なんでなくならないのでしょうか。

**三浦:** やはりビジネスチャンスを逃したくないからではないでしょうか。お客様に「あそこは始めたのにおたくはやらないの」と言われた際、「やっていません」とは言いづらいかと。大手銀行が先にやって良いと判断したら真似するという文化は消えないと思います。リスクも少ないですし。

**有吉:** 「リスク」というワードは銀行らしいと思いました(笑)。そういった考え方は業種、商材からくるものなのでしょうか。

**三浦:** 金融特有ではないでしょうか。金融の商品は金融商品取引法などの各法令に準拠する必要があり、差別化が難しいです。冒頭でも触れましたが、銀行の差別化は人だと思います。

**加藤:** 三浦さんがおっしゃるように、私も人が差別化の大きな要素になると思います。だからこそ前段で話したように日々のお客様との関係性づくりや、お客様のちょっとした変化を見逃さないようにする目配り心配りが大事だと思います。

**三浦:** それから、商品に大きな差をつけることができないので人をい

かに活用し続けるのか「採用」という面は非常に重要なポイントだと思っています。

## 就職活動を振り返って

**有吉:** ここで、「採用」というワードが出てきたので就職活動の話に入りましょう。就職活動を行った当時の世の中の状況となぜ金融を目指されたのかお伺いしたいです。

**加藤:** コロナの頃の就活で面接も会社説明会もオンラインが多かったです。銀行に絞っていた訳ではなく、業種は問わず受けました。銀行は年齢や価値観、見ている世界が違う方とお話できる数少ない業界であり、社会人になった後にも多くの学びを得られる業種ではないかと思って銀行を選びました。

**有吉:** 確かに若手で経営者に会うチャンスは他の業種よりは多いかもしれません。お金を扱っている以上、先方もそれなりに上の人が出てきますからね(笑)。

**三浦:** 私が就職活動を行った頃は氷河期の終わりでした。大手企業でも経営破綻している会社もあり、就職環境はやや厳しかったと思います。私も加藤さんと同様、金融に絞ってはいませんでした。どちらかといえば「金融はつまらなさそうで絶対行きたくない」とさえ思っていたほどです。きっかけは三井住友信託銀行に外向していた父からの勧めです。ある日の食事中に父が「金融は見えていないのか?」と聞かれ、「興味ないなあ」と答えたところ、「信託銀行は面白いよ。だから見てみたら。」という話がありました。説明会を受けてみると様々な業務があり、飽き性の自分に向いているかもしれないと思い、銀行も視野に入れました。大手も経営破綻するという世の中の動きを見て、「自分に市場価値をつけたい」という思いがあり、自分に専門性を身につけられるところを探し、内定を頂いていた会社の中で一番きつそうところにして今の会社を選びました。

**柴田:** 私は金融に絞りました。当時は女性が一生涯勤めるかどうか分からないグレーな時代でした。そこで一般職を選びながら、もし途中で辞めたとしても再就職しやすい業界を選びました。その中でもせっかく経済学部だったので、その知識が使えるところや興味があった運用と近いところで銀行を選びました。りそなショックの後、初めての採用でしたから、全体的な就職環境は、よくなりかけの時期だったと思います。

**有吉:** 私の時代は女性が勤め上げるということは全く定着していませんでした。200人の新入行員のうち、総合職の女性は10人。大学時代のゼミで一緒だった女性陣は、企業の人事から「総合職でいいですか?一般職もありますよ?」と聞かれるくらいの時代でしたね。

**三浦:** 私の時も少なかったです。今は全員総合職ですが、当時はまだ一般職と総合職に分けられ、総合職に來られた女性はやっぱり10人程度でした。

## 大学での学びと仕事について

**有吉:** それぞれ様々な就職活動を経て現在のお仕事を選ばれたわけですが、今のお仕事を振り返って、大学時代の学びと繋がっていると感じることはありますか?

**加藤:** 大学入学当時はそれほど勉強熱心ではなかったです。大きな



きっかけとなったのは1年生の秋のゼミ選びでした。「このままだと自分の大学生活に何も残らない。」という漠然とした不安があり、「ゼミ活動はしっかりやろう」と思いました。有吉ゼミが考えるマーケティングは、企業のプロダクトアウトというよりは、お客様がどういう思いを持っているのかを考え、そのニーズと企業文化をマッチングさせていくというものです。お客様がどういう考え方なのかを深く掘り下げて学びました。社会に出てみて金融商品は差がない分、人材がうまく差別化を図るうえで重要であると私も感じています。お客様の懐にどうしたら入れるのかは、お客様が考えていることを先読みして、「潜在ニーズに気づいてもらうか」というところだと思っています。経済学部を通して、自分本位ではなく、お客様のことを考えるということを学べて今の仕事の役に立っていると思っています。

**有吉:** 銀行は差別化しにくい商品を取り扱っているからこそ、お客様が何を考えているのかを考えるというマーケティングが仕事に活かされやすい業種なのかもしれませんね。

**三浦:** 大学入学時から就職に関して危機感を持っていました。大学受験の際にインフルエンザに罹患し第一志望に受からず、なんとか入った獨協大学だったので、大学で何かしなければならぬという危機感が強かったのだと思います。そういった危機感もあり、岡部ゼミに入りました。当時「ブラックゼミだ!」と言われていましたが、就職率は100%だったので、何かするにはうってつけだと思って選びました。ゼミでは「人的資源管理論」を主なテーマとし、経営学に関するケーススタディを5人1組程度のグループで議論し週1回プレゼンを行うということをやっていました。小手先のパワースキルやプレゼンスキルも身についたと思いますが、一番重要だったのは物事を考える力、何事も考えて思考を止めないということでしょうね。入社してからは営業経験がないまま最初から本部に配属されましたが、考える力は本部でも生かされたと感じています。

**有吉:** 私も講義やゼミ生に常々言っていますが、大学の先に学校はなく、社会人。だから大学では、単なる高校の学びの延長ではなく、これまで学んできたことを使いながらどうやって自分の頭で考えて答えを出していくかということが重要だと思っています。社会に出ると自分なりの正解をつくるという応用問題が仕事だと考えるならば、大学時代でそれに注力してゼミに取り組んでいくという経験は、全ての仕事で活かせるのかもしれませんが、特に銀行という様々なお客様を相手にする仕事で活かせるのかもしれないと思いました。

**柴田:** 私は内倉ゼミでした。私がゼミを選ぶタイミングで、前年の先輩方がりそなショックのことについて論文を書かれていました。それを読んだ際に、「銀行ってすごい面白い仕事だな」と、学生には考えられない世界を見せてもらった気がしたんです。ゼミで学ぶことも経済学部の授業も大学生のうちはなかなか普段の生活では使いません。しかし、社会に出てみるとよく使います。マーケティングや行動経済学などは社会の基礎に繋がる部分ですが、学生の頃は大切なことだという実感はありませんでした。今となっては、当時学ばせていただいたことが特に活きていると思っています。また、私ぐらいの年齢になりますと部下ができて、マネジメント力も必要とされ、それは経済学、経営学の基礎に繋がる部分であり、自分の社会人としての基礎が学べたということが大学時代だったと思っています。

**有吉:** 当時は分からないんですよ。後になってくると色々見えてくるものがある。まあ、それが教育の効果だということかもしれませんが。今の若者のなかには「今日学んで明日役に立つものを欲しい」という人がいますが、今日学んで明日役に立つものは明後日には役に立たないぞと思います。

**一同:** (笑)。

**柴田:** 学生時代、社会人経験のある学生が熱心に授業を受けていて、「なぜ、そんなに熱心なんだろう?」と思っていたのですが、今になって同じことをしたいと思うようになりました。

**有吉:** 今年、私のゼミに「大きなお子さんがいらっしゃる」という方が入ってこられました。社会人になると学び直したいと思うようになるのかもしれないですね。

**三浦:** お金を出してでも学びたいと思いますね。

**有吉:** 私もビジネススクールに通って、今こういう立場にいますが、やっぱり学び直しはよいと思っていますね。社会人になってからの学びというのは、何か学校に通って学ぶのも良いですし、仕事の中で学ぶのもよいですね。ただし、どちらにせよ、社会人になってから学びたいと思うのは、その後のキャリアを考えるからこそ、足りない学びが見え

てくるということなのかもしれません。

## キャリア形成について

**有吉:** 仕事を通じての成長やキャリア形成は大事だと思いますが、日々の仕事に忙殺され考える時間がなかったりしますね。皆さんはキャリア形成についてどう考えているのでしょうか?

**柴田:** 入ってみると仕事は面白いですし、知識を吸収することの楽しさを感じます。銀行では非常に資格取得や様々な試験を受けるよう求められます。その勉強を重ねていく中で、知りたいが増えていきました。会社は学ぼうとする人には外部スクールや資格取得支援をしてくれます。それを受けてスキルアップしていく中でその知識を活かした仕事をしたいと思い、勤め上げようとキャリアを形成していきました。りそなショックを経て女性活躍を推進してくれる会社となり、今では女性でも役職に上がれます。先輩方から始まっていて、私もどんどんステップアップしたいと思える環境でしたので、ここまで駆け抜けたという感じです。

**有吉:** 確かに銀行は試験が多く、入ってからも勉強すると先輩から言われていましたし、本当にそうでした。私も基本的に学ぶのが好きだったので銀行を選んだというのもありましたね。そういう意味だとキャリア形成において銀行という業種はいい選択肢なのかもしれないですね。

**加藤:** 私たちの会社では上司と定期的に面談をして、上司から将来はどういった姿を目指したいのかを聞かれます。若手の場合だと、まだすべての業務を網羅的に理解できていないわけではない点や、どの業務を自分は将来やっていきたいのか迷う人も多く、私もその一人だと思います。はっきりとしたキャリアプランを今描けているわけではないのですが、そういったときには出来ることを増やすことを意識しています。知識や経験が増えれば自分の引き出しが増えますし、将来使う時が来た時にきつと役に立ってくれます。だからこそ、今は関連する業務だけでなく、今携わっていないけれど、将来携わるかもしれない業務など幅広く資格などの勉強をするようにしています。業務を通して自分のキャリアをより明確にさせていきたいですね。

**三浦:** キャリアを考えるタイミングでいうと、期初に今年度1年の課題を設定して振り返りをする、年に1回部長とキャリアに関する面談をする等、色々キャリアを考えて発信するタイミングはあるのかなと思います。その上で、自身のキャリアでいうと私はハングリー精神が強く、とにかく一番になりたいと思うタイプです。そこで、少し上を見て「この人になりたい」「その人になるためにはどうすればいいのか」を考えながら働くことができました。結婚すると必ずしも自分の身だけではないので、走るペースは遅くなるものの、その精神は変わりません。自己啓発や資格取得は弊社もあります。やっぱり資格取得の仕組みやイーランニングの仕組みなどはどこの銀行も一緒なんですね。(笑)

**柴田:** そうそう。やっぱり横並びなんですね(笑)。もしかすると、同じ会社使ってるんじゃないかと思いませんか(笑)

**一同:** (笑)

**有吉:** lon1ミーティングや人事部面談など、場は用意されているけれども、その場をうまく活用できなかったり、おさなりのでやってしまったりする人も結構いると思います。そういう場をうまく自分のキャリアに使える人と使えない人にはどのような違いがあるのでしょうか?

**三浦:** 環境が大きい気がします。私の場合は憧れの先輩が身近にいたということですかね。そういう人がいないとなかなか目指す気になれないと思います。

**有吉:** ただサラリーマンは上司を選べない訳で、その中で自分だけでキャリア形成のためにやっていくというのはなかなか難しいなと思いますね。

**三浦:** キャリアチャレンジやジョブチャレンジという制度もあります。

**有吉:** 私の頃はポストチャレンジという制度がありましたが、現在は手を挙げる人は多いのでしょうか。

**一同:** 多いですね。

**柴田:** 弊社では声を上げないという上にあがれないという仕組みになっています。

**三浦:** 私の銀行ではまだそこまでは強く推し進められてはいないかもしれませんね。確かに評価項目には入っているのですが、手を挙げないと上に行けないということはないですね。

**有吉:** あっ、これはやっぱり評価項目に入るんですね(笑)。

**一同:** (笑)



**三浦:**まあ一応、自主性というところで加点されます(笑)。

**有吉:**どのくらいのポストまでチャレンジできるのでしょうか。

**柴田:**たとえば課長だったら、「何年目のどのくらいの人なら皆さんどうぞ」というオープンな場があって、そこにエントリーするという仕組みです。

**有吉:**支店長はありますか？

**一同:**聞かないですね。

**有吉:**私の頃は支店長のポストチャレンジもありました。実践を重んじる昨今の状況を見ても、ポストチャレンジ制度は増えてきていると思いますね。

## プライベートと仕事について

**有吉:**最近では日本企業も仕事とプライベートと両立するための制度が充実してきました。私も子供を育てながら感じているのですが、ある程度の年齢になってくると、仕事だけの成長には限界があります。それだけ子供を育てていく中で学びが大きく、仕事のほうでも成長できるような好循環を生むのではないのでしょうか。家族を持つこと、プライベートでの変化も、キャリア形成と無関係ではないように思います。ご結婚されている三浦さん、お子さんもおられる柴田さんを中心にその辺をお話しいただけたらと思います。

**柴田:**私は3人子供がいるので、仕事に対する真剣みというのが子供を産んでから変わりました。子供を生むと産休を取ります。産休を取って1年弱休んで復帰をします。そうすると1年前の銀行の業務と1年後の業務は全く違うんです。だから3回入社しなおすのと同じくらいの気持ちで毎回やるんです。真剣にやり直すとすると、どうしても時間の制約がかなり厳しくなってくるので、どう業務と家庭を両立させるかを常に考えるようになりました。また、両方の経験をしていると自分の知識量も増えていきます。お客様との関係を深めていくうえでも、目の前にいるお客様、女性の方だったら今までこういう苦労をしていたからこういうことが必要なんじゃないかというような視点は持てるようになりました。その結果、家庭を経験した母という視点から、会社の仕組みを変えていくような新しい提案を積極的にするようにもなりました。

**有吉:**子育てを経験することでお客様への向き合い方が変わり、より人間力もついていくことはとても素晴らしいですね。また、一度銀行から離れてそして時間が空いて戻ってくるからこそ見え方が変わってくるというお話も非常に納得しました。離れてみてはじめて実感できるものってあると思います。これは産休育休をとったことがないとわからないかもしれないですね。三浦さんはまだお子さんがいらっしゃるんですが、結婚してから仕事に対しての考え方は変わりましたか？先程、「結婚すると自分の身一つではない分、走るスピードが遅くなる」とおっしゃっていましたが…。確かに、私も現在の道に入るときには独身でした。

**一同:**(笑)

**三浦:**そうですね。確かに自分を「粉」にするまでは働けなくなったなと思います。日付変わるまで仕事をやれなくなったり、自己啓発に向かいづらくなったりというのは残念ながらあると思います。でも、覚悟は大きく変わります。自分が家族を支えていると考えると家庭の中においても責任がついてきました。ある意味、自分の身一つではない、自分だけの体ではないという風になりますので。より仕事に対して向き合い方は真剣になったと思いますね。また、年齢も重ねてきて、体の無理がきかなくなったということを考えると結婚は良い抑止になりました。(加藤さんの方を向いて)だから結婚は大事ですよ。

**一同:**(笑)

**加藤:**お二人のお話をうかがっていると、とても勉強になります。

**有吉:**結婚は、自分とは違うところ、違う価値観で育ってきた人が一緒にいるということです。最初は考えが符合していると思っていなくても、違う面が見えてくることはあるじゃないですか。結婚生活というのは楽しい面もあるけれども、難しい面もあるわけですよね。結婚による精神的成長は仕事においてもつながってくるだろうなと思います。

## 若者へのメッセージ

**有吉:**これから生きる若い人たち、これからの社会に出ていく大学生とあるいは高校生に対して何かメッセージはありますか。

**加藤:**社会に出て上司から言われた、「次の選択、行動は、『次』を考えるのではなく『次の次』を考えて行いなさい」という言葉が非常

に印象的でした。高校生の場合は大学に入って、大学生ならば社会人になって、やりたいことがたくさん出てくるとは思いますが、「その先に自分がどうなりたいか」というのを考えないと多分そこで思考も止まってしまって、社会人になって、「ただ働いているだけ」という形になってしまうと感じます。自分のありたい姿とかどう成長していきたいのかを考えることは大事なことです。

**有吉:**人は皆、目の前のことにどうしても気を取られがちです。しかし、目線を下げず、そのさらに先を見据え、どうありたいのか考えることは大切ですね。

**三浦:**「仕事をする」「働く」ことに対して、「いやだな」って感じている人が多くいらっしゃると思います。これはたぶん電車の中のサラリーマンの姿を見たり、周りの大人たちが言っているのを聞いたりして感じているのかもしれませんが。そう思っている人たちに、「社会人は楽しいですし、仕事はとても楽しいものです」という言葉を贈りたいです。ただし、自分の仕事を楽しんだり、将来を良くしたりするためには、ただ時間を過ごしていてもそういったものは得られません。私も加藤さんと同じで、将来の自分を見据えて、何がしたいか、自分の価値観はどんなものなのかを考える、やるべきことをやる、そこに向けて努力をすることが大切だと思います。

**有吉:**仕事というのは実は楽しいものであるけれども、仕事を楽しいと思える、楽しめるようになるには、マインドが大事です。仕事つらいんだと思わせているのは世の大人たちの責任なのかもしれません。だから、私も娘には私がどんな仕事をしているのか、仕事でこんな面白いことがあったなどという話をなるべくするようにしています。最近の若い人の中にはお父さんお母さんが何をやっているのか、全く知らないというお宅も結構多いみたいですね。昔のように家業を営んでいる家庭が少なくなったのでわかりにくいかもしれませんが、親が仕事の愚痴をこぼすのではなく、積極的に自分の仕事と世の中とのつながりを教えていってあげれば、若者の仕事に対する意識も変わるのかもしれませんが。「仕事はプライベートの時間を奪うもの」という思考回路のままでは、長らく社会人として働いていくのにあまりにも寂しくつまらないです。加藤さん、三浦さんはそうならないようにという意味も込めて話してくださいましたね。

**三浦:**でもつらい時もあります。

**有吉:**確かに。でも、つらいですけれども、「なんかあのときつらかったな」ってあとから思い出すことはありませんか。

**三浦:**振り返ってみて楽しかった時というのは、自分が苦労したときなんですよ。

**有吉:**ここで話している「楽しい」というのは享乐的な楽しさとは全く違います。これは大学生活の送り方にも表れると思います。なんとなくの適当な感じでキャンパスライフを無駄に過ごしていると社会人になってからもボーっとしてしまう、ボーっと過ごしてしまうと成長はないと感じました。柴田さんはどうですか。

**柴田:**2つあります。これから生きる方たちは「チャレンジをしましょう」ということと「真剣に物事に取り組もう」ということがやっぱり大事かなと思います。今の子はどちらかというと目の前にある選択肢があったら安全な方に行きがちです。日本の風土もあると思いますが、社会は意外と受け入れてくれるので、ぜひ自分のやりたいことをどんどんチャレンジしてほしいです。若い方だったらやってみたくらいのことをやってから後悔する方が絶対いいと思うので、可能性を自分でつぶさないようにしてほしいと思います。そして、どんなことでも真剣に取り組んだ方が絶対に楽しいです。目の前の仕事もそうですが、趣味でも何でもいいんです。真剣にやったからこそそれが自分にどう役に立つのか理解できます。ぜひ真剣に楽しくチャレンジしてほしいですね。

**有吉:**確かにそのとおりです。真剣にやると何らかの形で自分の糧になっていきますし、真剣にやっていると多分周りも応援してくれます。自分だけではできないと当初は思っていたことでもできるようになり、自分を成長させていく源泉になるでしょう。さて、そろそろ時間がきました。皆様、本当にありがとうございます。あっという間に時間が過ぎてしまいましたね。

**一同:**確かに。まだまだ話足りないくらいです。

**有吉:**とても有意義なお話ができただけではないでしょうか。後輩たちのためにも今後ともご協力お願いいたします。

**一同:**はい。ありがとうございました。



# 第12回 経済学部 プレゼンテーション・コンテスト 開催報告

～本選出場8グループが大講堂で日頃の研究成果を発表～

## 概要

第12回経済学部プレゼンテーション・コンテスト(以下、プレコン)が2024年11月6日(水)、天野貞祐記念館大講堂で開催されました。

プレコンは、(1)学生の問題解決型プレゼンテーション能力の向上、(2)研究活動・ゼミ活動の成果の紹介などを目的に、2013年度に新設されました。今回は、8つのゼミから計17件の参加申し込みがありました。学生支援制度実行委員会で慎重に審査した結果、その中から8グループを本選出場グループとして選出しました。登壇者の皆さんは普段の教室とは雰囲気が異なる大講堂での発表となり、緊張した面持ちで臨んでいるように見えたが、どのグループも、技法・内容ともにレベルが高く、素晴らしい本選となりました。

厳正な審査の結果、以下のグループと個人にそれぞれ賞状と顕彰金が授与されました。

## 審査基準

- 内容(課題設定、論理展開、革新性、実現可能性)
- プレゼンテーション(言語表現、ストーリーテリング、資料等の完成度)
- チームワーク(チームビルディング)
- 全体的評価

## 選考結果

### 最優秀賞

山森哲雄ゼミ チームえれべすか  
「大学内のエレベーターおよびエスカレーターの問題をナッジで解決」

### 優秀賞

吉田翔平ゼミ Aグループ 「買い物難民問題対策「移動販売」に対する新しい補助金制度の提案」  
李 凱ゼミ TEAM☆KAI 「キャンパスツアー専用音声ガイダンスシステム「Dokunavi」の提案」

### 経済学部長奨励賞

鈴木 淳ゼミ Cチーム 「EVの自動運転で地方の交通を維持できるのか」

### アイデア賞

米山昌幸ゼミ 地球温暖化防止プロジェクト  
「地域連携を通じた獨協大学カーボンニュートラル実現に向けた提案」

### 敢闘賞

高松和幸ゼミ たかまつたけじん 「ファストファッションの問題を消費者目線で提案」  
堀江郁美ゼミ D!verse開発コアチーム 「キャンパス共創プラットフォーム「D!verse」の提案～“おもしろさ”溢れるキャンパスを目指して～」  
脇 拓也ゼミ 新世代!脇ゼミからの刺客 「『経済的に賢く、お洒落を手に入れよう!』大学内フリーマーケットプロジェクト～先輩から後輩への学内循環の創出～」

### ベストプレゼンター賞 (個人表彰)

渡邊和也さん(脇ゼミ、経済学部経営学科2年)  
日野原楓さん(米山ゼミ、経済学部国際環境経済学科4年)



▲本選終了後に全員で記念撮影

# エスカレーターとエレベーターの利用マナー向上を目指して ～大学内の問題をナッジで解決～

山森ゼミ チーム えれべすか 高野稜大 太田真聖 倉澤風 小竹麟大良 岡本壮太郎

## 研究内容

私たち「チーム えれべすか」は、学内設備の利用マナーを行動経済学の理論を用いて改善できるのか検証しました。今回の研究で対象とした設備は西棟エスカレーターと東棟の中央棟側エレベーターです。エスカレーターでは歩行による危険な利用と右側を空けて左側のみに乗る非効率な利用によって長蛇の待機列が発生していました。埼玉県で「エスカレーターの安全利用に関する条例」が施行された後もこの状況の改善は見られませんでした。エレベーターでは利用待機列が通路を塞ぐことで、車椅子使用者やお身体に不自由がある方がエレベーターを利用しづらい状況に加えて、周辺の階段やトイレ、東棟中央棟側入口ドアが利用しづらい状況がありました。上記の課題に対して、私たちはゼミで学んでいる行動経済学を用いて解決を目指しました。エスカレーターでは作成したナッジ・ポスターをエスカレーターの乗り口に設置して、右側利用の増加と歩行利用の減少を図れるかを検証しました。エレベーターでは作成したナッジ・ステッカーによって待機列を整理させ、通路を塞ぐ時間を減少することができるかを検証しました。

エスカレーターにおいては、待機列が発生する時間を抑制する効果が確認できたものの、右側利用の増加と歩行利用の減少の効果を確認することはできませんでした。しかし、エレベーターにおいては、待機列を整理させて通路を塞ぐ時間を大幅に減少させる効果を確認することができました。これらの結果を踏まえて、エスカレーターで右側利用の増加と歩行利用の減少を促せなかった原因を質問紙調査によって検証するとともに、エレベーターではステッカーを撤去した後も整列する効果が持続するのかを追跡調査しました。ナッジ・ポスターに対する不快感について質問紙調査をおこなった結果、マナー違反をする頻度が高い人ほど啓発ポスターに対して不快に感じる確率が高くなること、人の目のデザインがあるポスターに対しては本人のマナー違反頻度に関わらず不快に感じる確率が高くなることが分かりました。エスカレーターのポスターには目のデザインを採用したため、ポスターに対して不快に感じた利用者がナッジ・メッセージと反対の行動をとった可能性があります。また、エレベーターのステッカー撤去後の利用状況を調査したところ、ステッカー設置時と同様に整列している状況が確認できたものの、その頻度は設置時に比べて減少していることが分かりました。待機列が通路を塞ぐ以前の状況に戻る前に、ステッカーによる誘導を大学として実施していただく必要があると考えます。

## 感想

プレゼンテーション・コンテストの発表とその準備を通して、自分たちの研究を知らない人に向けて発表することの難しさを改めて感じました。今大会の反省と課題を来年度の卒業研究に活かしていきたいと思います。本研究を進めるにあたり、同期の山森ゼミ生、山森

先生ならびに事務局の皆様にも多大なご協力をいただきました。とくに、山森ゼミの東周吾さん、河野紗恵子さん、志村夏玖斗さん、根岸秀さん、日高優さん、茂木彩花さんは、自分たちの研究で忙しいにも関わらず早朝から観察・記録を手伝ってくれました。また、施設事業課、総合企画課、学生課、教務課の職員の皆様には、研究計画に関する私たちの拙い説明に真摯に耳を傾けていただき、立て看板の貸与、事務局内の調整、学生・教員からの問い合わせ対応など、さまざまなお力添えをいただきました。この場をお借りして、本研究にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

(文責：経済学科3年 高野稜大)

## 指導教員(山森先生)からのコメント

チームえれべすかの皆さん、最優秀賞受賞おめでとうございます。これまで山森ゼミでは、グループ研究や卒業研究を通して行動経済学の知見をさまざまなテーマに応用してきました。しかしナッジの効果を現場で検証するといった実践的なフィールド調査は初めての試みです。対象としている設備が(エスカレーターとエレベーターそれぞれ)一か所であるため比較可能な対照群がなく、厳密な意味での「実験」ができないという制約のもと、ナッジ前後における両設備の利用状況、待機列の発生回数や継続時間を詳細に観察・記録するとともに、曜日や時間帯、当日の利用人数や天候など、時間変動要因以外の要因を可能な限りコントロールすることでナッジの効果を見事に測定してくれました。また、ポスターやステッカーを作成する際には、デザインの細部に至るまで徹底的にこだわり、妥協を許さないひたむきな姿勢に深く感心しました。皆さんの努力が最優秀賞という形で実を結んだことを指導教員として大変嬉しく思います。今回の研究成果を踏まえ、大学としてエレベーター周辺にステッカーを設置する方向で検討しているそうです。小さな変化かもしれませんが、自分たちの研究が社会を変えたという経験は、皆さんにとって大きな自信となり、新たな挑戦への原動力となることでしょう。





# 買い物難民対策「移動販売」に対する新しい補助金制度の提案

吉田ゼミ Aグループ 吉原咲希 新井ひかり 小杉乃琉 八木澤龍雅

## 【研究概要】

私たち吉田ゼミAグループは、「買い物難民対策における移動販売を支援する新しい補助金制度の提案」というテーマで、約1年間にわたる研究を行いました。現在、日本の都市部では、大型都市開発や地価の上昇といった要因により商店街が次々と閉鎖され、それに伴い、従来の買い物環境を失う住民が増加しています。さらに、高齢化の影響で食料品へのアクセスが難しい人口(買い物難民)も年々増えており、この状況は深刻な社会問題となっています。

政府の調査によると、この「買い物難民」の問題は農村部よりも都市部で顕著であり、政府は企業に補助金を支給して支援を行っています。しかし、こうした取り組みにもかかわらず問題は改善されず、むしろ悪化している現状があります。こうした背景から、私たちは特に都市部に焦点を当て、政府の補助金支給方法に何らかの課題があるのではないかと考え、研究を始めました。

本研究では、産業組織論で取り扱われているホテリングモデルを用い、現在の補助金支給方式と、私たちが提案する「分割支給方式」の下で企業が得られる利益を比較しました。その結果に基づき、分割支給方式における補助金額の具体的な設定を行いました。

## 【本選までの経緯】

この研究を進める中で、私たちが最も時間をかけ、苦労したのは研究の軸を決めることでした。「買い物難民問題」をテーマに選んだものの、全員が納得できる具体的な研究の方向性を見つけるまでには、同ゼミ内の他グループの倍以上の時間がかかったと思います。軸が決まった後も、全員が初めて取り組むホテリングモデルを使った分析や、文字式を用いた理論的なアプローチに苦戦しました。

特に二泊三日の夏合宿では、朝から夜まではほとすべての時間をモデル分析に費やすほどの大変さでした。テーマ設定から最終的な考察に至るまで、困難の連続でした。

さらに、本選の2週間前に学校外で行われたインター大会では、自信のあった研究内容に対して審査員から厳しい指摘を受け、大きな悔しさを味わいました。しかし、その経験を糧にして、本選までの2週間は毎日集まり、大学の閉館時間まで詳細な分析の見直しや、分かりやすいプレゼンテーション作りに全力を注ぎました。

## 【本番を終えて】

今回、経済学部プレゼンテーション・コンテストで優秀賞を受賞することができました。本選に臨む前に出場した外部のインター大会では、入賞もできず予選敗退という悔しい結果に終わりました。しかし、その経験を糧に、最優秀賞を目標に掲げ、チーム一丸となって今回のコンテストに挑みました。ゼミの代表としてコンテストに挑むことはあまりに荷が重すぎると感じましたが、互いに励まし合い高め合いながら本番を終えることができて、ほっとしました。結果として最優秀賞には届かず、悔しい気持ちも残りますが、インター大会での反省点を一つひ

とつ見直し、短い準備期間の中で改善を重ね、結果につながれたことは大きな成長につながったと感じています。特に、課題の明確化や議論の深掘りを通して、プレゼンテーションの内容を磨き上げるプロセスは、チーム全員の努力の結晶でした。

今回の経験を通じて、困難な状況に直面しても粘り強く話し合いを続けることの重要性や、他者からの助言を積極的に受け入れる姿勢の大切さを改めて実感しました。これらの学びを今後のゼミ活動や社会での挑戦に生かしていきたいと考えています。このたびはこのよう

な貴重な経験をさせていただき誠にありがとうございました。  
(文責:経済学科3年 八木澤龍雅)

## 指導教員(吉田先生)からのコメント

優秀賞の受賞おめでとうございます。目に見える結果が出たということであれは限りです。

買い物難民問題の中の企業への補助金支給方法に着目し、現行方法で発生している補助金を支給している企業が赤字になっているという課題を解決する方法について研究しました。現在の一括支給方法と異なり、補助金を分割して、かつ利子を上乗せして支給するという方法を考え、その方法では事前に費用の高い、つまり赤字で撤退しやすい企業が補助金を受け取り、市場に参入することを防ぐことができるという結果を示しました。

重要な社会問題を扱い、かつ学生達自身のアイデアで課題解決の方策まで考え出せたという点において高水準の研究報告であると評価していますが、それが外部からも一定の評価を受けて安心しました。その前の学外のコンテストで手厳しい評価を受けてこともあり、プレコンまでに、よりわかりやすい発表になるよう、プレゼン資料、話し方の改善など最後まで努力を惜しまなかった点が今回の結果につながった要因だと思っています。ゼミ時間以外に多くの時間を投入し、グループで話し合い、私のコメントへの対応をしていたということで、グループにおけるシナジーの多い、有意義なグループ研究になっていたと思います。



## 「DOKUNAVI」提案から得たもの

李ゼミ TEAM ☆ KAI 緑川翼 中川純成 岩戸優香 嶋龍清 柴沼美郷 櫻井颯人 仲野早希 表航陽

私たちのゼミは、半ば親睦を深めることを目的にプレコンへ出場していた側面がありました。しかし同時に、学生生活の中で「何かを成し遂げたい」という強い思いを共有する同志でもありました。プレコンで提案した「DOKUNAVI」は、ゼミを通して培った技術を存分に活かす機会となりました。その成果は、使用想定画面やスライド資料のデザイン、動画制作に如実に表れていたと思います。

結果は、正直想定以上のものでした。プレコンを通して喜びを分かち合い、メンバー同士の心は繋がったと考えています。私たちはこの経験を、この成功を、さらなる成長への第一歩にしたいと強く願っています。

(文責:経済学科3年 緑川翼)



### 各メンバーの感想

**緑川翼:**チームの代表として、不慣れながらもマルチタスクをこなし、メンバーを引っ張っていけたと思います。急ピッチで準備を進める中、協力してくれた仲間には心から感謝しています。辛いことも多々ありましたが、賞状をいただいた瞬間はかなり目が潤っていたと思います。

**中川純成:**8人で作業を進めると、連携を取る難しさに想像以上に苦労しました。授業後の作業や、チャットで意見を出し合うことは大変でしたが、それと同時にいい経験・思い出になった。

**岩戸優香:**沢山の方々の前でお話することは、この先社会人になったときに沢山あると思います。そんな場面で、今回の経験を自信に繋げ、活かしていきたいです。

**嶋龍清:**ゼミの仲間と日頃の活動に向き合い成果を共有するという良い経験を得ることができました。また、実際に職員の方にお話を伺うことにより、大学のオープンキャンパスについての理解も深まりました。

**柴沼美郷:**当日壇上に立ち発表することが出来なかったのが、資料作りを中心に参加させていただきました。まず個人で担当の資料や意見をまとめ、その後に全体で合わせて形にしていく方法で進めていたので、一人一人の認識のすり合わせや資料のつなぎの部分が大変難しかったです。

**櫻井颯人:**元々発表自体は得意な方で緊張もさほどしないタイプでしたが、本番では台本が飛んでしまい思った通りのパフォーマンスをすることができませんでした。プレコンは私の弱さに気づく良い機会であり、私自身を成長させる機会になりました。

**仲野早希:**チームで話し合いや協力作業をしていくうちに着実に完成度を上げながら中身が出来上がっていった経験は大学生活においてとても貴重な時間だったと感じています。

**表航陽:**緊張感の中、ゼミのアイデアを表現できることがとても楽しかったです。他の参加者との切磋琢磨もあり、自己成長を感じられました。

### 指導教員(李先生)からのコメント

優秀賞の受賞おめでとうございます。今回の受賞は、チーム全員でアイデアの創出から、インタビュー調査の実施、PPTの作成、動画作成、発表の練習等、皆さんが努力した結果です。今回の活動を通して、今後の人生にお役に立つと信じています。



## EVの自動運転で地方の交通を維持できるのか

鈴木ゼミ C チーム 齋藤響 堀内マイク 青木竜也 羽石莉瑠 橋本染奈

### 本選までの経緯

私たちは「EVの自動運転で地方の交通を維持できるのか」というテーマで、プレゼンテーション・コンテストに参加させていただきました。最初は単にEVという方向性のみ決め、様々な情報集めるという調査を行っていました。それぞれのメンバーがEVにおける興味のある領域を調査し、情報集めは順調に進んでいました。しかし、応募書類作成の段階で問題が発生しました。当初のEVという方向のみでは、領域が大きすぎたため、論点が多数、存在してしまいました。この論点の絞り込みがうまくいかず、応募書類の作成が一時的に止まってしまいました。この問題に対して私たちは皆で意見を出し合い、また鈴木先生に相談することでなんとか論点を完成させることができました。

ここでの話し合いで「EVの自動運転で地方の交通を維持できるのか」というテーマが決まりました。この段階ではテーマは確定しましたが、まだ内容に具体性はありませんでした。ですので、改めて皆でどんな追加の資料やデータが必要か話し合い、上手く作業を分担することで少しずつですが内容を確かなものにしていきました。また今回の研究では簡易的な数式の作成やデータ分析をすることで様々な数値を概算できるモデルを作る必要がありました。ですので、夏休み前に誰がどこのデータを分析するか決め、長期休暇を活かしました。秋学期では、実際に夏休みで仕上げたモデルをゼミ内で発表し、先生からアドバイスを頂くことでより良いものに改善していきました。最後の時期は先生からのアドバイスを意識しながら、パワーポイントでのスライドの作成とチーム全員での発表練習を行い、本選を迎えました。

### 本選と感想

まず本選当日の初めにはマイクなどの機材やスライドのチェックをしました。チームメンバー全員、大講堂の壇上に上がるのは初めてであり、緊張と不安を感じていました。また事前にゼミで行った発表練習では設定された15分という発表時間を大幅に超えてしまい、当日の時間管理に関してもチーム内に緊張感がありました。そして、私たちのチームは発表順が最後ということもあり、他のチームの発表に気持ち的に圧倒されてしまいました。しかし、今までの準備に力を入れてきたことを思い出し、最善を尽くそうとチームで気持ちを切り替えて発表に挑みました。私たちのチームは原稿を事前に準備していたため、台詞を忘れてしまうなどの事故は防ぐことができました。また発表の時間管理に関しても事前の話し合いで意識していたため、チームの連携が上手くいき、設定された時間内に発表を収めることができました。個人的な反省点としては時間を意識したため、少し早口になってしまったと思いました。ですが、チームで最後までやり切れたので良かったです。

全体を通しての感想としては、全力を尽くしチームで良い経験が

できたと思いました。応募書類の段階で上手く内容がまとまらないという問題に足を止めてしまうこともありました。しかし、先生にアドバイスを頂きながら、チームで協力して1つ1つ問題を解決して見事、発表を形にすることができました。また今回の経験はチームメンバー全員にそれぞれ学びを与えたと思います。そういった意味でも今回の研究全体を通して、実りを得られたと感じています。チームメンバーそれぞれの強みを活かしながら発表を終えられたことに達成感を感じるとともに、賞を頂けたという形で皆の努力がしっかりと報われて本当に良かったと思いました。

(文責: 経営学科3年 齋藤響)

### 指導教員(鈴木先生)からのコメント

Cチームの本選出場と経済学部長奨励賞おめでとうございます。世界では自動運転EVが普及して未来が明るいかにように言われがちな現在ですが、このチームはその現実性をデータから検討して発表しました。このチームは当初からEVをテーマにすることは決めつつ、良い面だけでなく問題点も取り上げたいという雰囲気がありました。新しい技術が社会に普及するとき、このような視点は重要です。実際、日本は他の国々に比べてEVで後れをとっているという論調がみられがちです。従来の技術を新技術で置き換えるようなイノベーションがありますが、現実には人々がいて、ある国や地域では置き換えが進む一方、別の国では新技術では何かが足りないため簡単に置き換えができない事態も起こり得ます。このチームでは、日本の地方での免許返上者が交通難民になりかねない状況であることを、EVの普及台数や充電スタンドの台数などから数字で明らかにしようとしました。その計算には粗いところもありますが、社会的に大事な問題を提起したと言えます。このように良い面の宣伝にのせられるだけでなく、それ以外にも目を配る視点を持ち続けてほしいです。



# 地域連携を通じた獨協大学カーボンニュートラル実現に向けた提案

米山ゼミ 「地球温暖化防止プロジェクト」 チーム 日野原楓 丹野悠太 松森智久

## 本選までの経緯や感想等

私たち、米山ゼミの地球温暖化防止プロジェクトは、今年度のプレゼンテーションコンテストに日野原楓(国際環境経済学科4年)、丹野悠太(同4年)、松森智久(経営学科3年)の3名で出場し、地域連携を通じた獨協大学のカーボンニュートラルに向けた提案を行いました。

私たちのプロジェクトでは、ライトダウン活動や省エネ推進会議などを通して、大学の省エネ活動に取り組んでいます。東京都と埼玉県では温室効果ガスを多量に排出する大型事業所に対して、CO<sub>2</sub>削減義務を課しており獨協大学もこれに該当します。今年度は第3計画期間の最終年度にあたり、大学は目標の22%削減は達成見込ですが、来年度からの第4計画期間では50%削減が見込まれ、国の温暖化対策推進法では2030年度までに46%削減が義務づけられています。これは2020年度のコロナ禍で大学へ全く入構ができなかった時のCO<sub>2</sub>排出量に抑えることを意味します。私たちは、現在の大学のライトダウンの取り組みや太陽光発電などの創エネのみではCO<sub>2</sub>排出の削減に限界があり、削減目標達成に向けてさらなる取り組みが必要であることを再認識しました。

大学のカーボンニュートラル達成に向けては再エネ電源の購入かJ-クレジット購入の2つが手段となり、さらにカーボンニュートラルへの取り組みを義務としてではなく、大学の強みとして捉え、地方との連携が鍵であると考えました。私たちはまず、横浜市と東北13市町村とで広域連携をしている事例を見つけ、仲介となる(株)まち未来製作所にヒアリングを行いました。まち未来製作所の取り組みである「e.CYCLE」は、再エネ発電事業者からまち未来製作所が再エネ由来の電気を通常価格で買い取り、そこに上乗せした金額の一部を地域活性化原資として市町村に還元される仕組みです。また、伊丹市、阪南市、飯南町のJ-クレジットを通じた連携を行っている(株)ソーシャルエックスにもヒアリングを行いました。森林が豊かな飯南町から森林クレジットの通常価格よりも現地活動分が上乗せされた価格で伊丹市が購入します。その森林クレジットを購入した伊丹市は、飯南町へ植林活動に出掛けることができます。

私たちは2社の仕組みを踏まえ、復興知事業で関わりを持ち、再エネポテンシャルが十分にある福島県田村市と連携し、広域の地域循環共生圏を形成することで大学のカーボンニュートラル達成と田村市への地域貢献を提案しました。ヒアリングを行った2社を仲介させることで、2025年度で復興知事業の補助金期間が終了してしまったあとも、地域活性化原資やクレジットの上乗せ分を学生の田村市への交通費として活用することで、日頃から行っている小学校や高校での人材育成の活動を継続的に実施することができます。

私たちは獨協大学がCO<sub>2</sub>排出の削減義務があることを大学の強みとして捉えています。カーボンニュートラル達成に向けて、ただ再

エネを購入するのではなく地域と連携することで、双方がWin-Winになる関係性を作り出すことができます。今後もこの仕組みを大学側と田村市側双方に提案し、実現に向けて取り組んでいきたいと考えています。

(文責:国際環境経済学科4年 丹野悠太)

## 指導教員(米山先生)からのコメント

地球温暖化防止プロジェクトのメンバーは、これまで学内で昼休みに教室の電気を消すライトダウン運動を実施したり、施設事業課が省エネコンサルタントである石本建築事務所、ヴェオリア・ジェネッツ株式会社と協力して進める省エネ推進会議に参加して、大学の省エネに取り組んできました。

また、日野原さんは1年次から、丹野さんは2年次から復興知事業に携わってくれて、2023年11月には田村市役所職員研修会「脱炭素社会を考える」において報告し、脱炭素社会を目指す意義やメリットについて職員に理解を促すなど、復興知事業の中心メンバーとして活動してくれました。

それらの経験を踏まえて、大学のCO<sub>2</sub>削減と復興まちづくりを組み合わせて、CO<sub>2</sub>削減を単なる義務履行ではなく、大学の地域貢献活動として大学の強みにしていく提案を考えてくれました。

つねに私はゼミ生にコンテスト参加のための提案ではなく、社会実装を目標として提案して欲しいと言ってきました。メンバーは地球温暖化問題をしっかりと自分事として受け取り、活動を続けてくれたと思います。しかしながら、学生が学生でいられる4年間は、提案の社会実装にはあまりに短い。だからこそ、私たちのゼミではプロジェクト活動として先輩から後輩にプロジェクトを引き継ぎながら大目標に向けて取り組んでもらっているわけです。日野原さんと丹野さんには、卒業してからもプロジェクトに関わり続け、社会実装に力を貸してくれることを期待したいと思います。





# プレゼンテーションコンテストを通しての学び ～ファストファッションの問題を消費者目線で解決する～

高松ゼミ たかまつたけじん 雲越優斗 厚木神 小林佑太 水村光汰 厚澤琴音 池本美由 久保瑞稀 和久井玲花 古川和美

## 本選までの経緯

### 1. テーマ選定の背景

私達は、すぐに取り組めることをテーマにしたいと思い、身近なファッションという観点からファストファッション問題について考えをめぐらした。ファストファッションは、沢山の問題を抱えている。衣類の廃棄による環境問題やSDGs問題があげられる。なかでも行動する事が難しいものもあるが、ここで取り上げることで少しでも聞いてくれたひとの行動や考えを変えられたらという想いもあり取り上げることにした。ファッションの問題は今日から意識を変えれば、すぐにも実現可能な行動しやすいものと考えた。

### 2. 準備のプロセス

ファストファッションというテーマを扱うにあたり、私たち大学生が自分たちの問題として捉えるために、具体的なブランドの紹介から始め、企業の取り組み、私たちにできることへと論を進めることができるように工夫することでプレゼンテーションを作成した。

### 3. プレゼンの実施

プレゼンコンテストでの発表において自分たちの思い・考えをより深く伝えるために、聴講者の方へ目線を向けることを意識し、本番で実施することができた。他のグループの発表を聞いて、テーマに関する研究不足を感じた。私たちはファストファッション問題を改善する策を考えたが、その策を実行するため、より綿密な計画・取り組みを聴講者に提示する必要があると考えた。今後は今回の経験を生かした準備作りを行いたい。

### 4. 質問やフィードバック

プレコンを通じて、ゼミでの議論や研究を深める大きなきっかけとなった。特に、外部からの視点で指摘された内容は、自分たちの研究の未熟さや新たな課題を浮き彫りにし、改善への具体的な方向性を見出す助けになった。また、今回のテーマであるファストファッションに対する関心もより深めることができた。今後は、この経験を活かし、ゼミ内でさらに活発な議論を行い質を高めていきたいと考える。

### 5. 自分たちの成長と今後の課題

プレゼンの準備を通じて、ファッションが環境に与える影響や社会に与える影響について深く学ぶことができた。また、それに関する知識を体系的に整理できた。さまざまなデータや事例の中から自分たちの求める内容を探し、選び出すという能力も向上したのではないかと感じる。今後の課題としては、プレゼンで提案した『リボン』の実現のために、より具体的な取組を考えていくことである。また、ファストファッション問題についてSNSなどで発信をし、実際に自分たちでも環境に配慮した選択をしていきたいと考える。

### 6. テーマの社会的意義と今後の展望

ファストファッションが抱える問題の社会的意義は、環境問題や労働問題などの現代社会が抱える問題を消費者や企業に気づかせる

という点にある。今後は、ファストファッションの問題が十分に周知され、消費者はより慎重な買い物行動をとることが期待されているのではないかと考えられる。また、企業は環境に配慮した生産や労働環境の見直しに取り組むことで実現する世界を期待したい。

### 7. 感想と学び

プレコン全体を振り返って素晴らしい経験ができたと感じた。プレゼンコンテストに参加するのは初の体験であり、はじめは不安を感じることもあった。仲間同士で衝突することもあったが最終的に1人1人が協力しあい、より良いものを作ることができた。仲間と協力することの大切さや、積極的にコミュニケーションをとることの重要性を今回のプレコンを通して強く実感することができた。この経験を通して得ることができた改善点や反省点を今後の学生生活に活かしていきたい。

(文責:経営学科2年 雲越優斗)

## 指導教員(高松先生)からのコメント

今回のプレコンでは、身近なファッションの問題が環境に及ぼす影響について考える良い機会となった。いわゆるファストファッション問題は、環境やSDGsに反する多くの問題を抱えている。プレコンでは、具体的なブランドの紹介を始め、その取り組みそして自分達で出来ることへと論を進め、身近な課題を取り扱っており、関心を持ちやすいように工夫した。

ファストファッションが環境や社会に与える影響を実際の事例と共に紹介し、環境破壊の改善策を提案した。今後はゼミ内でさらに活発な議論を広げていきたいとしている。

今回のプレコンでは、各自が大きく成長できたことが嬉しく思います。ゼミの中でも中核的なメンバーに育ったことに頼もしく思っています。



# キャンパス共創プラットフォーム D!verse ～共創的アプローチによる、大学生活の質の向上～

堀江ゼミ D!verse コアチーム 樋澤秀悟 柴崎結衣 羽柴吏歩子 植村公彦 川名頼嘉 岡宮光希

## 本選までの経緯

私たちは今回のプレゼンテーションコンテストで、「だれもが"おもしろさ"を感じることができる、学生中心で持続可能なキャンパスの実現」という大きな目標を掲げて発表を行いました。この目標の策定過程では、デザイン思考の観点を活用し、チーム内で徹底的な議論を重ねました。特に、共感マップを用いて学生の潜在的なニーズを探り、新型コロナウイルスの感染拡大収束後のキャンパスが直面する本質的な課題の特定に努めました。

私たちのプロジェクトで特に注目すべきは、"おもしろさ"の概念です。これをwell-being(fun! \* convenience) \* sustainabilityと定義し、単なる利便性の向上だけでなく、持続可能性を含めた包括的な価値創造を目指している点は、従来のプラットフォームとは一線を画すものです。この提案では、擬似的な"推し"AIアシスタントを中心に据え、3Dデータと大規模言語モデル(LLM)を組み合わせた革新的なアプローチを採用しています。

「ディスカバー」機能による施設の基本情報や施設利用状況のリアルタイム表示は、情報の取得を最適化し、学習や他の活動への時間配分を最適化します。また、「ディスカッション」機能は、キャンパスへの学生の声を共有し、学生の主体性と大学との協働を促進する役割を担います。

これらの機能により、学生同士がAIを交えて交流することで、学生のプライバシーを尊重しながら新たなコミュニティが生まれ、アイデアの交換や協働が促進されることを期待しています。教職員もまた、学生の声に耳を傾け、AIアシスタントが集めた情報を活用しながら、キャンパス環境の改善に取り組むことができるでしょう。

## 感想

発表を振り返ると、具体的なプロダクトを提示できなかったことが最大の課題でしたが、デザイン思考の過程を通じて得られた洞察と、ユーザー中心の視点は、私たちのプロジェクトの強みとなりました。現在、私たちは実用最小限の機能の検証段階にあり、段階的にユーザー検証の範囲を広げていく計画を立てています。この過程では、ユーザーの声に真摯に耳を傾けながら継続的な改善を行っていく予定です。

今後は、チーム内での検証を着実に進めながら、並行してAIやプログラミングの基礎的な学習も行っていきます。特に、基礎的なプログラミングの知識や大規模言語モデル(LLM)の基本的な仕組みについて、チームメンバー間で知識を共有し、学び合いながら開発を進めていく予定です。

このプレゼンテーションコンテストでご指導くださった堀江先生、このような発表機会を提供してくださった先生方、そして共に挑戦を続けるチームメンバーに心からの感謝を申し上げます。私たちは、この経験を糧に、より一層の努力を重ね、獨協大学の学生生活をより

豊かにする革新的なプラットフォームの実現に向けて邁進していく所存です。

(文責:国際環境経済学科3年 樋澤秀悟)

## 指導教員(堀江先生)からのコメント

今回コンテストに出場したグループは、それぞれが素晴らしい能力を持ち、積極的に動きながらも協力し合える素晴らしい、最高のチームでした。コロナ禍の集まらない苦しさも経験し、自分たちのためだけではなく、獨協大学全体で協力し合い、居心地の良い魅力的な空間を作っていきたいという目標のもとでスタートしたのが「キャンパス共創プラットフォーム D!verse プロジェクト」でした。

常に「みんなで楽しみたい」という思いを持ち、ゼミのロゴやTシャツなども作成し、周囲を良い意味で巻き込みながら、チーム全体でゼミの素晴らしい雰囲気を作り上げてくれました。もちろん、システムの機能を考える際にも、大学生の意見をサンプルとして丁寧に収集し、時間をかけてアイデアをしっかりと磨き上げました。プロジェクトは着実に形になりつつあります。最高のメンバーによる取り組みが、もうすぐ大学生活をさらに楽しむためのアプリとして獨協大学の皆さんの手元に届くことでしょう。これからのさらなる進化を心から楽しみにしています。





# 学生内で循環させるフリーマーケットの創出についてのご提案

協ゼミナール 「協ゼミからの刺客」 渡邊和也 王瑜婷 横山晴香 武居美作 八木桃子

## 報告内容

私たち協ゼミナール「協ゼミからの刺客」チームは、古着と学生への経済支援をかけあわせた持続可能なキャンパスイベントを目的とした、フリーマーケットプロジェクトを提案させていただきました。

まず私たちは学生が気軽に参加し楽しめるイベントを増やしたいという思いのもと、プロジェクトテーマを選定しました。いろいろな候補が挙がりましたが、学生により興味をもていただけるようファッションに関するイベントを計画し、またサステナビリティにも貢献したいという思いのもと古着を活用した提案をさせていただきました。また実際に獨協大学生にアンケートをとり、ファッションに関する具体的な悩みを探しました。特に、実際に服に使える金額と、使いたい金額とでは乖離があるということや、高校から大学、大学から社会人と人生のステージが変わると共に服の需要も大きく変化するという課題から、学生の経済支援と学生内での服の循環を両立させたりサイクルショップを目指しました。また普段ゼミナールで学んでいる経営戦略論のなかから、自己を取り巻く資源や環境を明らかにする目的で行うSWOT分析を用いて、獨協大学でフリーマーケットを行うにあたっての強み、弱み、機会、脅威を明らかにしました。強みでは、お洒落とコスト削減の両立や獨協大学サステナビリティへの貢献、弱みでは、参加者の負担や品質管理、機会では、学生間のコミュニティ強化、脅威では、既存の「DOKKYOマーケット」の存在やオンライン中古車市場との競争などが挙げられました。さらにこれらをかけあわせたクロスSWOT分析によって見えた、出品者の安定確保、持続性の低さ、購入者の参加の3つの課題をもとに、出品者不在でも成り立つフリーマーケットのシステムを構築しました。

## 本選を終えて

この度は貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

協ゼミナールは私たちが2期生ということもあり、プレゼンテーションコンテストに参加させていただくのは今回が初めての試みとなりました。テーマ設定からつまづき、発表できるものに仕上げられるのか不安が大きい準備期間でしたが、無事にコンテストを終えることができたのは、夜遅くまでミーティングに付き合ってくださった協先生、親身になって何度もアドバイスをくださったゼミナールの先輩方、そしてアンケートにご協力いただいた学生の皆様のおかげです。本選を終えて、実践的な研究や学びの交換の場は、私たちに大きな達成感と成長と与えてくれたと感じる一方で、他のチームの個性と説得力あふれる発表には悔しさも残りました。今回の

改善点を活かし、ゼミナール研究をより豊かなものにしたいと感じております。今後も獨協大学の学生として、社会貢献に繋がること、大学や学生のためになるような活動に取り組んでいきたいと考えております。

(文責:国際環境経済学科2年 横山晴香)

## 指導教員(協先生)からのコメント

メンバーの皆さんお疲れさまでした。協ゼミはまだ2期目の若いゼミで、しかもチームメンバーが全員2年生という組み合わせで、初めての参加でしたが、皆さん本当に頑張りました。最初の頃はペース配分がつかめず、皆さんも(私も)苦勞も多く、不安だったと思いますが、夏休みに集まって議論したり、さらに秋学期の夜に何度かZoom会議をしたことで発表内容が固まり、全員の意識が一段高くなった気がします。

教員の私としても、過去の経験や蓄積が全くない中で、適切なアドバイスができたか不安でしたが、最終プレゼンテーションの資料構成やパワーポイントのクオリティの高さに感動しました。今年は取組賞ということで、メンバーの皆さんは悔しさや課題意識もあると思います。経営戦略論のゼミとして、是非それらについて、戦略的に分析をして今後に活かしてください。そのような振り返りも貴重な経験です。

何よりも、チームで考えをまとめてコンテストで発表したことは、皆さんの4年間の大学生活にとってかけがえのない経験になったと思います。

最後に、このような場を与えて下さった大学や委員の皆様から感謝申し上げます。



## ベストプレゼンター賞を受賞して

米山ゼミ 国際環境経済学科 4 年 日野原楓

このたびは、多くの素晴らしいプレゼンターがいる中でベストプレゼンター賞に選出していただき、誠に光栄に思います。審査員の皆様、そしてご支援くださった方々に心より感謝申し上げます。

大学入学当初、環境問題に関する知識は浅く、最初に取り組んだのは大学内の省エネ活動でした。ゼミのプロジェクトとして行った学内のライトダウン活動では、昼休みに各教室を巡回し、電力の消灯を呼び掛けました。この活動には多くの学生にご協力いただきましたが、一方で「学費を払っているのになぜ節電が必要なのか」といったご意見もいただきました。この経験を通じて、地球温暖化のような大きな問題を「自分事」として捉えてもらうには、相手の立場に寄り添い、丁寧な説明が欠かせないと実感しました。

今回のプレゼンテーションでは、大学や地域のエネルギー問題に関する提案を、一般の学生に分かりやすく伝えることを目指しました。具体的には、時間内に収めつつ簡潔で伝わりやすい言葉を選び、最後の締めくくりでは原稿を見ずに聴衆に直接語りかける形で、3年間の活動に込めた想いを伝えました。一方で、スライドの情報量が過多となり、聴衆がどこを注目すればよいかわかりにくい部分があったと反省しています。今後は、スライドの視覚的効果と内容のバランスをより意識し、さらに分かりやすい発表を目指したいと考えています。

ます。

最後に、これまで共に活動し、多くの意見を交わして成長してきた丹野さんをはじめ、ゼミの仲間たち、そして常にサポートしてくださった米山先生や大学職員の皆様に心より感謝申し上げます。この賞を励みに、提案の実現に向けて今後も努力を続けてまいります。



## ベストプレゼンター賞

脇ゼミ 経営学科 2 年 渡邊和也

この度はベストプレゼンター賞に選んでいただき誠に光栄です。この賞を受賞できたことで自分自身の話す力に、今まで以上に自信を持つことができるようになりました。

今回のプレゼンテーション・コンテストでベストプレゼンター賞を取りに行くにあたって特に意識したことを二つ紹介させていただこうと思います。

一つ目は「聞き手に指示を出すこと」です。多対一のコミュニケーションでは人数にもよりますが、全員に気を配るのは物理的に不可能です。そのため聞き手側は話し手に見られている感覚がなかったり、今何をすべきか分からなくなったりし、集中力が続かず飽きてしまうということがあると考えています。そのため、スライドのどこを見てほしいのか、プレゼンター自身を見てほしいのか、それとも何かについて考えてほしいのかをしっかりと言葉に示すべく聞き手に指示を出し飽きさせないようなプレゼンを行えるよう意識しました。

二つ目は「台本を読み上げないこと」です。もちろん事前に話したい事、伝えたいことを台本にまとめておくことは大切です。ですが、用意した文章を読み上げるだけでは一方的なコミュニケーションになってしまい、聞き手側に伝わらないと考えています。ですので、用意した台本の重要なポイント話の転換点など流れをしっかりと頭に入れたうえで、その場で聞き手に合わせた言葉を紡ぐようにしました。

そうすることでライブ感が出ますし、より聞き手と近い距離感でコミュニケーションをとることができると考えました。

以上二つが今回私が特に意識したことでした。また、これらを実践するにあたり付け焼刃になってしまわないよう、日々人前で話すようにするなどの練習は欠かせません。

最後に、話しやすいスライドを作ってくれたメンバーや、練習に協力してくれたゼミ生、たくさんのアドバイスをくださった教授、皆さんのおかげでベストプレゼンター賞をとることが出来たと思っています。本当にありがとうございました。







経済学科教授 高安 健一

学内外の多くの方々に支えられて、2024年のゼミ活動が無事に終わることができました。ポストコロナの新たな可能性を模索した1年でした。社会課題の解決に微力ながらも貢献できたと考えます。

活動の詳細はゼミのフェイスブックをご覧ください。  
(<https://www.facebook.com/takayasuseminar2017/>)

## 《学内外での活動》

- ・1月14日、6月16日、11月1-2、8日:草加市障害福祉サービス事業所つばさの森が製造したマドレーヌを構内で販売。チームつばさの森2024(15期生)
- ・2月1日:板橋区立エコポリスセンター「第22回環境なんでも見本市」に出展。草加本染LOVERS(13期生)
- ・2月3日:歓送迎会・卒業研究論文集授与式。卒業生16人(13期生)
- ・2月24日:埼玉県立草加かがやき特別支援学校高等部が獨協大学コミュニティスクエアで実施したイベントを支援
- ・3月20日:卒業式挙行
- ・3月22-24日:2年生春合宿(千葉県長生郡一宮町)
- ・4月18日:高安健一・日本経済新聞社共編著『大学生のための世界の課題発見講座—SDGsを通じて未来を探究する14講—』を日本能率協会マネジメントセンターより刊行
- ・5月11日:獨協大学前<草加松原>駅西側で開催されたWEL FESにてPICNIGOODに出店。チームつばさの森2024、UNISOLE2024チーム(15期生)。もったいないベジーズ(14期生)が冊子配布
- ・6月18日:埼玉版SDGs推進アプリ『S3(エスキューブ)』で、もったいないベジーズの活動が紹介
- ・6月18日:草加市ふるさと納税サイトのつばさの森のページで、チームつばさの森2024の活動紹介
- ・6月29日:OB・OG会を獨協大学コミュニティスクエアで開催
- ・9月18-20日:サマーセミナーを大学で開催(全学年)
- ・9月24日:埼玉県立杉戸高等学校で探究学習を指導。4年生(14期生)
- ・9月28-29日:グローバルフェスタJAPAN2024にて2年生(16期生)が取材
- ・10月12日:URコミュニティなどが主催した草加松原防災セミナーに協力。まつばら避難所リサーチ隊(14期生)
- ・11月1-2日:雄飛祭「国際開発シンポジウム with ジョイセフ」と3年生プロジェクト報告会開催。模擬店でつばさの森のマドレーヌ、教室で皮革製品販売。2日間で集めた募金約12万円で、セブンイレブン獨協大学店でお菓子を購入、コミュニティフリッジ草加や埼玉県内のこども食堂などに寄贈。

募金へのご協力誠にありがとうございました。

- ・11月10-11日:大宮高島屋前にて江崎グリコ埼玉営業所とイベント開催。D-POPerZ'24チーム(15期生)



大宮高島屋の歩道側スペース

- ・11月11日:セブンイレブン獨協大学店、ポッキー&ブリッツの日の売上が4年連続全国の店舗で1位
- ・11月14日:埼玉県民の日に埼玉県庁にて江崎グリコ埼玉営業所とイベント開催。D-POPerZ'24チーム
- ・11月16-17日:毎日新聞社、高安ゼミ、杉戸高校共催で「とうぶどうぶつこうえんでまなぶSDGzoo」開催(後述)
- ・11月29日:募金で購入したお菓子をコミュニティフリッジ草加に搬入。D-POPerZ'24チーム
- ・12月4-6日:「エコプロ2024」出展。UNISOLE2024チーム

## 《冊子・リーフレット制作》

- ・『一人一人で作る災害に強いまち～備えをあたりまえに～』まつばら避難所リサーチ隊
- ・『日本 埼玉化計画～地元野菜で築く食品ロスフリーな暮らし～』もったいないベジーズ
- ・『獨協大学SDGsキャンパスガイド～心と体の健康編』SDGs広め隊2024(15期生)
- ・『獨協大学生と学ぶ!! みんなは知っている? ポッキー&ブリッツと埼玉県のSDGs』D-POPerZ'24チーム
- ・「おいでよつばさの森～獨協大生が伝えるつばさの森の魅力～」(リーフレット)。チームつばさの森2024
- ・「イノシシ革活用プロジェクト」(リーフレット) UNISOLE2024チーム





#### 《メディア掲載・企業連携等》

- ・1月15日:NHK 総合テレビ『首都圏ネットワーク』内の「おかえり天気」のコーナーに、そうか革職人会の 富田典明さんと SOKA LEATHER SAVOR (14期生)らが出演



草加市文化会館伝統産業展示室ばりっせより生中継

- ・6月:そうか革職人会が申請していた、ゼミ生発案のブランド「UNISOLE」(ユニソレ)の商標登録が完了
- ・11月1日:『広報そうか』11月1日号で「学生×伝統が創る新しい未来」として UNISOLE2024チームが紹介
- ・12月13日:毎日新聞電子版「高校生・大学生がプロデュース『SDGzoo 開催』」動物園で命の大切さやSDGsについて学ぶ。2年生(16期生)と3年生有志(15期生)

SDGsチーム(13期生)が2022年12月に東武動物公園で、生物多様性を学ぶためのSDGzooスタンプラリーイベントを開催。今般、関西で同様の活動をしている毎日新聞社より協力依頼があり、11月16-17日に「とうぶどうぶつこうえんでまなぶSDGzoo」を共催した。杉戸高校の生徒さん約70名もボランティア参加し、2日間で1,500人ほどの家族がスタンプラリーを完走。ゼミ生は「いき物教室」の司会も担当した。

電子版のなかで「東武動物公園での開催にあたっては、獨協大学経済学部、高安健一教授のゼミ生や県立杉戸高校の生徒が企画をプロデュース、株式会社エイチワン、江崎グリコ株式会社、株式会社みずほフィナンシャルグループ、ミライフが協賛した。」と紹介された。2024年に江崎グリコ株式会社埼玉営業所と活動を共にしてきたゼミ生がゴール地点に立ち、冊子「みんなは知っている? ポッキー & フリッツと埼玉県のSDGs」を配布したことや、嶋崎愛美さんのコメント「たくさんの人に地域のことやSDGsについて知ってもらえてよかったです」などが紹介された。



東武動物公園で活動するゼミ生



スタンプラリーのゴール地点



本年度も徳永ゼミでは通常の授業に加えて、参加者を集い共同研究グループの活動を行っています。今年度は、「デジタル通貨の普及による金融システムの変化」と「円安」の二つのグループに分かれて共同研究を行いました。

## 1.「デジタル通貨の普及による金融システムの変化」

参加メンバー：

3年生：勝聖那、廣武蔵、小山将瑚

2年生：大澤圭吾、志田龍之介、池川汐音、延松舞桂、望月天雅

### はじめに

近年ビットコインをはじめとする仮想通貨のニュースが世間をたびたび騒がせています。またPayPayなどの電子決済が普及しています。これらのように現金を使う場面が少しずつ減少しているのが現状です。私たちの共同研究グループは金融のデジタル化とは具体的に何なのか。既存のシステムに取って代わるものなのか。また金融のデジタル化が商業銀行にどのような影響をもたらすかを中心に考察しました。

### 第1回発表（6月4日）

第1回の発表では、金融のデジタル化についての理解を深めました。現在のほとんどの金融業務はIT化されていることを知りました。またビットコインをはじめとする仮想通貨には特徴や利便性がありますが、問題点も多く挙げられました。匿名性が高いことで悪用されることが、価格の浮き沈みが激しいことなどです。ビットコインの不安定さを改善するために、新しい仮想通貨が誕生したことが分かりました。

### 第2回発表（7月2日）

第2回の発表では、新たに登場した仮想通貨であるステーブルコインやCBDCについて調査しました。ステーブルコインはビットコインとは異なり価値が安定しているため決済手段として使いやすい反面、マネーロンダリングに利用されることや、金融を不安定化する恐れがあります。CBDCは国が発行するデジタル通貨であり、現在は金融システムが確立されていない途上国を中心に導入が進んでいます。1つの例としてナイジェリアのCBDCであるeナイラは金融包摂促進が目的で、銀行口座を持たなくてもeナイラを利用できることが分かりました。

### 第3回発表（10月22日）

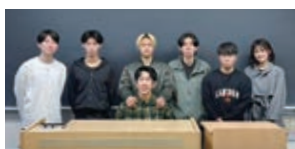
第3回の発表では、ステーブルコインとCBDCについてさらに深く掘り下げ、その背景や概要を把握し評価しました。ステーブルコインの1つでFacebookが行ったリブラというものがありました。金融包摂や国際送金の効率化を目的とし、ステーブルコインの弱みであったマネーロンダリング利用を防止する克服策も備えていました。しかし規模が大きくなると、規制当局や政治的な圧力の影響で最終的に計画が廃止されてしまいました。CBDCに関しては中国で発行されているデジタル人民元にフォーカスしました。新型コロナウイルスの影響で実証実験を開始したもので、他の先進国と比べると着実に進展しています。さらに中国人民銀行はアジアを中心に越境決済の試験運用を行っています。狙いとしては脱ドル化や、金融市場でのデジタル人民元の存在感の強化が挙げられました。

### 第4回発表（11月26日）

第4回の発表では、これまでの発表の総括と商業銀行の今後のビジネスチャンスについて議論しました。商業銀行のビジネスチャンスとして、今年から石川県で導入されたデジタル地域通貨というものをロールモデルにして、全国の地方銀行に展開できれば良いのではないかと考えました。デジタル地域通貨は誰でも利用することができ、自治体が発行するポイントが付与されます。またその地域に特化したものであるため、地域活性化の観点からも良いビジネスであると考えました。

### おわりに

金融のデジタル化について議論してきましたが、先進国では特に進歩していないというのが現状です。現金で不便がないことや、既存のシステムが出来上がっているが故に新しいものを毛嫌っている印象です。しかしこれまでの通貨の歴史に倣うと、最先端の技術や知識を用いることは至極当然のことです。そのため金融のデジタル化は今で言うところまで浸透していませんが今後必ずトレンドになっていくのではないかと考えます。その際日本が競争に打ち勝てるように、そして商業銀行が生き残れるように、今後デジタル地域通貨の観点から方法を考えていきます。



## 2.「円安」

参加メンバー：

3年生：佐々木拓海、堀内元気

2年生：雨田圭介、小蔵由依、倉持里奈、坂下温大、鶴見絵利花、福山拓実、柳町嶺志、横須賀奨

### はじめに

近年、日本は大幅な円安が進んでおり、数年前まで1ドル=110円だったのが今では1ドル=150円台になっています。私たちはこの大幅な円安の原因や現在の円安が国民に与えている影響について調査を行い、日本経済が抱えている課題と発展のための道筋について考察しました。

### 第1回発表（5月28日）

第1回では、研究を始めるにあたり、外国為替市場や外国為替相場の仕組みを学び、取引形態や変動相場制に移行後の円ドル為替レートの推移、為替レートの決定理論について理解を深めました。その結果、日本は2022年3月からドル高円安の動きが一気に加速しており、1997年の円安水準を超えていることが分かりました。また、為替レートの推移について説明する決定理論について、物価からの評価を行う購買力平価説、経常収支からの評価を行う国際収支説、金利政策からの評価を行うアセット・アプローチの3つの説が有力であることを知りました。そして、現在の日本は過度な円安を抑えるために為替介入を行っているが、その効果は限定的であることも分かりました。

### 第2回発表（6月25日）

第2回では、前回の研究で判明した3つの為替決定理論の有効性を知るための調査を行いました。各理論が日本経済と為替レートの関係性をどの程度正確に評価できるのか、今後の為替レートの動きを予測し得るものなのかについて評価を行いました。その結果、購買力平価説は長期的な推移を予測する指標となるが短期的には大きな乖離も見られること、国際収支説は昔は成り立っていたが日本の貿易収支が赤字に転落して以降の説明には適していないこと、アセット・アプローチは短期的な推移を予測することはできるが長期的な変動の説明はできないことなどが分かりました。どの理論も完璧に為替を説明できるものではなく、状況に応じて使い分けて考える必要があることが分かりました。

### 第3回発表（10月29日）

第3回では、各理論を元に日本経済の現状を説明し、円安が国民に与えている影響を分析しました。その結果、どの理論から見ても現在の円安は輸入物価の上昇を招き生活の負担を増加させている一方、輸出のメリットはほとんど生かされていないことが分かりました。また、円安の原因にはウクライナ侵攻のような世界的な経済情勢の変化によるエネルギー資源の高騰や日米の金利差の拡大、貿易赤字の拡大などが関係していることが分かりました。そして、その根底には日本経済が30年間停滞気味であり、諸外国と比較して経済成長の度合いに大きな開きが出ていることに原因があると結論付けました。

### 第4回発表（12月3日）

第4回では、日本経済の回復に向けた道筋を考察しました。新たな視点として、労働生産性が為替レートを決定するという視点を取り入れました。生産力の高い国ほど、物価水準や実質為替レートが高くなるというパラッサ・サミュエルソン効果を基に、日本経済を評価した結果、日本は先進国の中で下位に位置しており、円安もこれに起因していることが分かりました。円安から脱却するためには労働生産性の向上が不可欠であり、そのためにはデジタル化を中心に、実務に即した教育機会の提供や企業評価制度、働き方の改革が必要だと考えました。これにより「競争力の強化」を進め、一人当たりの生産性を高めることで経済全体を活性化できると考えました。

### おわりに

現状のままでは、日本の円安が解消される用途は立っておらず、経済成長も停滞している日本は緩やかに衰退していくこととなります。成長を続ける諸外国に追いつくためにも労働生産性の向上は重要な役割を担っており、私たちはデジタル化や教育改革を通じて生産性向上を目指すべきだと考えていますが、実現には多くの課題が残っています。今回の研究で得た知見を活かし、今後も日本経済の動向に注意を払い、経済回復に向けた最適な方法を模索していきたいと考えています。



山森ゼミでは毎年学外のプレゼンテーション大会に出場して研究発表を行います。本年度は5グループがインナー大会、3グループがインター大会に出場し、1グループが行動経済学会のポスターセッションに参加しました。また、本年度はスポーツ大会を開催したり、初めてゼミフェスタに参加したりと、例年以上に活動的な1年でした。本年度の山森ゼミの活動について、ゼミ長の志村夏玖斗が報告します。

## ～ゼミ合宿～

本年度のゼミ合宿は9月に神奈川県三浦市で行われました。研究報告がメインとはなりませんが、花火やコンパなどを通じて学年の垣根を越えた親睦を深めることができ、合宿以後の活動にも良い影響がでていると実感しています。初日は2・3年生によるグループ研究の発表会が行われ、先生や4年生、他のグループからのご指摘・アドバイスを基に今後の研究方針の見直しや課題の洗い出しをすることができました。夕食後は発表内容やスライドの見直しを行い、翌日の発表に備えました。2日目はグループ研究の再発表と4年生による卒業



研究の報告会が行われ、1日目に続いて貴重な意見交換の場となりました。その夜に行われたコンパでは、2年生主催でビンゴ大会が開催され、2日間の疲れをものともせず盛り上がりました。最終日の3日目は猿島と鎌倉を観光しました。研究のことは一旦脇に置いて、存分に観光を楽しむことができました。

## ～第64回インナー大会・第70回インター大会～

山森ゼミでは毎年、学外で開催されるプレゼンテーション大会への出場を目指して研究を進めています。本年度は10月13日に開催された第64回インナー大会(日本学生ゼミナール関東部会大会)に全5グループが、10月20日に開催された第70回インター大会(日本学生経済ゼミナール大会)に3グループ(河野班、田中班、張班)が本ゼミから出場しました。

- 河野班: 河野・志村「低品質・低価格商品に対する非合理的な消費者行動」
- 田中班: 田中・東・岡本「チケット高額転売問題の経済学的アプローチ」
- 張班: 張・根岸・小竹「食品ロスを削減するために～選択型コンジョイント分析により消費者が賞味期限に関する意識調査～」
- 高野班: 高野・太田・倉澤「エスカレーターとエレベーターの利用マナー向上を目指して～大学内の問題をナッジで解決～」
- 日高班: 日高・茂木「飲み放題の選択心理とその抑制策」

夏のゼミ合宿や中間報告会など研究発表の場は度々ありましたが、この2大会と後述する行動経済学会は学外で発表する貴重な機会となります。自分たちの研究を知らない人に向けて、どのように伝えられるか、資料作成段階から各グループで準備を重ねてきました。その結果、インナー大会では高野班が分科会で3位入賞を、インター大会では河野班が分科会で2位入賞を果たすことができました。他大学の発表からも多

くを学び新たな視点から研究を見直して今後に繋げられたこともあり、結果以上に有意義な経験となりました。



## ～第12回 経済学部プレゼンテーション・コンテスト～

経済学部プレゼンテーション・コンテスト(以下、プレコン)に、山森ゼミから高野班が出場し、最優秀賞を受賞することができました。当日は現ゼミ生に加え、卒業生の先輩にもお越しいただき、山森ゼミ一丸となって大会に臨めたのではないかと思います。

## ～行動経済学会第18回大会～

本年度の行動経済学会は12月8日に立命館大学の大阪茨木キャンパスで開催され、本ゼミから高野班が出場しました。本大会は前述した大会のようなプレゼンテーション形式ではなく、ポスターセッション形式での発表であったため、ポスターの作成から皆で入念に準備を進めてきました。学会ということもあり、行動経済学を専門とする多くの研究者にコメントやアドバイスをいただきました。全員が初めてのポスターセッションでしたが、皆で協力して乗り切り、大きな達成感を得ることができました。



## ～おわりに～

本年度は、ここでは報告しきれない活動も多く、充実した1年となりました。例えば、前年度から復活し、好評であったスポーツ大会が開催され、気分転換と交流の場として非常に有意義なイベントとなりました。来年度もこれまで以上に充実した、より実りのあるゼミとなるよう、ゼミ生一丸となって活動していきたいです。

(文責: 経済学科3年  
志村夏玖斗)







経済学部経済学科教授 湯川 益英

湯川ゼミでは、「よく遊びよく学べ」の精神のもと、民法を中心に、民事訴訟法・商法・憲法・刑法・刑事訴訟法といういわゆる「六法」について学んでいます。

2年次(演習Ⅰa・Ⅰb)では、法理論について、テキストの講読→グループ毎でのレジュメの作成→報告→討論といった手順で学ぶ学修が行われ、3年次(演習Ⅱa・Ⅱb)では自由報告や模擬裁判によって法実践の在り方について学びます。そうして、4年次(演習Ⅲa・Ⅲb)では、卒業研究の作成によって、それまで学んできた法律学の学習成果を、ゼミ生それぞれが自分自身の関心があるテーマに則して応用・展開する作業が行われ、3年間のゼミ活動が総合されます。

また、新たなゼミ活動として、公務員や企業の法務担当として活躍しているOG・OBを招いて、行政や企業経営における法実務の実践についてのお話をうかがう講演会や交流会を始めました。

(ゼミ幹事一同)



## OG・OBによる講演会

### OG・OBとの交流会

今回は、本学ロースクールの出身で企業法務に従事する秦さんをお招きし、お話をうかがいました。

講演会では、民間企業における法務部門の役割と責任について詳しく学ぶことができ、法務業務は企業における法的問題の予防と解決に重要な役割を果たしており、その業務内容は契約書の作成など多岐にわたることが分かり、実践的な知識を得ることができました。

さらに、交流会では、就職するまでの体験談をうかがうことができました。

(半村晏子・舞原すずな)



## 模擬裁判

模擬裁判では、物的担保制度と人的担保制度を取り上げました。例えば、家を建てるために銀行からお金を借りるときとか、企業が運転資金を金融機関に融資してもらう場合には、貸す側は債権の回収を確保しなければなりません。そのために、担保物権として、留置権・先取特権などの法定担保物権、抵当権・質権といった約定担保物権があります。

また、何ら物的資産がなくても、他人が代わりに借金を支払ってくれるという信頼関係がある場合には、人的な担保として保証人・連帯保証人を立てることができます。これらは、投融資や債権回収の場面で非常に意義のある法制度ですが、担保責任の範囲などをめぐっては様々な問題も指摘されています。

今回は、確立した判例や裁判例を扱って、特に貸し手である金融機関と借り手である企業経営者、連帯保証人になった法人の責任をめぐって、白熱した法廷闘争が行われました。

(佐藤海月・野澤未名)



## 野村證券の戦略立案プロジェクト



経営学科教授 有吉 秀樹

日本人はなぜか株式投資に対して消極的な考えを持つ傾向にあります。農耕民族であるがゆえに着実に汗水たらして働くことが尊いと考えるからでしょうか。投機的なイメージから賭博に近いものと捉える人もいるかもしれません。しかし、株式に興味があるか否かを問わず、「野村證券」の名を知らない人はいないでしょう。野村證券はこれまで日本の金融業界、証券業界にどのような影響を与え、今後どのような役割を担っていくのでしょうか。2023年冬～2024年春にかけて、有吉ゼミではじめて株式、債券、投資信託などの商材を正面から採り上げ、その歴史と消費者動向を分析し、リーディングカンパニーとして業界を牽引してきた「野村證券」を題材としてマーケティング戦略の立案を進めました。

野村證券の歴史は大阪の両替商として名を馳せた初代野村徳七の子、信之助が2代目徳七を名乗ったところから始まります。家屋敷をすべて担保に入れるなど狂気の沙汰とも言えるほどの相場への執念、その一方で早くから精緻に経済動向を分析して株価予想を顧客に提供する姿勢など、創業者の人間性を理解することには皆ずいぶん苦労しました。また、数々の書籍からは、「働き方改革」が叫ばれる今日から見れば「常軌を逸している」としか思えないような“モーレツ”な仕事ぶりが窺い知れて皆一様に驚かされました。しかし、そんなハードな環境で育ち巣立った「野村マン」たちは今も日本で、そして世界で活躍を続けています。私たちは有吉先生のお力を借り、古巣を想う心の強い野村マンの方々にインタビューする機会を得ました。

野村企業情報株式会社 元副社長の新田喜男様は、戦後の野村證券を作り上げた歴代社長についてくまなく解説してください、大蔵省を頂点とし銀行を中心とした間接金融の枠組みの外に置かれた当時の証券業界の現状、そうであるがゆえに創意工夫や海外市場への早期進出が求められ、百戦錬磨の経験が蓄積されていった歴史を俯瞰しながらご教授くださいました。多くの人が野村證券に対して抱く「長時間労働・厳しいノルマ」のイメージは単なる激務ではなく、「やりきる文化」として創業期からの思想を脈々と受け継いでいるものだ…株式会社ZUU Wealth Managementの小河原資久様、中園和博様の言葉もとても印象に残りました。このようなインタビューの機会を生かし、野村證券に伝わる精神や体質を浮き彫りにして戦略立案へとつなげることができたことは望外の喜びです。

分析の成果を机上の学びで留めず、実際にお話を聞き、学びをより深いものにする活動は、学外に多くのネットワークを持つ有吉ゼミならではのでしょう。経営層の立場から常に高い視点で物事を考えてこられた皆様からのお話がうかがえるのは、今後社会で活躍したい学生たちにとって、非常に貴重な機会であります。今回のプロジェクトを通じて、ゼミ現役生は達成感だけでなく、現在の課題が鮮明になりました。これからは有吉ゼミが成長し続けるゼミであるために、素直に学び続ける姿勢を大切に、自らが得たものを還元できる人間になりたいと思います。最後に、このプロジェクト全体をご指導いただいた有吉先生をはじめ、有吉ゼミ生に真剣に向き合ってくれたすべての方々に深く御礼を申し上げます。

(文責:経済学科 島田瑠里香)

### 野村企業情報株式会社 元副社長 新田喜男様のコメント

有吉教授のゼミの学生に対して「野村證券の金融界における役割」について話して欲しいとの依頼を受けました。我が国の戦後の金融政策、間接金融から直接金融に移行する金融政策、即ち興長銀を中心とする金融行政と日本の資本市場の育成と発展を目指した野村證券を中心に証券界の役割と角逐、経済のグローバル化の中で日本の証券会社を含む金融機関が企業金融に果たした役割など実例を挙げてお話ししました。学生諸君の反応は、理論でなく個々のテーマを実践した金融機関の活動について、大きな関心を示し質疑応答も含め5時間半余に及ぶ勉強会だったと記憶しています。私も率直な質問に学ぶことが多く、学生諸君も多くの刺激を受けたようでした。



新田喜男様(写真下段中央)からは戦後の証券界の歩みや野村證券の歴代社長についてお話しいただいた



# 楽しいを形に！ 堀江ゼミ2024年度活動報告



経営学科教授 堀江 郁美

2024年度も「楽しい」を形にすることを目指し、2年生24名、3年生21名、4年生18名のゼミ生で活動を行いました。今年度は、ゼミのロゴやアイコン、Tシャツ、ステッカーの作成にも取り組み、ゼミ活動の一体感を高める工夫をしました。

## 3月9日(土):草加イングリッシュキャンプ 2024

草加市教育委員会が主催する「草加イングリッシュキャンプ2024」に参加しました。今年度は、コンピュータ内のバーチャル空間で、小学3・4年生を対象に英語の簡単なゲームを通じて宝探しを楽しんでももらいました。市内の小学生100名が英語を楽しめるよう、アイデアを出し合い工夫を重ねた結果、多くの小学生に喜んでもらうことができました。



草加 English Camp

## 5月16日(木):新歓コンパ

3年生が幹事を務め、新歓コンパを実施しました。グループに分かれての自己紹介やカードゲームの後、全員で「Wiiパーティ」によるスマホ対戦を楽しみました。順位が発表されるなど、最後まで盛り上がる楽しいイベントとなりました。



みんなでスマホで対戦ゲーム

## 9月18日(水):豊洲BBQ

豊洲でBBQを開催しました。このイベントには、第一期卒業生を含む多くの卒業生が参加してくれ、大学生活や就職活動、社会人としての生活について貴重な話を聞くことができました。現役ゼミ生にとって、卒業生との交流は大きな学びの場となりました。

## 11月1日(金)、2日(土):雄飛祭

雄飛祭では、エアホッケーゲームを作成し、フォトブースを展示しました。エアホッケーゲームは簡単な英単語を作成するゲームですが、多くの来場者に好評をいただきました。また、フォトブースもユニークで楽しめる内容となり、ゼミ生全員で協

力して作り上げました。



みんなでフォトブース設置



雄飛祭ポスターとフォトブース

## 11月6日(水):プレゼンコンテスト

プレゼンコンテストでは、「キャンパス共創プラットフォームDiverse～共創的アプローチによる、大学生活の質の向上～」をテーマに発表を行いました。惜しくも入賞は逃しましたが、大講堂での発表を通じて、ゼミ生が大きく成長する機会となりました。このプロジェクトは、大学生活をさらに楽しく豊かにするための取り組みとして、今後も進めていく予定です。



プレゼンコンテスト前の緊張最高の頃

## 2025年度に向けて

2024年度も、ゼミ生全員で充実した活動を行うことができました。2025年度も、さらに楽しみながら活動を続けていきます。今後のゼミの成長と挑戦にご期待ください！



ゼミ風景



経営学科准教授 李 凱

## (1) 6月14日、講演会

イギリスバース大学のHernandez教授を招き、オンラインで「大規模データを利用した世界的教育格差の解析について」ご講演いただきました。各国の教育現状、国際的学力調査、分析手法等についてご紹介いただきました。4年生に卒論研究の研究手法に参考になります。



## (2) 7月19日、TeamLab展示会に参観

デジタルメディアアート作品がどのように作られ、表現されているかを実際にチームラボのボーダレス展示会に参観し、最先端デジタルアート作品を体験しました。学生の感想:作品の中に壁に触ると反応して光る等の演出があり、仕組みが知りたいと思いました。同じ場所でも時間が違うと全く別の空間になるので、何回行っても楽しめると思います。

全てのエリアにおいて訪れるタイミングによって描写が異なり、飽きることなくずっと鑑賞し続けることが出来ました。

壁一帯がプロジェクションマッピングで埋め尽くされていてアート同士の境界がない。360°展示空間が壁や天井も含めてアート作品で包まれており、どの方向を見ても美しい景色が広がります。



## (3) 9月20日、夏合宿

複数台のプロジェクターを利用したプロジェクションマッピング、及び人の動きを検知できる測域センサーを利用したデジタルアート作品の作り方を勉強しました。



## (4) 11月1、2日雄飛祭に出展

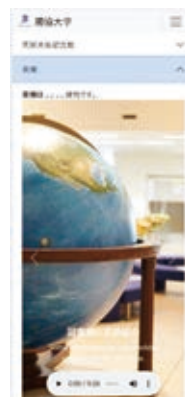
床に投影し、足の動きに合わせて、光影音がリアルタイムに変

化する作品を展示しました。二日間で合計319名が来場しました。特に子供が楽しく体験いただきました。保護者から大学祭に一番面白い展示、来年にもぜひ展示してほしいと好評をいただきました。



## (5) 11月6日、プレゼンテーション・コンテスト

3年生8名のゼミ生が参加し、『キャンパスツアー専用音声ガイダンスシステム「Dokunavi」の提案』を発表しました。チーム全員がアイデアの創出から、インタビュー調査の実施、PPTの作成、動画作成、発表の練習等を努力した結果、優秀賞を受賞しました。最終の集大成として、発表だけではなく、システムを完成し、学生課の職員からぜひオープンキャンパスに利用したいと好評をいただきました。



## (6) 12月6日、Dokkyo Earth Weekに展示

自転車のリサイクルを呼びかけ、自転車を活用したメディアアートを展示しました。自転車の車輪にプロジェクションマッピングし、ゼミ生が作成した30個のメディアアート作品を展示しました。来場者は獨協生がこんなに発想があり、面白いアート作品を作成できることに驚きました。転ゼミしたいと冗談を言う他学部の学生もいました。

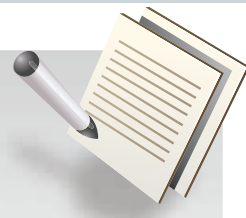


## (7) 12月9日、講演会

万里の長城の保護活動家、写真家、「長城形態図誌」著者、厳共明氏を招き、英語で万里の長城の役割、建築、自然、美しさ、保護活動等について講演をいただきました。メディアと環境保護の関係を再認識させていただきました。







国際環境経済学科 藤山 英樹

## ●全体で行ったこと

2年生ゼミ・3年生ゼミで全体的に行ったことは、3限および4限という連続時間での2年3年合同ゼミである。社会性も含め、学問を通じての人間形成を目的としている。

より具体的には、2年生は、『ゲーム理論からの社会ネットワーク分析』（オーム社）を輪読し、3年生は次年度の卒論の執筆に向けて、個人報告を行った。以上に加えて、ゼミの中では複数の班を編成し、よりアクティブな活動も行った。以下に各班の活動を記載する。

## ●文化班

目的は、個人が触れた書籍や映画を共有し、ゼミ全体で文化作品に対する理解と教養を深めるとともに、読書機会の創出や、1つの作品に対する他者の解釈を知ることで多様な視点を獲得し、卒論の執筆など今後の自身の学修に必要な力を養うことである。

具体的には、7回のゼミ内でスライドを用いたプレゼンをおこない、『マネーショート』『人間（又吉直樹）』『人魚の眠る家（東野圭吾）』などを紹介した。ここでは、作品の粗筋や解釈、その作品に触れて考えたことなどを発表した。

## ●ディベート班

目的は、ゼミや卒業論文での論理的思考力を育成し、社会で活かす力を身につける。そして、法政との合同ディベートで勝利を目指すことである。

具体的に行ったことは、法政大学との、長期的な打ち合わせ、資料形式の統一をし、今年は「プラン」導入、肯定側立論の事前開示という新しい試みも行った。また、ゼミ内のディベートでもリーダーシップをとった。

結果として、法政とのディベートで1勝1敗1引き分けを得た。



## ●草加高校班

目的は、高校生に大学と高校の学びの違いを知ってもらうこと、および、高校生に「教える」という活動を通して自分たちの学修の理解度や専門性を再確認することである。

具体的には、草加高校の学生約50名に、ゲーム理論の内容

を解説した。1名が講義形式で概要を紹介しつつ、いくつかのグループに分かれて実際に高校生にゲーム（調整ゲームなど）を体験してもらったり、ゼミ生が高校生からの疑問に答えたりした。



## ●リクルーティング班

目的は、獨協生に藤山ゼミの魅力をアピールし、学生目線の声を伝えることであり、結果として多様性のあるゼミを作ることである。

具体的に行ったことは、ゼミフェスタに参加し、学生目線の声を伝えた。また、ゼミガイダンスにゼミ生も参加し、藤山ゼミの雰囲気を感じてもらった。さらに、履修の手引きを作成にも協力し、ゼミ生の声の掲載をするにいたった。

## ●OB/OG班

目的は、ゼミのOBやOGの方々から、就職活動についていろいろとお聞きし、社会人としての働き方のイメージを具体化し、就職に向けて今何をすべきなのかを学ぶことである。

具体的に行ったことは、ゼミに来ていただいたOBの方々から、現在のお仕事や就職活動についてのお話を伺った。なお、事前にGoogle Formを作成し、ゼミ生からの質問を募集した。

また、年度末には4年生の方々からも就活の経験をお聞きする予定である。

## ●広報班

目的は、ゼミの活動を様々な人に知ってもらうことであり、リクルーティングにも繋げられるような興味を引く内容を投稿することであった。さらに、自分たちの活動を発信することで客観視できるようにすることである。

具体的に行ったことは、Instagramを立ち上げ、日々の活動の発信、草加高校との活動報告、法政大学とのディベート大会活動の報告、ゼミ活動中の写真をアップ、などである。さらに、写真のみではなく、動画を投稿することでよりゼミ内の雰囲気や活動の様子を知ってもらうように工夫をした。

## ●レクリエーション班

目的は、ゼミ生同士や先生との親睦を深めることである。つまり、主に懇親会などのゼミ以外の場でコミュニケーションを図り、ゼミ生が仲良くなることである。

具体的に行ったことは、懇親会を開催し意見交換や親睦を深めることが出来た。さらに、年度末のポスターセッションでは、来年度の新ゼミ生も来るので、そこでの懇親の企画も考えている。



国際環境経済学科教授 松枝 秀和

## 1) 新歓ゼミ親睦会-横浜歴史探訪

新ゼミ生の歓迎イベントで、3月28日に横浜を訪れました。長年、歴史遺産の保全活動を続けてこられた米山先生の案内で、桜木町駅から赤レンガ倉庫に向けて敷設された鉄道の跡を散策しながら、海外貿易を支えた港湾の歴史について解説して頂きました。その後、山の手の西洋館を巡りました。洋館内にある横浜発祥の西洋家具の歴史に興味を惹かれ、また、ドアノブの位置が私たちにとっては高い位置にあることに改めて気づかされました。外国人居留地は異国情緒溢れる独特な街並みと雰囲気が漂い、歴史遺産を大切に残すことが魅力ある街づくりに必要だと強く感じました。普段何気なく歩いている横浜の街がどのようにして発展して現在の姿になったのかわかる一日となりました。

(文責:経済学科2年 小泉健斗)



(山の手の洋館にて)

(港に向かう線路跡)

## 2) 合同学外研修活動-JAXA 筑波宇宙センター

松枝ゼミのテーマである地球環境科学をより深く学ぶため、茨城県つくば市にあるJAXA 筑波宇宙センターを5月24日に訪問しました。最初に、第一線で活躍する研究者の方々から、宇宙から温室効果ガスを観測する高度な技術とその原理に関する講義を受けました。特にJAXAが世界に先駆けて打ち上げた温室効果ガス観測技術衛星いぶき(GOSAT)について詳しく解説して頂きました。また、宇宙観測技術を応用した観測機器を民間の旅客機に持ち込み、それを利用した主要都市における大気汚染の調査に関する最新の研究も興味深く聞きました。次に、展示館「スペースドーム」に移動し、JAXAが打ち上げた様々な衛星の実物大の展示品を目の当たりにして圧倒されました。実際に、国際宇宙ステーションの日本実験棟や補給船の試験モデルの中に入り、その仕組みも体験できます。今回の研修では、宇宙から地球環境を観測する難しさと複雑さに触れて、最先端の科学の進歩に改めて驚かされました。また、研究者の方々の長年にわたる苦労と熱意を肌で感じる貴重な機会となりました。

(文責:経済学科2年 吉田早希)



(久世先生のGOSAT衛星の解説)

## 3) 合同学外研修活動-国立科学博物館

7月20日、国立科学博物館を訪れると、まずその規模の大きさと展示の充実ぶりに圧倒されました。場所は上野公園の緑豊かな環境に位置しており、建物自体が歴史を感じさせる重厚な造りになっています。館内に入ると、現代的で洗練された展示空間が広がっており、知識欲を刺激する内容が満載でした。

日本館では、日本列島の自然と人類の歴史を詳しく紹介する展示が印象的でした。特に、ニホンオオカミやニホンカワウソの剥製は、絶滅した動物の実物を見ることで自然保護の重要性を強く感じさせられました。地球館では、恐竜の全身骨格やシロナガスクジラの巨大な骨格標本に目を奪われました。特にティラノサウルスの骨格は、その迫力とサイズに圧倒され大昔の地球に想いを募らせる瞬間でした。

また、国立科学博物館では最新の科学技術に関する展示も充実しており、ロボットや人工知能などの現代的なテーマが扱われています。これらの展示は、未来の技術に対する期待感を抱かせてくれました。訪れるたびに新しい発見がある何度でも行きたくなる博物館でした。

(文責:国際環境経済学科2年 佐々木恵太郎)



(国立科学博物館前にて)

## 4) 合同学外研修活動-国立博物館

11月8日に、秋学期の2・3年生合同学外研修として東京国立博物館を訪れました。本研修の目的は、国宝や重要文化財などを鑑賞し、日本の歴史や文化への理解を深めるとともに、ゼミのテーマである「気候と地球環境の科学」に対して多角的な視点を養うことです。

館内では、『古今和歌集』や形象埴輪をはじめとする貴重な考古資料を鑑賞し、普段は実感することが難しい日本の歴史をより身近で感じることができました。また、展示されている文化財からは、当時の生活や信仰、自然観が伝わり、人々が自然をどのように捉え、生活に取り入れていたのかを理解することができました。特にアイヌ文化の展示からは、自然と調和しながら共存している生活様式が感じ取れました。アイヌと自然環境との関係性は、現代の環境問題においても学ぶべき重要な共生の原点があることに改めて気づかされました。

今回の研修を通して、自然と共存してきた日本の文化についてより深く学ぶことができ、過去と現代の環境問題を関連づけて捉える新たな視点が得られました。

(文責:経営学科2年 塚越優太)



“持続可能な社会を創る”ための  
コンテスト参加とプロジェクトの活動報告

国際環境経済学科教授 米山 昌幸

本ゼミは、「SDGs実践と持続可能な社会の創造」をテーマに掲げて、国際社会や地域社会の抱える持続可能性の問題に、おもに経済学的視点からアプローチし、課題解決に向けて実践的に行動するPBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)に取り組んでいる。学生は専門知識を深めるとともに、社会にどう貢献できるか、社会をどのように変えていくことができるかを主体的に考えて能動的にプロジェクトに取り組み、コンテストやコンペにも積極的に挑戦している。2024年度にゼミで取り組んだコンペやプロジェクトの活動について、以下に報告させていただく。

## 「地方創生☆政策アイデアコンテスト2024」において協賛企業賞(True Date賞)、東北経済産業局長賞を受賞

「地方創生☆政策アイデアコンテスト2024」(主催:内閣府、共催:経済産業省)において、「地球温暖化防止プロジェクト」日野原楓(代表:国際環境経済学科4年)、丹野悠太(同4年)が、福島県田村市を対象地域に「福島県田村市における再エネを活用した分散型エネルギーシステム構築の提案」を提案し、地方第二次審査にて「東北経済産業局長賞」を受賞した。また二次審査を通過し、最終審査会でプレゼンする機会をいただき、協賛企業賞(True Date賞)を受賞した。同チームは3年連続で田村市の脱炭素を目指す企画提案をまとめて3年連続で(米山ゼミとしては4年連続で)東北経済産業局長賞を受賞し、3年目にしてファイナリストに残ることができた。12/7(土)に中央合同庁舎8号館・講堂にて最終審査会に臨んで、協賛企業賞(True Date賞)をいただいた。

本コンテストは、内閣府が運営する地域経済分析システムRESASを活用し、地域を元気にする政策アイデアを募集するコンテストである。同チームは、田村市の地域経済循環率向上や温室効果ガス排出削減目標達成に向けて、農地や公共施設への太陽光発電の設置、EVカーシェアリングの導入、地域新電力の設立などを提案した。また、獨協大学と田村市の再エネ電源や森林クレジットを通じた連携についても提案した。これらを実現させることで地域循環共生圏が形成され、農業の活性化や移動手段の快適化、防災レジリエンスを高めることができる。事業収益を地域に還元させ、地域課題の解決や環境人材育成に再投資することができる仕組みづくりを提案した。

また、日野原・丹野は、「地方創生☆政策アイデアコンテスト2024」の提案内容を、脱炭素チャレンジカップ事務局(地球温暖化防止全国ネット主催)の「脱炭素チャレンジカップ2025」にもエントリーした。

さらに、「地球温暖化防止プロジェクト」は「経済学部プレゼンテーション・コンテスト」本選に出場し、「地域連携を通じた獨協大学カーボンニュートラル実現に向けた提案」を発表し、アイデア賞を受賞した。



「地方創生☆政策アイデアコンテスト2024」最終審査会のプレゼンの様子



「地方創生☆政策アイデアコンテスト2024」最終審査会記念撮影

## 本学開催の「第6回 SDGs エコフォーラム in 埼玉」の分科会への参加・発表

12/7(土)に本学で開催された「第6回 SDGs エコフォーラム in 埼玉」では、獨協大学企画として「都市と地方が支えあう脱炭素まちづくり～地域連携を通じたカーボンニュートラルの実現に向けて～」分科会を開催した。菅谷真実氏(環境省大臣官房地域政策課地域循環共生圏推進室・室長補佐)、山賀由貴氏(環境省環境再生・資源循環局 福島再生・未来志向プロジェクト推進室主査)、山口悟氏(ヴェオリア・ジェネッツ株式会社 エネルギー供給・サービス事業本部 エネルギーマネジメント・マネージャー)、木村博則氏(人・環境ラボ代表 元(株)石本建築事務所 執行役員)、琴田香織氏(田村市市民部環境課環境衛生係長)からご講演をいただいた後、日野原楓・丹野悠太が、福島県田村市との広域連携を通じて、大学のカーボンニュートラル実現に向けた取り組みについて発表し、会場で意見交換を行った。

また、「若者が創造する脱炭素な未来～2030年に向けて若者が考える脱炭素社会～」分科会には、ゼミ生が若者ワークショップコアメンバーとして参加し、企画・運営を行い、再エネ、

食と農、観光の3つのテーマに分かれて発表・ディスカッションを行い、身近な地球温暖化防止への取り組みに関して理解を深めることができた。

#### 第40回2024年 ACAP 消費者問題に関する「わたしの提言」最優秀賞内閣府特命担当大臣賞を受賞

第40回2024年 ACAP 消費者問題に関する「わたしの提言」に、松森智久(経営学科3年)による論文「プラスチック製容器包装リサイクルの課題と提案～獨協大学における弁当容器のリサイクルに焦点を当てて～」が最優秀賞「内閣府特命担当大臣賞」を受賞した。本提案では、容器包装類の多くを占める弁当容器に着目し、それをリサイクルする先行事例をもとに獨協大学での再資源化に適した弁当容器の導入、および回収率向上を目的とした弁当容器デポジット制度導入の提案を行った。日本では廃プラスチックの多くが容器包装用途で使用されており、実質的なリサイクル率はサーマルリサイクルを除くと約25%にとどまり、大半が焼却処分されている。そこで、プラスチック代替製品や容器包装リサイクルの課題を明らかにし、再資源化弁当容器やデポジット制度の先行事例を調査した。今後はキッチンカーや大学当局と協議を進め、獨協大学での成功モデルを他大学へと展開し、弁当容器リサイクルの普及を目指していきたい。



ACAP 消費者問題に関する「わたしの提言」表彰式後の記念撮影  
(前列中央が松森さん)

#### 第51回2024学生懸賞論文入選

第51回2024年獨協大学学生懸賞論文では、徳橋皓太(国際環境経済学科4年)による論文「地域活性化・多文化共生・消費者教育と結びついたフェアトレード運動普及の推進」が優秀賞を受賞した。

日本は少子高齢化やグローバル化に伴い、労働力不足や多文化共生などの社会課題に直面しており、持続可能な社会の実現に向けた対策が急務となっている。その中で、SDGsと親和性が高いフェアトレードとそれを地域全体で推進するフェアトレードタウン運動が存在する。欧州ではすでにフェアトレードが広く受け入れられ、地域社会に根付いているが、日本ではその認知度が低く、普及が課題である。そこで本研究では、日本と欧州におけるフェアトレードの認識や普及状況を比較

し、地域活性化や多文化共生、消費者教育との関連性を考察した。フェアトレードタウン運動が公正で持続可能な社会の実現に寄与する一助となることを期待し、効果と結びつけたアプローチを一層推進していく必要がある。今後も社会の関心や賛同の輪を広げること、持続可能な地域の発展や社会課題の解決に貢献していける人材を目指していきたい。



学生懸賞論文表彰式後の記念撮影

#### コンテスト参加報告

ムハマド・ユヌス博士が提唱するソーシャル・ビジネスを競う「YY コンテスト2024」には、「途上国の貧困撲滅に向けた支援プロジェクト」のメンバーがエントリー審査を通過し、4回にわたるワークショップに参加した。メンターの指導のもとにブラッシュアップを行ったが、本選に出場には至らなかった。同プロジェクトでは、カンボジアの現地調査を通じて教育問題や生活環境を学び、長期的な自立支援が重要であることを実感した上で、カンボジアと日本の国際交流ツアーを提案した。ツアーでは、現地のガイドが日本人参加者にカンボジアの文化や教育について案内し、双方に有益な交流の機会を提供する。カンボジア人ガイドは日本語能力を向上させ、高収入を得ることができ、参加者はカンボジアの教育現場やボランティア活動について学ぶことができる。

大学生観光まちづくりコンテスト2024(主催:大学生観光まちづくりコンテスト運営協議会)には「地球温暖化防止プロジェクト」がエントリーし、福島県大熊町を対象に「大熊町をハブとした『交通』×『新しいまちづくり』体験」というテーマで、町内に新たに再エネモビリティを導入し、持続可能かつ先進的なまちづくりをアピールするプランを考えた。さらに、大熊町を中心にふくしま12市町村をつなぐことで、福島の復興の現状を知り、除去土壌の受け入れに向けた理解を醸成する提案も盛り込んだ。

また、「地球温暖化防止プロジェクト」は同提案を「いっしょに考える『福島、その先の環境へ。』チャレンジ・アワード2024」(主催:環境省)にも応募し、最終審査会でプレゼンした。「地域活性化プロジェクト」も「チャレンジ・アワード2024」に応募し、「福島＝原発事故」というネガティブなイメージを払拭し、新たな価値と魅力を発信する必要性を提起した。従来の体験型観光に加え、福島ならではの独自性と「福島イノベーション・コースト構想」を掛け合わせた「サムライスピリット・ツーリズム」を活用し、福島のイメージ改革を提案した。



## プロジェクト活動報告

「食と農を考えようプロジェクト」は、6月と12月の“Earth Week Dokkyo”で「草加の野菜を食べよう!〜ピザ窯で作るピッツァ〜」を開催した。このイベントでは草加産の野菜に関心を持ってもらい地産地消を推進することを目的として、レンガを積んで作った窯でピザを焼き、学生に配布した。この企画では、ピザを参加者に配布する際にリーフレットを配るなど新鮮な草加の野菜の美味しさをPRすることができた。今後も地産地消につながる活動をしていきたいと考えている。

「地球温暖化防止プロジェクト」は、“Earth Week Dokkyo 2024〜Summer〜”期間中の昼休みに各教室の電気を消し歩く「ライトダウン」を実施した。また、コミュニティスクエア西側には、草加市役所よりご提供いただいたゴーヤを使った緑のカーテンを設置した。

「伝右川再生に向けた支援プロジェクト」は、小学生や地域の人に伝右川を身近に感じてもらう、さまざまな気づきを与えるような機会を提供した。8/1(木)実施の川ガキ体験事業によるカヌー体験会と生物調査を実施した。また草加市立花栗南小学校の「ふるさと草加学習」において授業協力をを行い、9/11(水)伝右川観察会に同行、10/31(木)伝右川の歴史などについての講義、11/7(木)伝右川の水質検査、11/20(水)アクリルたわし製作ワークショップの4回の授業に協力した。また、11/16(土)開催の「第10回 伝右川再生会議」では、大野元裕埼玉県知事をお招きし、「埼玉県における川との共生について」というテーマで基調講演をいただき、埼玉県の河川行政について詳しいお話を聞くことができた。パネルディスカッションには米山ゼミから島田隼人(国際環境経済学科4年)が登壇し、これまでの伝右川再生に向けた支援プロジェクトの活動報告を行った。大野知事とパネルディスカッションに座る貴重な経験となった。また、11/23(土)「そうか環境とくらしフェア」にも参加して、子ども向けにアクリルたわし製作ワークショップを実施した。さらに、2/8(土)には埼玉県主催「川の再生交流会」に参加した。ポスターセッションでは、プロジェクトの活動内容を発表し、参加者との情報交換を行った。午後には「川ゴミ」や「水質改善」に関する分科会に参加し、河川への知識を深めた。



草加市立花栗南小学校の「ふるさと草加学習」での伝右川観察会

「消費者行動改善プロジェクト」は今年、日常的に使用される食品のプラスチック製容器に着目し、特に容器包装類に分類される弁当容器の回収とリサイクルを促進するための取り組みを開始した。6月に学内のキッチンカー17台を対象にGoogleフォームを用いたアンケート調査を実施し、弁当容器の使用状況や業者の意識を把握した。この調査を基に、現在使用されている容器のコストや仕入れ先、使用頻度を特定した。また、キッチンカー業者への再資源化容器導入の可能性を検討するため、山形県新庄市の株式会社ヨコタ東北を訪問した。今後、アンケート調査や見学を通じて得た知見を活かし、具体的な制度設計や学内外の協力体制構築に取り組んでいきたい。

「途上国の貧困撲滅に向けた支援プロジェクト」は8/29(木)〜9/6(金)にカンボジア・シェムリアップにて、トンレサップ湖や現地の学校などを視察し、日本とカンボジアの生活・文化の違いや教育の格差を目の当たりにした。一方で現地の子供たちと触れ合い、熱心に勉強に取り組んでいる姿をみて、カンボジアの明るい未来も同時に感じる事ができた。また「YYコンテスト2024」では、この現地調査を基にカンボジアの教育問題解決のための提案を行った。



シェムリアップの一二三日本語教室の視察

また、10/5(土)にさいたま市立美園小学校チャレンジスクールにおいて途上国の抱える問題を、すごろくなどのワークショップを通して小学生にもわかりやすく伝えるSDGs教育を行った。カンボジアでの現地調査の経験をもとに、「カンボジアはどのような国なのか」「私たちが現地調査で何を感じたか」「貧困とは何か」についてのスライドを用いた説明と意見交換を行い、子どもたちが途上国の抱える課題に関心を持ってもらえるように授業を提供した。



さいたま市立美園小学校チャレンジスクールでのSDGs教育の提供

今年も有吉ゼミでは意欲的な卒業研究のテーマが見られた。特筆すべき3本を紹介したい。インタビューに応じてくださった、ラグビーU20日本代表元監督 中竹竜二様、一般社団法人 キャリアスポンサーシップ協会 理事 樋口和秀様、株式会社三井住友銀行 元代表取締役副頭取 清水喜彦様、本田技研工業株式会社 元取締役専務執行役員 松本宜之様、日本モーターサイクルスポーツ協会 会長 鈴木哲夫様、株式会社Geo Technology 代表取締役 後藤治様、トヨタGAZOO Racing CEO 春名雄一郎様に深く感謝する。

### 佐藤 良祐

#### 「日本の財閥と企業集団」

皆さんは「財閥」や「企業集団」と聞いて馴染みがあるだろうか。三井財閥や三菱財閥、住友財閥など聞いたこと自体はあると思うが、日本の経済界にどれほどの影響力を及ぼしているのかと言われればわからない人も多いだろう。第二次世界大戦を1つの起点として戦前と戦後では日本経済の在り方や政府からの規制が変化した。これらの財閥は解体するものの、新たに企業集団として再出発する。

私は、2年次や3年次での課題で銀行業界や証券業界など様々な企業や業界を研究する中で多くの財閥や企業集団に触れてきた。卒論では、財閥や企業集団を課題へ取り組むための1つの要素として調べるのではなく、1つのテーマとして研究を深めて「日本の経済界にどれほどの影響力があるのか」という疑問点を解消していきたい。

卒業論文を進めるうえで、インタビューを行う機会を頂いた。お話を伺っている中で、元三井住友銀行副頭取やSMBC日興証券社長を歴任された清水喜彦様は「住友財閥には自ら率先して考え動くカルチャーがある。」と仰っていた。書籍やそれに基づいて考察した仮説を持ちながら臨んだとはいえ、1社ではなく、いくつもの業種を抱えるグループ全体で同じカルチャーが浸透していることに再度驚かされた。これが俗に世間から「結束の住友」と呼ばれる所以だろう。

組織的な纏まりを見せる三菱財閥や人に重きを置く三井財閥。その両者にも独特のカルチャーが存在しており非常に興味深い。三大財閥を研究して比較し、財閥や企業集団が今後の日本経済により貢献できるような戦略を目指したい。

#### 株式会社三井住友銀行 元 副頭取

#### SMBC日興証券株式会社 元 社長 清水喜彦様のコメント

久しぶりに学生の皆さんとお会いして話をさせて頂きました。まず驚いたのは、しっかりした意思・考え方をお持ちだったことです。そして研究に対して真摯に向き合っておられることです。若者達は大丈夫だと安心しました。お会いした際にもお話ししましたが、「経験はやった事があるだけでは

なく、そこから学んで次の機会に生かす事ができて初めて経験と言える。」ということをお忘れください。ぜひ学生時代に学んだことややったことが経験と言えるように整理して、社会に旅立っていられることを大いに期待しています。



三井住友銀行 元副頭取の清水喜彦様(右から3人目)は住友グループの特徴を詳細にお話くださった

### 上原 彩音

#### 「部活動とキャリアについて考える」

大学受験、アルバイトの面接、新ゼミ生の選考活動、そして就職活動。これまで私たちは度重なる「採用」の場を経験してきた。そのたびに自己をアピールし、志望意欲を示してきた。そこで登場するキーワードが、私の卒業論文のテーマ「部活動」である。部活動を長年続けてきたこと、辛いことも仲間と共に乗り越えてきたこと、部長としてチームを引っ張ってきたこと。これらはなぜか根拠もなく、社会から一定の評価を得られる。

有吉ゼミでは企業を分析する際に、創業者や歴代経営者の生い立ちまで遡る。それは、その企業の考え方や価値観に繋がっているからであるが、そこにも我々が想像する部活動の経験や、部活動の前身と言えるのであろうか、「武道」などが度々登場する。

さらに企業と部活動にも何らかの関連性があることは無視できない。体育会系などと揶揄される企業や体育会枠という形で部活動経験者を大いに歓迎する企業もある。考えれば考えるほど、部活動は様々なところで「点」として浮かび上がる話だが、当たり前すぎて、そこに焦点をあてて、深く考えることはしてこなかった。これを機に部活動について深く考え、点を線にしてみようというのがこのテーマを選んだ理由である。

諸外国をみてみると、日本ほど部活動が盛んな国はあまりない。なぜ日本では当たり前かのように部活動に所属し、多くの時間を投資し、その経験を糧に就職をして、社会に飛び出すのだろうか。部



活動にはどのような価値があり、その後のキャリアや人生とどのような関係にあるのか。これらの疑問を小学校から大学まで現役でラグビーを続け、社会人になってからも名門早稲田大学ラグビー部監督やU20日本代表の監督を務めるなどラグビー界で活躍された中竹竜二様や部活動とキャリアをテーマに起業された方といった豊富な社会経験を持つ先輩方に伺い、自分だけでは気がついていない視点も含め、もう一度、「部活動」を捉え直そうと思う。

#### 株式会社 TEAMBOX 代表取締役

ラグビー-20歳以下(U20)日本代表 元監督 中竹竜二様のコメント

学生の皆さん、日々たくさんの悩みや課題を抱えたり、たくさんの喜びや感動を味わったりしていることと思います。学生時代は社会人に向けた大切な準備期間ですが、部活動にせよ、勉強にせよ、サークルにせよ、全力を尽くして悔いのないように走り抜けてもらいたいです。ただし、単に準備に勤しむだけでなく、時には立ち止まったり、後戻りしたり、振り返ったり、寄り道したり、そんな休憩のように思える時間も大切です。大いに学生生活を謳歌してください。



ラグビー-20歳以下(U20)日本代表 元監督の中竹竜二様(右から2人目)は部活動の現状とチーム作りについて詳細にお話くださった

#### 謝 嘉杰

「四輪モータースポーツの歴史変遷から見るスポーツの広がり」

皆さん、「四輪モータースポーツ」と言えば、どんなワードが浮かぶのだろうか。暴走族?または走り屋?マイナスイメージが強いかもしれない。私たちの生活に関わりが深い「自動車」を素材として使っていないが、これほどまでに一般人からは遥か遠い存在のようなスポーツも珍しいと考える。入門の壁が高いスポーツがいかにかここまでに発展できたのだろうか。この疑問を解明していく中で、将来的に他のスポーツや文化を推進するためのインスピレーションを与えたいと思う。

研究に進めるにあたって、ゼミの指導教員である有吉秀樹教授にお力添えをいただき、プロジェクトリーダーとして、第二期ホンダ

F1の全盛を支えた後藤治様にインタビューを行った。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。お話を伺う中で、ビジネス化とドライバー育成の話が非常に印象だった。後藤様はF1が商業化し始めた1980年代にその世界に入り、間近でF1の成長を見られた。モータースポーツは商業化しないと存続しにくいと、どうしても視聴率を求める傾向にあるが、それと同時に競技性を保ち、両者のバランスを上手く取らないといけない。そして、商業化が成熟すれば、参加の壁もますます高まり、貴族のスポーツのままになる傾向がある。しかし、レーシングシュミレーターの技術がさらに発展して、手軽に近場でモータースポーツの体験ができれば、すそ野が大きく広がり、ドライバーとしての素質のある若者を多く発掘できる可能性もあるだろう。

このように「四輪モータースポーツ」のような特殊なスポーツの歴史変遷を理解することで、自動車業界に、私たちの生活にどのような影響を与えるのかを解明したい。そして、卒業論文を通して、若者の車離れ、電気自動車の波が来る現在において、「四輪モータースポーツ」業界のこれからの新たな在り方、立ち位置を明らかにしたい。

#### ホンダのF1黄金期(第2期)を支えた、Geo Technology 株式会社 代表取締役 後藤治様のコメント

謝嘉杰君からのヒアリングは、イベントとしてのF1 グランプリがテーマでしたが、どのような経過で発展してきたかをしっかり勉強した上で、F1が将来さらに発展するための重要なポイントを考察してくれるものと期待しています。また、雑談で「卒業後はいきなりF1にかかわる仕事には就けなかったけれども、入社した企業でしっかりと自分の幅を広げて、将来F1の仕事に就けるよう頑張っていきたい」と言っていました。現実をしっかりと捉えた上で、ロングタームの目標に向かっていく姿勢がとても頼もしく思いました。



日本モーターサイクルスポーツ協会 会長の鈴木哲夫様(左から3人目)には二輪スポーツの現状をつぶさにくがった

それぞれが興味深い卒業論文を書いています。卒業論文のポスターセッションという相互コミュニケーションまでやり切り、4年間の集大成としてください。

柳 京佑

「非正規労働と賃金：パネル分析から見る世界と日本」

近年、日本国民の賃金が上がらないことが問題となっている。その要因として労働生産性の低さや労働分配率の低さ、非正規雇用の増加などが挙げられる。その中で、日本では正規雇用者に比べて非正規雇用者の人数が増加傾向にある。先行研究では、非正規雇用者が賃金に負の影響を及ぼしていた。本稿では非正規雇用者が多いのは日本特有のものではなく、外国でも共通するため、海外でも同じ結果になるのではないかと仮説を検証するために、OECDのデータを用いて賃金に非正規雇用者がどのような影響を与えるのかについてパネル分析をした。結果としてはパートタイム比率が平均賃金上昇率に正で有意な結果が得られた。

河井 新

「雇用流動性による労働生産性への影響」

現在日本では、先進諸国と比較して労働生産性が低い水準にある。この現状を回復する手段として、雇用流動性を高めるべきだという主張が聞かれる。実際に先行研究では雇用保護が労働生産性に対して負の影響を及ぼしている。一方で、雇用流動性が低いことで、労働者の熟練度や協力関係の構築がなされやすいという先行研究も存在し、単純に雇用流動性を高めることが労働生産性の向上につながるとは限らない。そこで本稿では、雇用流動性がプラスの影響を与えるときとマイナスの影響を与えるときの2つの状態があると仮説を立て、実証分析を行っている。

山口 裕也

「展開形ゲームを用いたロシア・ウクライナ戦争における停戦交渉プロセスの分析」

ロシア・ウクライナ戦争における停戦交渉プロセスを展開形ゲームの枠組みを用いて分析する。研究の目的は、経済制裁や国際社会の介入が両国の交渉戦略に与える影響と、停戦合意の可能性を探ることである。ここでは、停戦と休戦の定義を明確にし、過去の紛争事例と比較しながら、現在の状況を定式化する。つまり、ロシア、ウクライナ、欧米諸国をプレイヤーとしたゲームモデルを構築し、各プレイヤーの戦略的選択が停戦交渉に与える影響を考察している。結論として、複雑な国際紛争における停戦交渉のダイナミクスをより深く理解し、効果的な紛争解決策を探る上での示唆を考える。

三国 世那

「ペット産業の殺処分問題」

近年、日本のペット殺処分は自治体や動物愛護団体の尽力により年々、減少している。殺処分ゼロを達成した自治体も出てきており、数字を見れば殺処分問題は解決に向かっているといえる。しかし一方で、猫の殺処分問題や、動物愛護法の改正により行政のペット引き取り拒否ができるようになったことで殺処分ゼロの言葉の一人歩きが起きてしまうなどまだまだ問題は数多く残されている。本研究ではゲーム理論を用いて、ペット産業の殺処分問題を動物保護先進国と比較し、ペット産業全体の意識改革とペット殺処分問題に対する具体的な解決策の提案につなげることを目指す。

大谷 拓麻

「外国人労働者数の決定要因」

近年、少子高齢化に伴い、日本人労働人口の減少が社会問題

となっている。そのような状況下で日本では国内の外国人労働者の増加により労働力が賄われており、その外国人労働者数は都道府県ごとで差が見られる。本稿ではそのような都道府県間の外国人労働者数の差を決める要因について、複数年の都道府県データを用いたパネル分析を行う。結果として日本人労働者数と生産年齢人口比率がそれぞれ外国人労働者数に対して有意な要因となった。

稲場 虎太郎

「学力の決定要因の推察」

近年、日本は学歴社会という言葉が使用されるほど学歴、学力の重要度が高まっており、それと同時に教育格差という問題が生じている。そこで本稿では格差を解消するためにそもそも学力に影響を与えている要因が何であるかの実証分析を行う。先行研究では経済的要因や社会的要因などいくつかの要因が挙げられたが、本稿では新型コロナウイルス感染症の拡大以後は社会的要因が影響を与えているという仮説を立て、学力テストの結果を被説明変数とする回帰分析を行う。

吉澤 一茶

「ふるさと納税におけるインセンティブ分析」

2008年に導入されたふるさと納税制度は地域を離れた人々が自分の地元を応援するために離れた場所からでも育った地域に納税し応援することができる制度である。本研究は、ふるさと納税制度の成り立ちと発展を踏まえ、その現状をゲーム理論でモデル化し分析する。ふるさと納税新規参入を考えている自治体がどのような戦略をとることで寄付金額を増加することができるのかを提供するものである。

吉田 健人

「社会における不平等について」

近年の日本において、“不平等”について取りざたされることが多くなっている。不平等と言っても一概にまとめる事が出来るものではなく、収入や税金などの経済的な格差から学歴や性別による個人の努力ではどうすることもできない不平等など種類は様々である。本研究では、正規・非正規、学歴、地域ごとによる不平等の発生要因・現状について概観を行うことにする。

湯澤 知哉

「日本の音楽業界のビジネスモデル分析」

日本の音楽業界におけるZ世代の音楽消費行動に基づき、複数の事業を展開する新たなビジネスモデルである「360度ビジネス」の妥当性を検証、考察する。また、この新たなビジネスモデルには弱小音楽企業にとっては採用が難しいという問題点がある。そこで、本稿では、「360度ビジネス」の妥当性に加え、弱小音楽企業の新たな戦略として「一点突破型ビジネス」を提案し、この戦略が最適か否か、戦略型ゲームを用いて分析する。





**半村 晏子**  
宗教法人の課税根拠

ペット葬祭料事件における「イコール・フィッティング論」に焦点を当て、宗教法人に対する法人税の課税根拠について考察する。

**野澤 末名**  
安楽死の法的課題と未来

本研究は、安楽死に関する法的課題と日本での合法化の可能性といった今後の課題に焦点を当て、現行の法制度における問題点について論じ、改善提案を行うことを目的とする。

**佐藤 海月**  
現代社会における生殖補助医療の倫理的・法的問題と課題

生殖補助医療と民法との関係を探求し、倫理的・法的問題に触れながら、生殖補助医療の普及と法的規制の必要性について考察した。

**高橋 遼平**  
親権争いの問題とその未来

離婚による夫婦関係の破綻が生じた際の法的紛争について判例を中心に論ずる。

**加藤 海翔**  
電気通信事業法の消費者保護ルール

電気通信事業法とそれに伴う消費者保護ルールに関するガイドラインについて考える。

**鳥羽 伶和**  
成年年齢の引き下げとその影響

成年年齢の引き下げが個人や社会にどのような影響をもたらすのかを検討し、そのメリットやデメリットを概観する。

**八尾坂 優菜**  
ジェンダーに関する比較法的考察

「性別役割分担意識」に焦点を当て、他国との違いや年齢層による認識の違いなどから、今後の日本でのジェンダーの扱いと今後の方向について研究する。

**舞原 すずな**  
企業の社会的責任と法規制

CSRと法規制の関係に焦点を当て、比較法的な手法も用いて、企業が法令を遵守しながら持続可能な社会に向けてどのような貢献ができるのかを検討する。

**大城 拓真**  
子どもに対する SNS 規制法について

子どもの SNS 利用を制限する法律の是非について、様々な観点から検討する。

**畠山 泰地**  
AI 規制法

日本の著作権法と生成 AI の規制を取り上げ、それぞれの意義について述べる。

**古川 享胡**  
法的観点から見た性別の取り扱いについて

性別の変更に関する問題に着目し、判例を概観する。

**石橋 竜輝**  
夫婦別姓の問題点と日本での導入の可能性

夫婦同姓が規定されている民法750条の改定の可能性について、現代の日本の社会的状況を踏まえつつ、比較法的考察も含めて検討し、そのあるべき姿について私見を述べる。

**高橋 宏輔**  
18 歳成人による問題点

「18歳成人」の法形成の過程と理念、その仕組み・効果と周辺法との関連を概観する。

**中村 夏樹**  
環境法による水質汚染対策

水質汚濁防止法について重点を置き、環境法のなかで同法が占める意義を明らかにしたうえで、水質汚染を解消するためには、人々の協力、法による拘束が必要であると主張する。

**細谷 朝香**  
消費者保護法が持続可能な消費の促進に与える影響

消費者保護法が持続可能な消費の促進にどのように寄与しているかを明らかにし、その効果と課題を評価することを目的とする。

**須藤 調**  
不法行為としての誹謗中傷

SNSを通じての誹謗中傷の実態を調査し、それに対する民法上の不法行為責任の追及のあり方を検討する。

**武田 姫香**  
精神患者における刑の見極めと法的処分

精神患者に対する刑罰の適正化とその未来が検討される。精神患者と被害者の公正な調和を図るための一助となる研究。

米山ゼミは、「SDGs実践と持続可能な社会の創造」をテーマに掲げて、国際社会や地域社会の抱える持続可能性の問題に、おもに経済学的視点からアプローチし、課題解決に向けて実践的に行動するPBL(Project-Based Learning)に取り組んでいる。以下に今年度の卒業論文の概要を紹介する。

菅野 琴音

#### 1 「学校教育におけるESD(持続可能な開発のための教育)の今後の在り方」

地球規模の問題は年々、複雑化・多様化しており、持続可能な社会を創ることが必要とされている。1992年に採択された「アジェンダ21」では、持続可能な開発には「教育」が不可欠と明記され、UNESCO主導で持続可能な開発のための教育(ESD)が推進された。2017年には、学習指導要領の方もESDの理念が組み込まれたが、環境省の調査によると、環境教育やESDに対する高い意欲を持つ教職関係者は53.5%と半分程度で、学校教育ではESDへの理解が不足していると思える。

本研究では、学校教育におけるESDの課題と、その推進に向けて必要な取組、そして今後の在り方について述べる。

島田 隼人

#### 2 「草加市における河川の再生活動を活用したまちづくりの可能性と獨協大学の役割」

東京のベッドタウンとして繁栄した草加市は「市内で楽しむ場所がなく、職場も買い物も遊ぶ場もすべて市外」という住民が少なくなく、「寝に帰るだけのまち」となってしまうている。また、草加市には綾瀬川と伝右川のふたつの河川が流れており、どちらの河川もかつてはとても汚れていた河川であったが、地域住民の熱心な活動と行政の取組によって、改善傾向にある。

本研究では、草加市で行われているまちづくり事業や河川の再生活動の現状と課題を明らかにし、再生活動を活用したまちづくりの可能性と獨協大学の役割について明らかにする。

田浦 駿介

#### 3 「日本のフェアトレード普及に向けた課題と応援消費型フェアトレードの可能性」

フェアトレードはSDGs達成に向けた途上国支援の取り組みとして注目され、2022年には世界で約307億円が途上国の農家・労働者に還元された。日本でも2023年の市場規模は211億円に達したが、欧州とは大きな差がある。一方で、日本では地産地消や被災地支援といった国内生産者を支援する「応援消費」が普及しており、フェアトレードの理念と親和性が高い。今後は、国内外のフェアトレードを融合させた新たな普及アプローチが求められる。

本研究では、従来の途上国支援に関するフェアトレードの購買

率の課題を明らかにし、応援消費に着目したフェアトレードの普及を考察する。

徳橋 皓太

#### 4 「日本の労働市場における労働力不足と外国人労働者の雇用促進」

日本の少子高齢化は急激に進行し、人口は減少局面を迎えている。2070年には総人口が9,000万人を割り込み、高齢化率は39%の水準になると見込まれた。これにより労働力人口が減少し、経済成長や生産性の低下が懸念される一方、2023年には在留外国人数が322万人に達し、年々増加している。外国人労働者の雇用促進は、労働力不足を解消するための重要な施策の1つである。

本研究では、日本企業における労働力の確保を図るために、外国人労働者の雇用を促進するうえで、日本社会にどのような影響を与えるか、またどのような施策が求められるのかを明らかにする。

丹野 悠太

#### 5 「地域連携を通じた獨協大学カーボンニュートラル実現に向けた提案」

埼玉県は温室効果ガスを多量に排出する大規模事業所に対して排出削減を義務づけており、獨協大学もそれに該当する。大学のCO<sub>2</sub>排出量は減少傾向にあるものの、埼玉県や国が定める排出削減目標達成に向けては、さらなる努力が必要である。

本研究では、獨協大学のCO<sub>2</sub>排出量の現状と削減に向けた大学の取り組みを明らかにし、大学のカーボンニュートラル達成に向けた田村市との再エネ電源やJ-クレジットを通じた地域循環共生圏の形成を提案する。CO<sub>2</sub>排出量の削減義務があることを強みと捉え、地域貢献をしながらカーボンニュートラルを実現させるための仕組みを示していく。

日野原 楓

#### 6 「営農型太陽光発電を活用したCSAの提案」

現代の日本の農業は、高齢化による農業人口の減少、耕作放棄地の増加、農村地域の経済停滞などの課題を抱え、食料自給率も先進国の中で最低水準である。こうした状況下で、国内での安定した食料供給が必要不可欠である。

本研究では、農家と消費者が相互に支え合う仕組みによる農業の活性化と食料の安定供給を提案する。営農型太陽光発電とCSA(地域支援型農業)を組み合わせることで、近隣で生産された野菜を購入する消費者と営農型太陽光発電に投資する消費者が互いに農家に協力し、持続可能な農業を実現させることが可能となる。



## 焼酎香る薩摩の地に降り立ち



経営学科 上原 彩音・佐藤 良祐・謝 嘉杰・島田 瑠里香

2023年の春学期、私たちはゼミでマーケティング戦略立案に挑む研究テーマとして「お酒業界」を取り上げました。ビールやワイン、日本酒に焼酎と世に出ている様々な種類のお酒の歴史、小売や卸等の流通経路、徴税機関である政府の動向まで限なく研究しましたが、その過程で、焼酎を専門にご研究されている鹿児島大学客員教授 鮫島吉廣先生にZOOMでインタビューを行う機会を得ました。そんな鮫島先生の熱心な訪問のご要請のもと、課題から1年越しに鹿児島の地へと降り立つこととなったのです。

私たちはまず南さつま市笠沙町にある「焼酎づくり伝承展示館 杜氏の里笠沙」に向かいました。展示館までの道のりは非常に険しく、狭い坂道をひたすら上ったその先にあります。東シナ海に面した野間半島南岸の断崖に立つこの地は、風光明媚であるものの米作りも漁業もままならず、早くから男性は出稼ぎに活路を見出さざるを得ませんでした。そして明治以降、免許のない者の焼酎造りが禁じられると、九州一円の酒蔵、焼酎蔵に出稼ぎに行き杜氏として活躍するようになります。焼酎造りのノウハウ漏洩を防ぐためには、黒瀬、片平、宿里など同じ地域に住む一族の間で伝承していくのが一番。明治大正期の第1世代から始まり、今ではかなり少なくなりましたが、それでも第6、第7世代へと引き継がれる「黒瀬杜氏」の誕生です。今回は有吉先生の大学同期で黒瀬杜氏の末裔でもある合同会社ハーモニック 代表取締役の黒瀬暢子様のお取り計らいにより、館長の片平孝一様に直々にご案内いただきましたが、片平館長も集落に長らく伝わる片平家の係累です。私たちが訪れた9月はちょうどサツマイモの収穫が始まる時期。杜氏の黒瀬道也様の特別な許可をいただき、通常ならばガラス越しにしか見られない仕込みの様子を間近まで行って見学することができました。仕込んでいる最中の醪の香りや温度感到触れ、黒瀬杜氏の息吹を肌で感じられたのは貴重な経験です。

鹿児島県酒造組合 専務理事の田中完様からのご紹介で訪れた、枕崎市にある「薩摩酒造 花渡川蒸留所 明治蔵」は、「さつま白波」で知られる鹿児島を代表する焼酎蔵の1つです。明治時代から代々受け継がれる伝統の造り方を重要視しており、昨年のインタビューでうかがった「酒蔵ごとの特徴には杜氏の色が濃く表れる」というお話を思い出しました。「薩摩酒造流」の1杯目の飲み方は「まずストレートでゆっくりと味わって飲む」と解説されました

が、実際には皆一気に飲み干しており、焼酎王国鹿児島の豪胆さに圧倒されます。

焼酎文化は蔵以外でも感じることができます。薩摩焼、特に庶民の間で親しまれた黒薩摩はまさに焼酎を飲むために作られた酒器であり、焼酎文化との関係性は切っても切り離せません。私たちは日置市美山にある伝統的な薩摩焼の窯である「沈壽官窯」を訪れました。この窯は豊臣秀吉の朝鮮出兵時に朝鮮半島から連れてこられてから15代を数え、現在でも「沈壽官」という作陶名を襲名する老舗窯です。今回は十五代沈壽官様のお取り計らいにより、児玉尚昭様による丁寧な解説で、黒薩摩や白薩摩の製造工程や、日本や海外の動向に翻弄されながらも技術を守ってきた歴史、各時代の様々な作品を堪能することができました。薩摩焼の製造は分業制で1人1人が別室で作業をしており、完成までには長い年月がかかります。薩摩焼については事前知識を入れて臨みましたが、実際にその土地に訪れてお話を伺うことでより質が格段に上がりました。

鹿児島県内有数の港湾土木企業の米盛建設株式会社。代表取締役社長の米盛庄一郎様を表敬訪問した際には、サツマイモ栽培の盛んな離島の黒島で焼酎製造工場建設と出荷するための港湾整備を請け負い、島の銘酒「みしま焼酎 無垢の蔵」の製造販売に貢献しているお話をうかがいました。その誕生秘話をうかがっていたがゆえに、懇親会の席でふるまわれた「みしま」の味は格別。また、その席上で、本格焼酎の生産量が近年宮崎県に抜かれていることを皆さん悔しがっており、鹿児島県民の焼酎に対する愛の深さを痛感しました。

鹿児島は焼酎ばかりではありません。高級絹織物として世界的にも有名な大島紬。奄美大島が中心と思われがちですが、実は鹿児島本土でも盛んです。私たちが訪れたのは鹿児島県本土でありながら奄美大島の文化や自然を体感することができる「奄美の里」。郷土料理の鶏飯をいただいたあと、藤絹織物株式会社 代表取締役社長の藤陽一様が施設内を直接ご案内くださり、工場の中まで入り込んで糸染めや機織りの様子をすぐそばで見学しました。伝統産業の現状や奄美大島の魅力を知ることができたのは得難い経験です。

その他にも山芋を原料としたお菓子の軽羹、驚くほどの種類を

誇るさつま揚げ、幕末期に欧米から取り入れた鉄や硝子製造の技術を生かして造られた薩摩切子・・・鹿児島が誇る名産特産の数々は鎌倉時代から現在にかけて32代も途絶えず続いている島津家の存在抜きには語れません。私たちはこれまでゼミで日本橋の老舗やセイコー、野村財閥など古くから続く同族企業と向き合ってきましたが、伝統を重んじながら革新を続ける難しさと大切さをこの鹿児島でも痛感しました。

今回の鹿児島ツアーのきっかけは昨年度の研究でお酒業界を取り上げたことにありますが、その中身がこれほどまでに充実したものになったのは、米盛様や藤様など鹿児島稲門会の皆様をはじめとした多くの方のご支援のおかげです。改めて人と人のご縁を維持していくことの重要性に気づかされました。同じ日本とは言え、関東とは歴史も地形も全く異なる鹿児島県の方々とはとても親しみやすく大学生の私たちを暖かく迎えてくださいました。年代も属性もバックグラウンドも異なる方々との交流がこれほど楽しいと思ったことはありません。また、伝統工芸品や土地の歴史を深く学ぶことで「なぜ今のように発展してきたのか」を考える良い機会にもなりました。これはマーケティングを学習するうえでも重要な「深掘りをしていくこと」に繋がります。日々の生活から批判的に物事を捉えて、この地で学んだことを日頃の学生生活でも大いに役立てていきたいと思います。

#### 米盛建設株式会社 代表取締役社長

##### 米盛庄一郎様のコメント

早稲田大学校友会のご縁で獨協大学経済学部の有吉秀樹教授と共にゼミ生も鹿児島を訪問されたのをきっかけに、鹿児島の焼酎「みしま」の紹介をさせていただきました。この焼酎は人口200人の黒島にて平成30年に製造された「みしま焼酎 無垢の蔵」です。全国でも珍しい公設公営の蔵で年間10Kℓ(720mlで約14,000本)しか製造できません。イモの栽培から収穫、選別、製造販売まで村民が関り村おこしの事業となっています。過去、イモだけは黒島で栽培していたのですが免許や法律の関係で村での製造は許可されませんでしたが、焼酎特区の認定を受けて製造を始めました。その製造工場の建築を弊社にて施工させていただいた関係で、毎年「みしま」を購入してマイルドな味を楽しんでいます。ゼミの方々には弊社を訪問していただいた後、懇親の場でこの「みしま」を堪能していただく良い機会となりました。「みしま」の詳細は三島村のホームページにてご覧ください。有吉ゼミの皆様

方にはこれからも鹿児島をよろしくお願い申し上げます。

#### 藤絹織物株式会社 代表取締役社長

##### 藤陽一様のコメント

9月4日、有吉ゼミ5名の皆様が弊社奄美の里(鹿児島市)を訪問されました。弊社は創業者のルーツである奄美大島の伝統・食文化を伝える施設で、奄美の自然を再現した庭や奄美鶏飯を食べられるレストラン、本場大島紬の製造工場などを有する産業観光施設です。鶏飯を食べた後は、庭の散策、大島紬の製造工程などの座学、工房内見学と、忙しい滞在となりましたが、皆様最後まで大変興味深く話を聞いていただきました。デジタル全盛の時代において、大島紬を作るということはとてもアナログに映ったかもしれませんが、伝統を守るために懸命に取り組んでいる職人たちの姿を知っていただくよい機会となりました。いつかまた奄美の里でお会いできることを楽しみにしております。ありがとうございました。



十五代沈壽官様の取り計らいで工房内を2時間以上に亘って見学した



館長や杜氏の説明を聞きながら、焼酎の仕込みの現場を味わうことができた





経営学科 佐藤 哲也・塩ノ谷 颯真

出張で、旅行で、アフタヌーンティーで。現代人のホテル利用の用途は多岐にわたる。消費者のニーズは時代が進んでいく中で変化し続けており、それらに応えるべくホテル業界は進化を繰り返している。私たちはそんなホテル業界がどのような歴史を歩んできたのか、そしてこれからさらに発展していくためにどのような戦略を立案すべきなのかを学ぶべく、研究に取り組んだ。有吉教授のお力添えを受け、日系老舗ホテルから外資系ラグジュアリーホテルに至るまで、様々な方にインタビューを行うことができた。

街道が整備され、旅が盛んになった江戸時代。宿泊と言えば主に庶民は旅籠、大名や武士は宿場町に設置された本陣や脇本陣だった。鎖国が解け、諸外国の影響を色濃く受けるようになると、1870年にホテル・ジャパンが開業したことを皮切りに、外国人が往来する横浜を中心として西洋式ホテルが次々に誕生していく。大倉喜八郎が建設に尽力し1890年に開業した帝国ホテルをはじめ、富士屋ホテル、金谷ホテル、万平ホテルなど今に続く「クラシックホテル」と呼ばれている一群は皆押しなべて戦前に建設された。しかし、当時のホテルの役割は外国人の賓客をもてなすためであり、庶民には手の届かないものだった。

度重なる戦争を経て迎えた高度経済成長期。1964年の東京オリンピック開催に向け、訪日外国人を迎え入れるための開業ブームが始まる。1963年には日本初の外資系ホテルである東京ヒルトンホテルも進出してきた。また、この時期にはホテルオークラ、ホテルニューオータニも建設され、先の帝国ホテルと合わせて、日本を代表する高級ホテル「御三家」が顔を揃える。しかし、この時期においても、高級ホテルの需要は国際会議や企業のパーティーなどに限られ、相変わらず庶民にとっては敷居が高い。今では一般的になったホテル婚もなく、出張の際はビジネスホテル、社員旅行や家族旅行では旅館や場末の温泉ホテルに泊まるのが関の山だった。

庶民と高級ホテルの距離が近づいたのはバブル期。堤義明氏率いる西武グループが経営する赤坂プリンスホテルが「クリスマスは赤プリへ」というキャッチコピーの下、一世を風靡した。当時は1年先まで予約が取れないといわれるほどの人気ぶりであったという。バブル崩壊後、プリンスホテルに代わって、ラグジュアリーな空

間を求める消費者ニーズを引き継いでいったのは、相次いで日本に進出してきた外資系企業群であった。フォーシーズンズやウエスティン、パークハイアットなど欧米系から始まって、2000年代にはマンダリンオリエンタルやペニンシュラ、アマンなどアジア系も台頭してくる。近年では森ビルや三井不動産などのデベロッパーが推進する街づくりの一環としてホテルが誘致されることも多い。

1990年代を境に消費者の旅行形態も大きく変容した。社員旅行のような男性中心の団体旅行は鳴りを潜め、個性や質を重視した個人客の利用へと大きくシフトしている。そんな客層の変化をよく捉え、ビジネスチャンスを広げてきた星野リゾートのような企業もある。私たちはそんなホテル業界の歩んだ歴史を文献だけでなくインタビューを通して検証しようと試みた。

ホテルオークラ東京株式会社取締役社長である梅原真次様、グランドニッコー東京台場取締役常務執行役員である古澤聡様からは、ホテルオークラをはじめとする御三家の歴史や企業理念、日系ホテルの特色などのお話を頂いた。「オークラの接客は一流である」という自信があるからこそ、他のホテルが台頭してきた時代にも誇りをもって経営できている、その姿に感銘を受けた。

プリンスホテルを経営していた堤義明氏と関係が深かった石原章好様からはコクドの経営方法や特徴についてのお話をうかがった。どのようにしてプリンスホテルを拡大させていったのか、バブル期の最盛の所以などを当時の時代背景を踏まえつつお話して下さった。また、堤義明氏の兄弟である堤康弘氏の秘書を長年お勤めになられていた狩野憲行氏へのインタビューでは、西武グループにおける堤一族の関係性を明らかにすることができた。

私たちは、2023年にオープンし話題を呼んだ麻布台ヒルズ内にあるJANU東京にも足を運び、副総支配人を務められている安部剛士佐様に対し、外資系ホテルごとの特色やホテルの経営体制などを尋ねた。外資系ホテルと日系ホテルでは雇用形態もキャリアも大きく異なるというお話はホテル業界をマネジメントの視点から見るときっかけとなった。

株式会社星野リゾート代表取締役社長 星野佳路様を訪ねて、銀座のオフィスにもうかがった。星野様へのインタビューでは同社の歴史だけでなくホテルの客層の変化にも話が及んだ。マネジメ

ントに携わってこられた皆様から頂けるお話の数々は、当時の状況を肌で感じられることはもちろん、経営者の意志決定の重さなど、新たな発見や学びを与えてくれる特別なものばかりだったと思う。

迎えた発表日当日。多くの関係者やOBOGを集めて、半年に及ぶ研究の成果を発表した。戦略ではバブル期のようなホテルブームを再来させるための開発、事業展開を考え、その戦略にあったターゲットを選定した。プレゼン後には皆様から手厚いフィードバックを頂き、至らなかった点や新たな発見をすることができた。

今回のプロジェクトを通して得た多くの経験、学びをこれからの大学生活、社会人生活に役立てていきたいと思う。最後に、インタビューにご協力してくださった方々はもちろんのこと、インタビューを取り付けてくださった有吉教授、そしてOBOGの皆様に厚く御礼申し上げる。

#### ホテルオークラ株式会社社長

##### 梅原真次様のコメント

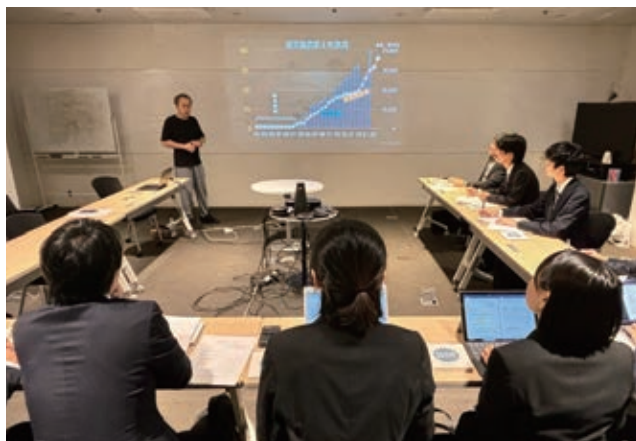
今回のセッションでは有吉教授にファシリテーターを務めていただきながら学生さんからの質疑に対応させていただきましたが、ホテル業界や私共のホテルについて、よく事前研究をいただいていたことから、大変充実したやりとりができたように思います。私自身も改めて当ホテルの歴史を振り返り、業界俯瞰する良い機会となりました。社会人である我々と学生の皆さんが、獨協大学の繋がりでこうしてやり取りできるのは大変ありがたいことであり、今回の研究を通じて学生の皆さんがホテル業界に興味を持ていただければこれほど嬉しいことはありません。これからも獨協大学のOBとして、大学の発展に少しでも寄与できればと考えております。

#### 三菱地所ホテルズ & リゾーツ株式会社

##### 石原章好様のコメント

皆さんがプリンスホテルを研究対象に選んだことは、少し渋い選択で、非常に価値のあるテーマだと思いました。特に、コクド・旧プリンスホテル・セゾン(流通グループ)についての研究は、皆さんが生まれる前の出来事を扱うため、当時の社会構造やトレンド、価値観を理解するのは容易ではなかったと推察します。また、これらの企業がオー

ナー企業であったため、内部事情の把握は難しく、その企業風土を理解することも大変だったでしょう。それでも熱心に質問を重ねる姿勢に、有吉ゼミが「学問を通じて人間形成の場」となっていることを強く感じました。この研究をきっかけに、今後も様々なことに対して疑問や興味を持ち続け、探求心を忘れずに成長してってください。未来を担う皆さんの活躍を心から期待しています。



数多くの再生事業を手がけた星野リゾートの星野佳路社長にもお話をうかがった



ホテルオークラ東京の梅原真次社長(左から5人目)からは何世代にもわたる顧客とのつながりをお話いただいた



## 獨協大学環境週間 “Earth Week Dokkyo 2024”の開催報告



Earth Week Dokkyo 実行委員会

代表 齋藤 香乃 副代表 佐藤 洵花 (冬季) 浅見 匠彦

今年度の“Earth Week Dokkyo 2024”は、国際環境経済学科と環境共生研究所の共催で6月と12月の2回開催しました。獨協大学として環境週間「地球を考える1週間」を設定し、持続可能な地球社会の実現を目指すイベントを実施することで、学生、教員、職員の意識を高めてキャンパスライフを見直し、持続可能な社会を創ることを目的としています。

このイベントは、国際環境経済学科の1期生が提案し、Earth Week Dokkyo 実行委員会という企画・運営を手掛ける運営主体を設けて、2016年12月に初めて開催されました。このイベントも、今年度で14回目の開催となります。実行委員会には国際環境経済学科の学生だけでなく、多様な学部・学科の学生が所属しています。多くが大学内で行われるイベントですが、学外の方からも多くのご支援をいただき、イベントを盛大に開催することができました。今後も、1人でも多くの学生や教職員、地域の方々と、持続可能な社会を生き抜くために協働するきっかけを提供できるイベントづくりをしたいと考えています。

### “Earth Week Dokkyo 2024～Summer～”

6月24日から6月29日までの1週間、“Earth Week Dokkyo 2024～Summer～”開催され、16団体がワークショップやディスカッション、授業公開、ポスター展示などの企画を行いました。特に印象的だったイベントを以下に紹介します。

6月24日にはエコキャンパスツアーが実施されました。学校の意外なエコシステムや、普段は入れない屋上の紹介など今まで知らなかった獨協大学のエコな一面を楽しく知ってもらうことができました。



エコキャンパスツアーの様子

休みの短い時間の間でしたが、Earth Weekに関心を抱く学生も増え、とても有意義な活動でした。

24日から28日までライトダウンキャンペーンを実施しました。A棟、E棟、およびW棟の教室を使用している学生にライトダウンを呼びかけました。昼

24日から28日には、福島県南会津町耻風地区を中心に活動を行っている大竹ゼミ耻風班による「特産品 & クッキー販売」が実施されました。今回のイベントでは、地域活性化を目的に、福島県南会津町耻風地区と秋田県藤里町粕毛地区の特産品を販売しました。また、そば粉を使用したクッキー販売も行われ、多くの人が訪れました。

25日には、Earth Week Dokkyo 実行委員会による「ハーブの香りで快適に! 虫よけスプレー作りワークショップ」が開催されました。ハーブには虫が嫌がる匂いの成分が



虫よけスプレー作りの様子

含まれています。このことを利用し、大学に生えているハーブを使って、体に優しい虫よけスプレーを作りました。スプレー作りはとても簡単で、実際に使ってみるとさっぱりとした香りが広がり、とても心地よかったです。この体験を通して、ハーブの可能性や自然由来の資源を生かす大切さを実感することができました。

25日昼休みに行われた米山ゼミによる「草加の野菜を食べよう! ～ピザ窯で作るピッツァ～」では、大学のある草加市で収穫



ピザ窯の様子

した旬の野菜を使った手作りのピザが振る舞われました。ピザの配布場所である中庭には、ピザの焼きあがり待つ長蛇の列ができるなど、大盛況となりました。参加者は地産地消の大切さを実感することができました。

26日には、千葉県多古町産の規格外となった人参、フェアトレードチョコ、コーヒー販売が行われました。どちらも、たくさんのお客さんが訪れており、フェアトレードや、規格外となり市場に流通しない野菜に対しての理解が深まりました。

27日には、伝右川でカヌー体験を行いました。当日は多くの学生が来てくださり、伝右川の現状を知ってもらうことができました。

## ■“Earth Week Dokkyo 2024～Winter～”

12月2日から9日まで開催された“Earth Week Dokkyo 2024～Winter～”では、ディスカッションやワークショップ、展示などの15の企画が行われました。主なイベントを以下に紹介します。

期間中の4日～6日には、学内の3か所で英語学科の学生が企画した「ペットボトルの使用量を減らそう!～海洋プラスチックゴミを減らすための第一歩～」の投票欄を設けたポスター掲示が行われました。これには162人の方が投票に参加してくださり、多くの人が海洋プラスチック問題について考えるきっかけとなりました。



投票を行う様子



さつまいも販売の様子

2日、3日には、石川町中谷地区チームによる企画「福島県石川町中谷地区のさつまいも販売」が行われました。今年の10月に福島県事業で訪れた石川町中谷地区で収穫したさつまいもとそのさつまいもを加工したプレートやスコーンなどの販売を行いました。多くの人が訪れ、商品は2日で完売し、収益は石川町に還元されました。

3日には、「小川町の循環型農業について学ぼう」が行われました。埼玉県小川町で地域おこし協力隊として活動されている、卒業生の泉地春香さんに、小川町の魅力や特色のある有機農業について講演していただきました。日本では2050年までに、耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を25%目標としていますが、実際には0.6%しか達成できていないという現状を知りました。そのなかでも、小川町の有機農業の取組面積の割合は20%を達成していることがわかりました。今回の講演会で、小川町の有機農業を通じて、日本の持続可能な食と農の在り方を考えました。



泉地春香さんの講演会の様子

4日には、Summerでも大盛況だった千葉県多古町「食品ロス削減活動」チームによる「ニンジンと甘酒の販売」が行われました。多古町で農業を営む吉川さんの規格外となってしまった人参とその人参に付加価値を付けた人参スイーツに加えて、多古町の米農家である健太郎さんの甘酒が販売されました。購入した方の多くが多古町や規格外野菜について興味を持ってくださりました。



ニンジンと甘酒を販売している様子

5日には、獨協大学IPJ学生ボランティアによる「死刑制度の課題を探る 討論会」が開催されました。普段学ぶことが少ない死刑制度の現状について学び、その後のグループディスカッションで死刑の抑止力や誤判のリスク等についてさまざまな意見を出し合いました。



エッグキャンドルで暖を取る参加者達

6日には、Earth Week Dokkyo 実行委員会による「Egg Candle Night」が開催され、前日のワークショップで制作したエッグキャンドルの点灯式が行

われました。エッグキャンドルは家庭で出る卵の殻と、学食の廃油を利用して作りました。エッグキャンドルの暖かな光が会場全体を包み込み、穏やかな時間を過ごすことができました。

9日のEarth Week Dokkyo～Winter～最後のイベントでは、李ゼミ Media Labによる「講演会:本当の万里の長城を知っていますか?～写真から保護活動～」が行われました。万里の長城の保護活動家、写真家である厳共明氏をお招きし、万里の長城の役割や建築、美しさなど多くのことを紹介してくださりました。英語での講演だったため難しいところもありましたが、中国に興味を持つよいきっかけになりました。

今年のEarth Week Dokkyoは、昨年よりも多くの団体が参加してくださり、幅広い分野から社会課題を考えることができ、大成功となりました。



厳 共明氏の講演会の様子



## 学 生 活 動 報 告

### 福島イノベーション・コースト構想推進機構

「2021年度大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」採択事業  
「外国語教育、環境教育を活用した『持続可能なまちづくり』創造事業」の活動報告



事業責任者 国際環境経済学科教授 米山 昌幸

本学は「外国語教育、環境教育を活用した『持続可能なまちづくり』創造事業」をテーマに、2021～2025年度の5年間、本学と田村市をはじめとした福島県の浜通り市町村等との間で継続的な関係を構築し、「外国語教育」「環境教育」「地域づくり」事業を展開しています。「持続可能なまちづくり」を通してSDGs達成に貢献できる人材と同地域の復興に貢献する人材を育成しています。

以下に、福島県立船引高等学校での「総合的な探究学習の時間」の地域課題探究学習の企画・運営、実施への協力、田村市立の小学校における環境教育・SDGs教育の実施、地球温暖化対策としてのキエロワークショップの開催について、学生に活動報告をしてもらいました。

### 福島県立船引高等学校の「総合的な探究学習の時間」の地域課題探究学習の企画・実施

今年度から福島県立船引高等学校において「総合的な探究の時間」の地域課題探究学習の企画・実施に協力しました。1学年80名を対象に、7月に1回、9月2回、10月1回、11月1回、12月3回、1月1回の授業に協力しました。

7月12日は市内で操業する2つの企業、田村バイオマスエナジーとA-Plusを視察した振り返り学習に、ファシリテーターとして協力しました。9月は24日に4箇所の施設に高校生と一緒に視察し、27日には各クラスに分かれて振り返り学習のファシリテーションを行いました。10月11日には、前半に本学の松枝先生と大竹先生に環境問題に関する講義を行ってもらい、後半はそれを踏まえてマインドマップづくりを行いました。11月22日、12月6日には市内で活躍される方々が高校に赴き、高校生からインタビューを受ける人材交流ワークショップが行われました。大学生は高校生のグループに入り、インタビューのサポートを行いました。12月13日には2日間の人材交流ワークショップを通して、感じたことや興味があることをチームで話し合う振り返り学習の時間で、大学生がそれぞれのグループに入りファシリテーションを行いました。12月20日にはこの1年間の授業を通して「印象に残っていること」を生徒から引き出すお手伝いをしました。そして、1月17日には「10年後の田村市」を思い描き、それを実現させるために課題を設定し、2年次に行う地域課題探究活動の分野を考えてもらいました。

また、10月25日には高校2年生向けにSDGs講演会、SDGsワークショップを行いました。ワークショップでは国立環境研究所の気候変動適応のミステリーを使ったワークショップを行い、山積する社会課題のつながりについて学びました。

探究活動を通じて、高校の先生方や人材交流ワークショップでの講師の方々から「大学生がいてくれて話が広がった」、「高校生の環境に対する意識が広がった」などありがたいお言葉をいただくことができました。高校生の貴重な時間をいただい

ることを忘れず、今後も責任感をもって授業に協力したいと考えています。



船引高校で大学生がファシリテーションを行う様子

### 田村市立船引小学校・船引南小学校・美山小学校における環境教育・SDGs教育の実施

田村市の小学生に環境に配慮した持続可能な社会を創るという意識を高めるとともに、子どもたちにわかりやすく社会課題を伝えることを通じて学生のSDGs人材育成につながることを目的として、学生が田村市の小学校で環境教育・SDGs教育を実施し、大学生と小学生が交流しながらともに学びました。7/22(月)には船引南小5年生、9/4(水)には美山小4年生と6年生、9/5(木)には船引小6年生、9/12(木)には船引小4年生に授業を行いました。

### 「SDGsって何?」

船引小6年生4クラス(110名)と船引南小5年生1クラス(20名)、美山小6年生(20名)を対象に「SDGsって何?」をテーマに環境



船引南小5年生の授業「SDGsってなに?」の様子

教育を行いました。1時間目に、基本的なSDGsについての説明をした後に、気候変動にトピックを当て座学の授業を行い、2時間目では気候変動適応情報プラットフォームが提供するすごろく「気候変動適応への道」を利用してワークショップを行いました。

昨年度と同様の流れで授業を行いました。やはり多くの小学生がSDGsという言葉や意味を知っており、日常生活に身近な存在であることを再認識しました。また、すごろくワークショップは、すごろくに集中してしまい気候変動の課題や適応の学びが十分に深まらなかったように感じたため、来年の改善点としたいです。

### 「川を汚しているのはだれ？」

船引小4年生4クラス(123名)と美山小4年生1クラス(22名)を対象に「川を汚しているのはだれ？」というテーマで環境教育を行いました。川が汚れる原因や川を汚さないためにできることなどについてクイズも交えながら説明した後、洗剤を使わずに食器汚れを落とせるアクリルたわしを子どもたちに作ってもらうワークショップを行いました。また、小学校のそばを流れる川の水を採水してもらい、CODパックテストを使用した水質調査を児童と一緒に行いました。

CODパックテストを使った水質調査の際には、川の水の色が変色したことを嬉しそうに伝えてくれる児童が多く、楽しみながら水質を調べることができたと思いました。授業後には、「家庭できそうなことに取り組んでみようと思う」、「お家でアクリルたわしを使ってみたい」という感想を聞くことができ、川をきれいにするために自分たちができることがあるという気づきを子どもたちに与えることができました。



船引小4年生の授業「川を汚しているのはだれ？」の様子

### 地球温暖化対策イベント「キエーロワークショップ」「断熱ワークショップ」の開催

9月1日(日)に田村市環境課と共催で田村市船引公民館にてバイオ式ごみ処理機を製作する「キエーロワークショップ」を開催し、田村市民7名(5組)に参加していただきました。大学生6名が参加して、市民の方と交流しながらワークショップを行いました。

ワークショップ後に、参加した方にキエーロの使用感について取材を行うと、「ゴミ出しの量が減った」、「生ごみをしっかり分別するようになった」など環境に対する意識変化が見られました。また、キエーロの土をプランターに入れて花を育てているなどキエー

ロをしっかり活用している様子が伺えました。

また、1月26日(日)には田村市常葉公民館で「断熱ワークショップ」も開催しました。断熱ワークショップでは、常葉公民館の窓に内窓を設置するワークショップを行いました。田村市民7名に参加していただき、窓の断熱を行うことの効果や必要性を実感してもらうことができました。



キエーロワークショップの様子



断熱ワークショップの様子

### 田村市市長・副市長へのプレゼンテーション

「地方創生☆政策アイデアコンテスト2024」において、日野原楓(代表:国際環境経済学科4年)、丹野悠太(同4年)が、「福島県田村市における再エネを活用した分散型エネルギーシステム構築の提案」を提案し、最終審査会でプレゼンしました。3年連続で田村市の脱炭素を目指す企画提案をまとめて、3年連続で東北経済産業局長賞を受賞し、3年目にしてファイナリストに残ることができました。

そこで、白石高司市長、小野淳一副市長、及び関係部長に、3年間にわたって積み上げてきた、田村市の脱炭素社会を目指す取り組みについて提案させていただきました。市長は提案内容に大変興味を示してくださり、農家をはじめとする関係者を説得するためのエビデンスを用意したり、田村市で事業を起すにあたって関係者を洗い出すなどして事業計画を作れば、社会実装にもっていけると激励してくださいました。

復興知事業で田村市と関わってからずっとこのコンテストで入賞を続けて深掘りしてきた成果は、しっかりと市長に届いたと思っています。



白石市長、小野副市長、及び関係部長へプレゼンする日野原・丹野



## 講演・討論会「第10回 フクシマの未来を考える ～大学生のうちに知っておくべきこと～」 開催報告



コーディネーター 国際環境経済学科 米山 昌幸

11月13日(水)、国際環境経済学科と環境共生研究所共催による、講演・討論会「第10回 フクシマの未来を考える～大学生のうちに知っておくべきこと～」が開催されました。

今年は、大学創立60周年記念事業、および国際環境経済学科10周年記念事業として開催し、福島県企画調整部長のそうとめありよし五月女有良氏に基調講演をいただき、それを受けて福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」ならびに「大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」に参加する学生8名に活動報告をしていただきました。

学生からは委託事業・補助事業が終了したのちも、親戚に行くように地域に入って活動していることが披露され、五月女部長からは本学でこれまで延べ300名を超える学生が大学生事業で地域で活動しており、しかも事業終了後もしっかりと関係が築けていることに高い評価をいただきました。以下に、学生の報告概要を掲載します。

### 福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」 南会津町耻風

経済学部経営学科3年 石田 新子

大竹ゼミ耻風班は南会津町耻風地区の方々との親交を深め、魅力を知り、それを発信することで地区の活性化を図る活動を行っています。2017年度から始まり、現在は事業としての期間は終了したものの、大学内外でのイベントの参加を通し、地区のPRを続けています。夏休みには、数名がトマト農家でアルバイトを通じて農業の現状や課題を学び、地域の生産者の苦労や工夫を肌で感じることができました。また、現地の収穫祭「伊南川あゆまつり」にも参加し、地元産のそば粉を使った料理やきのこを販売しました。今年度の活動を通じて、地域との関係は強化されましたが、活動資金の確保や持続可能な運営体制の構築が課題として浮き彫りになりました。地区の方々の大きな協力があったり成り立っている活動であるからこそ、今後も地域の魅力を発信し続け、関係を続けていくためには学生と地域の双方がメリットを享受できる仕組みを整え、関係を続けていくことが目標であると考えます。

### 喜多方市高郷町本村地区

経済学部国際環境経済学科4年 丹野 悠太

私からは、ほんそんみらいプロジェクトの活動報告をしました。私たちは2018年より喜多方市の南西に位置する高郷町本村地区で活動しており、メンバーは現在、現役生、OB・OG合わせて15名です。本村の魅力を発信し、関係人口を増やすことを目的に活動しています。活動内容としては、フットパスの整備や田植

え、稲刈り、そば打ち体験、大学でのお米の販売などを行っています。今年度で活動7年目となり、フットパスや農作業を通じて地域との交流ができたことや、補助金が終了した後も自腹を切っても訪問したい場所となったことが大きな成果だと考えています。補助金終了後も訪問したい場所となっているのは集落の方が毎回優しくおもてなしをしてくださり、家族のように接してくれているからだと感じています。現在、現役のメンバーがほとんど4年生のため、卒業後は獨協大学と本村の関係が途絶えてしまうことを課題として捉えています。卒業までの残りの間に、後輩に本村地区の魅力を伝えて獨協大学と本村の関係を途絶えさせないように魅力発信に努めていきたいと考えています。

### 田村市船引町瀬川地区

経済学部国際環境経済学科3年 原田 奈穂

獨協大学セガワ応援隊は2017年度より田村市船引町瀬川地区の地域活性化や住民の世代間交流、地区の知名度を上げるために活動してきました。大学生事業として始まった本活動ですが、活動の申請期間が終了したため、現在は「やってみっ会」が申請しているサポート事業の一環として現地に足を運んでいます。

私たちは普段大学生活を送る中では、決して出会わない人とお話させていただいたり、決してできない経験をさせていただいております。タバコ農家や日本ミツバチの養蜂、神社の視察などを通して、農村がどのような暮らしを歩んできたのかを知りました。また、日本の多くの地域が抱える少子高齢化の問題をどう解決すべきかなど考えさせられることばかりです。

今年度は11月17日には、やってみっ会が主催する「新そば収穫祭 & 軽トラマルシェ」のお手伝いに行きます。また、12月14日には持続可能な地域づくりシンポジウムを開催し、廃校になった瀬川小学校を利活用する可能性について話し合いを行います。これからもセガワ応援隊として瀬川地区と関わりを持って活動してまいります。

### 小野町谷津作行政区

経済学部国際環境経済学科4年 坂口 諒

小野町谷津作行政区における活動は、2019年度の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」(大学生事業)の採択を受けて開始し、今年度で4年目を迎えました。私たちは、行政区内に噴出したままの源泉「大地の泉」を活用した地域活性化を目的に活動しており、昨年度には「獨協大学こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」と名称変更をしました。今年度は、学生メンバー8名で現地のお祭りに参加したほか、源泉を実際に活用し

て温泉卵や足湯を現地で実際に試すなどの活動を行いました。

このような活動で得られことは、小野町の人とつながりを持ち、地域の人と活動をすることができたことです。私自身は小野町のことを聞いたことがなかったため、現地のことを知り、活動に参加することができたのは、大学生事業という枠組みによって小野町とつながることができたからであると捉えています。

今年度が大学生事業の枠組みで活動できる最後の年度であるため、この事業で得たつながりを切ることをないように、今後のあり方について現地の方としっかり話し合っていきたいと思います。

## 昭和村松山集落

### 経済学部国際環境経済学科3年 徳田 夏実

昭和村松山集落を担当する「大竹ゼミ昭和村班」の活動は本年度からで、現地活動も8月に行われた1回のみとなっています。2回目の現地活動は1月下旬に行われる予定で、活動報告会や雪かきなどの活動を行う予定です。

今年度は8月9～12日に現地調査を行い、調査概要としては①地域の自然や観光資源、主要な産業の計画、②地域の方々との交流や情報交換、③地域の方へのアンケート実施に向けた事前調査の3つを主に行いました。主に地域の方々との交流を中心に周辺地域の自然環境や主要な産業について調査を行いました。また1月下旬に行われる2回目の現地調査では地域の方々との交流を続けていくとともに、調査状況の報告と雪かきなどを中心に実施する予定です。来年度は魅力を発信していくとともに、地域振興プランを作成することを目指して活動していきます。

## 田村市船引町長外路地区

### 経済学部経済学科3年 小池 美月

「地域活性化プロジェクト長外路チーム」は今年度が1年目の活動で、9月14・15日と10月26・27日の2回の現地調査を行いました。1回目の現地調査では「薪の里ながとろ」への視察や「ムシムシランド」で昆虫採集や標本づくりを体験しました。2回目の現地調査では自主防災組織避難訓練活動支援を行い、地域の方々との関係構築に努めました。また、長外路城跡再生ワークショップへ参加しました。現地調査を通じて、自然豊かで様々な生き物や植物があること、住民の方々がフレンドリーであることが地区の魅力だと感じました。一方で課題として、人口減少や観光施設の知名度が低いことが考えられ、今後はワークショップを通じて交流人口を増やし、地区や観光施設の知名度向上につなげていきたいと考えています。

## 石川町中谷地区

### 外国語学部英語学科4年 齋藤 史空

石川町中谷地区事業は、大学生9名(英語学科6名、国際関係法学科1名、国際環境経済学科2名)で行われています。このプロジェクトは、今年度から始まった新しい事業であり、オンラインで地域の魅力と課題を把握した後、現地調査を行いました。

10月には文化祭の準備支援や山葡萄畑訪問、地元住民との交流を行いました。福島県事業に始めて参加する学生がほとんどで、最初は緊張もありましたが、地域の人々の温かさもあり、1回目の活動ながら親交を深めることができました。また、さつまいも収穫体験もさせていただき、12月のEarth Week Dokkyoにて、スイーツとして加工し販売します。

2回目の調査は11月に実施予定で、地域歴史の学習や伝統的なお祭り「八槻市」への参加、農泊施設での植樹体験、地元のNPO法人「食彩あすか」との意見交換などを予定しています。

まだまだ始まったばかりの事業ではありますが、中谷地区、そして石川町を盛り上げていくため、これから長い時間をかけて活動を行っていききたいと思います。

## 「大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」 田村市

### 経済学部国際環境経済学科4年 日野原 楓

獨協大学は、公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構の「大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」に採択され、外国語教育と環境教育を活用して持続可能な地域づくりを目指して活動しています。本事業は、東日本大震災と原子力災害で被災した浜通り地域の産業再生を目指す「福島イノベーション・コースト構想」の一環として、田村市と連携し、地域資源を活用したサーキュラー・エコノミーや再エネの導入を推進し、脱炭素社会の実現を目指しています。また、多言語教育を通じて地域の自然環境や観光資源の情報を国内外に発信し、地域の魅力を広く伝えることも重要な取り組みです。

本年度の具体的な活動としては、市内の小学校でのSDGs教育・環境教育を実施したり、福島県立船引高等学校における地域課題探究活動へ協力したり、田村市と共催で環境講座「キエロワークショップ」を開催したほか、これから「断熱ワークショップ」も予定しています。

田村市をフィールドに、地域社会や国際社会で活躍できる人材を育成し、持続可能なまちづくり・地域活性化に貢献します。



パネルディスカッション後に五月女氏を囲んで記念撮影



## 福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」の活動報告



「大学生と集落の協働による地域活性化事業」コーディネーター 国際環境経済学科教授 米山 昌幸

2024年度の福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」には、「集落自主活動に係る伴走支援事業」に「こまち『大地の泉』つながるプロジェクト」が「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に新規で「大竹ゼミ昭和村班」、「地域活性化プロジェクト長外路チーム」、「地域活性化プロジェクト中谷地区チーム」の3グループが申請、採択されました。

各グループは、2月には県が主催する活動報告会に参加して、活動内容について発表し、報告書をまとめることになっています。各グループとも翌年度に向けて活動を継続していくことに意欲を示しています。すでに委託・補助金事業を卒業している「大竹ゼミ耻風班」「セガワ応援隊」「ほんそんみらいプロジェクト」も現地で活動を続けていますので、それらも合わせて以下に各グループの活動報告を紹介します。

### 南会津町耻風地区担当「大竹ゼミ耻風班」活動報告

代表 経済学部経営学科3年 石田 新子

大竹ゼミ耻風班のメンバーは、石田新子(代表:経営学科3年)、箱田舞夏(同3年)、原田菜穂(国際環境経済学科3年)、斎藤輝明(同3年)、山口哲文(経済学科2年)、池田恵太(同2年)、駒宮新(経営学科2年)、中村健太(同2年)他の計12名で活動を行っています。2017年から始まったこの事業は、現在は事業としての期間は終了したものの、地域の方々との交流は現在も続いています。

夏休みには数名が耻風地区のトマト農家でのアルバイトを泊まり込みで行いました。この経験を通じて、地域の農業に直接携わることで生産者の苦勞や工夫を肌で感じるとともに、農業の現状や課題について学ぶ機会となりました。

10月20日(日)には耻風地区と共同で、現地の収穫祭である「伊南川あゆまつり」に参加し、耻風地区の特産品のそば粉を使用したそば粉ブリトーや地元産のきのこを販売しました。地元住民との交流を通じて、直接的なフィードバックを得ることができ、今後の活動への示唆を得る場となりました。



11/2「草加ふささら祭り」の様子



10/20「伊南川あゆまつり」の様子

さらに、11月2日(土)の「草加ふささら祭り」をはじめとした大学周辺で開催されるイベントや、獨協大学で年に2回開催される「Earth Week Dokkyo」への出店を通して、耻風地区のPRと南会津農産物の販売促進を図りました。

今年度の活動を通じて、地域の方々との連携が強化される一方で、活動資金の確保や持続可能な運営体制の構築といった課題



そば粉ブリトー

も明らかになりました。今後は、地域の魅力を発信し続けるとともに、学生と地域の方々が互いにメリットを享受できる仕組みを整えながら、活動の継続と発展を目指していくことが課題であり目標として挙げられます。

### 喜多方市高郷町本村地区担当「獨協大学ほんそんみらいプロジェクト」活動報告

代表 国際環境経済学科4年 丹野 悠太

「獨協大学ほんそんみらいプロジェクト」は、今年度は国際環境経済学科5名と交流文化学科1名の計6名、それと卒業生3名が現地に入って活動しました。

今年度は5月26日(土)・27日(日)、7月27日(土)・28日(日)、10月26日(土)・27日(日)、11月23日(土)・24日(日)の計4回の現地活動を行いました。1回目の5月の訪問では、参加した学生、OB・OGで田植え体験やフットパス、ピザづくりを行いました。2回目の訪問では、蛍鑑賞会を予定していましたが雨のため中止となり、集落の人とBBQで交流をし、福島県で実施した「『ふくしまの棚田』推し活スタンプラリー2024」に参加しました。3回目は5月に植えた稲の稲刈りやフットパスコースを歩きました。4回目の訪問では、収穫感謝祭として本村地区のお米を使ったお餅を集落の人たちと食べながら交流を図ったり、新しいフットパスコースの整備を手伝いました。

今年度の活動では、新たに現役生4名が本村の集落に訪問し、メンバーの一員となり、関係人口を広げることができました。今後も多くの学生に地区の魅力を伝え、継続的に関わりを持てるように努めていきたいと考えています。



10/26 稲刈り体験の様子

5/26 田植え体験の様子



11/24 フットパスコース整備の様子

### 田村市船引町瀬川地区担当「獨協大学セガワ応援隊」活動報告

代表 国際環境経済学科3年 原田 奈穂

セガワ応援隊は2017年度から2023年度まで大学生事業として、田村市船引町瀬川地区の地域活性化を目標に活動してきました。2024年度は瀬川地区の有志の団体「やってみっ会」が申請する福島県のサポート事業に協力して現地活動を行いました。また、田村市の一般社団法人Switchにサポートいただいております。

今年度は英語学科3名、経済学科4名、経営学科2名、国際環境経済学科3名、法律学科2名の計14名が現地に入りました。



11月17日(日)には毎年開催される「新そば収穫祭 & 軽トラマルシェ」にて販売のお手伝いを行いました。天候にも恵まれ、地元住民の栽培したかぼちゃ、ハヤトウリ、さつまいもなど農作物、草細工、陶芸作品が並びました。新そば収穫祭では、文字通り新そばで打ったそばが振舞われました。

12月14日(土)には瀬川地区の住民センターにて「やってみっ会」が主催の地域づくりを考える「持続可能な地域づくりシンポジウム」に参加しました。「第1部 地域づくり講演会」では、千葉県の廃校を利活用した道の駅「保田小学校」を立ち上げた鋸南町都市交流施設学園長大塚克也氏、一般社団法人Switch代表理事の久保田健一氏の講演を聞きました。米山先生がコーディネーターを務めて、田村市長白石高司氏、大塚克也氏、久保田健一氏、「やってみっ会」会長新田昭悟氏によるパネルディスカッションが行われました。第2部地域づくりワークショップでは、学生がファシリテーターを務めて、瀬川地区の魅力と強み、課題、持続可能な地域づくりの可能性についてグループワークを行い、話し合った内容を参加者と共有しました。瀬川地区にある廃校、瀬川小学校の活用方法について、住民からは、若者が働けるワークスペースの設置や、地元産の農作物の加工場などを設置する案が出ました。16日には瀬川地区の写真を撮影し、SNSにて投稿しました。今後も瀬川地区の持続可能な発展のために、尽力していきたいと思っています。



12/14 地域づくりワークショップの様子



12/14 地域づくりワークショップでの発表の様子



瀬川地区の大倉神社の視察

## 小野町谷津作行政区担当「獨協大学こまち『大地の泉』つなげるプロジェクト」の活動報告

代表 フランス語学科3年 船上有希

小野町谷津作行政区を担当する「獨協大学こまち『大地の泉』つなげるプロジェクト」は、船上有希(代表: フランス語学科3年)、鈴木翔大(ドイツ語学科4年)、水野雄清(英語学科4年)、坂口諒(国際環境経済学科4年)、梅橋萌(フランス語学科3年)、高橋那奈(同3年)、平野雅己(法律学科3年)、高野祥(同1年)の5学科8名からなるチームです。

今年度は2度の現地訪問を実施しました。8月31日(土)・9月1日(日)の現地訪問では新規メンバーの加入を受けて、活動する上で中心となる「大地の泉」の現状確認、あぶくまキャンランドや東堂山の羅漢像など地区にある複



湧き出る源泉を採集する様子

数の観光地の視察により、まちの雰囲気や魅力を知るとともに、現地の方との交流会を行うことで、神輿祭りについての概要を決め、地域住民のつながりを強固にするには何が必要かを考える機会になりました。また、源泉の活用の第一歩として地域の方と共に温泉卵の試作と足湯の体験を実施し、現地の方と学生の両方から好評であり、活動に手ごたえをつかむことができました。

10月12日(土)・13日(日)の2回目の現地調査では昨年に引き続き、「八雲神社例大祭」(子ども神輿)に参加しました。今年度は12日に小学校の運動会があったため子どもたちの疲労を考慮し、12日に祭事、13日に子ども神輿を実施しました。また、神輿の後に集会所でビンゴ大会を実施し、大人から子どもまで一緒になって盛り上がることができました。実際にまちの行事に参加することで多くの現地の方と交流し、まちの行事の大切さを知ることのできる貴重な機会になりました。

1年間の活動を振り返ると、昨年明確になりつつあった事業の方向性に沿って積極的に活動できた1年であったと思います。「大地の泉」を活用した活動を実施できたこと、2年連続で祭りに関わることで現地の方からの認知を得ることができ、活動を通してまちとのつながりを実感できたことの2点が大きな収穫となりました。

## 昭和村松山集落担当「大竹ゼミ昭和村班」の活動報告

代表 経済学部国際環境経済学科3年 徳田 夏実

昭和村松山集落を担当する「大竹ゼミ昭和村班」は、徳田夏実(代表: 国際環境経済学科3年)、原田奈穂(副代表: 同3年)、羽賀瑛海(同3年)、下田歩美(同3年)、坂齊優季那(同2年)、池田恵太(経済学科2年)、山口哲史(同2年)、駒宮新(経営学科2年)、中村健太(同2年)、竹田美南(国際環境経済学科2年)、小坂舞夏(同2年)、井上業乃羽(同2年)の計12名からなるチームです。

昭和村での活動は本年度からで、現地活動も8月に行われた1回のみとなっています。2回目の現地活動は1月下旬に行われる予定で、活動報告会や雪かきなどの活動を行う予定です。

今年度行った活動は8月9日(金)~12日(月)に現地調査を行い、構成員のうち8名が現地活動に参加しました。調査概要としては①地域の自然や観光資源、主要な産業の計画、②地域の方々との交流や情報交換、③地域の方へのアンケート実施に向けた事前調査の3つを主にしに行い



八雲神社例大祭の様子



ビンゴ大会の様子



かすみ草について説明を受ける様子



交流会の様子



ました。活動目的は昭和村の魅力を伝え地域活性化を目指すことで、主に地域の方々との交流を中心に周辺地域の自然環境や主要な産業について調査を行いました。県外から移住し、かすみ草農家を始めた方や、昭和村のからむし織を学ぶ、からむし織体験生(織姫・彦星と呼ばれる)もいらっしゃいました。県や村の制度が充実し意志があれば農家を始めやすい環境が整っています。調査の成果としては、初年度ということで昭和村松山集落について知ることができ、地域の方々との信頼関係を築くことができました。

また1月下旬に行われる2回目の現地調査では地域の方々との交流を続けていくとともに、調査状況の報告と雪かきなどを中心に行う予定です。来年度は魅力を発信していくとともに、地域振興プランを作成することを目標に活動していきます。

## 田村市船引町長外路地区担当「地域活性化プロジェクト中谷地区」の活動報告

代表 経済学部経済学科3年 小池 美月

田村市船引町長外路地区を担当する「獨協大学地域活性化プロジェクト長外路チーム」は小池美月(代表:経済学科3年)、丹野悠太(国際環境経済学科4年)、日野原楓(同4年)、水口礼菜(経済学科3年)、海沼秀(同2年)、妹尾陸矢(同2年)、土橋優陽(同2年)、桐谷鴻希(同2年)、塩田賢太郎(国際環境経済学科1年)の2学科9名からなるチームです。

今年度は2回に渡って現地調査を行いました。1回目の9月14日(土)・15日(日)の現地調査では「薪の里ながとろ」の視察を行い、長外路地区では薪の原料となる原木を豊富に有していることや、焚火、BBQなどのアウトドア体験が季節ごとの植物に囲まれながら楽しめることを知りました。また、「ムシムシランド」で昆虫採集や標本づくりを体験し、地域の自然環境を活かした観光資源の魅力を感じました。さらに、ビオトープに関する講習では、生息する生物やその管理方法について学びました。日本における絶滅危惧種を保護するためには、自然環境の維持や人間の積極的な保全活動が必要であるという意識を高める貴重な機会となりました。また、地域おこし協力隊の大口宗将氏による講和を通じて、地域が抱える課題や可能性についての知識を深めることができました。

2回目の10月26日(土)・27日(日)の現地調査では自主防災組織避難訓練活動に参加し、地域の方々との関係構築に努めました。その後、長外路城跡再生ワークショップに参加し、作業を通して、地域資源を活用する可能性について視野を広げました。初年度である今年は現地調査を通じて、自然豊かで



「ムシムシランド」での標本づくりの様子



長外路城跡再生WSの様子



自主防災組織避難訓練に参加した時の様子



組み木体験の様子

様々な生き物や植物があること、住民の方々がフレンドリーであることが現地の魅力だと感じました。一方で課題として、人口減少や観光施設の知名度が低いことが考えられ、今後はワークショップを通じて交流人口を増やし、地区や観光施設の知名度向上につなげていきたいと考えています。

## 石川町中谷地区担当「地域活性化プロジェクト中谷チーム」

代表 外国語学部英語学科3年 笠原比 佳理

石川町中谷地区を担当する「地域活性化プロジェクト中谷チーム」は、笠原比佳理(代表:英語学科3年)、齋藤史空(同4年)、櫻井雅文(同3年)、三浦大(同3年)、菊地真由子(同3年)、溝井綾乃(同3年)、太田奏海(国際関係法学科3年)、丹野悠太(国際環境経済学科4年)、日野原楓(同4年)の3学科9名からなるチームです。

オンラインで地域とのマッチングを行い、地域の魅力や課題を聞かせてもらったうえで、石川町中谷地区で地域活性化プロジェクト活動をさせていただくことになりました。

10月19日(土)・20日(日)に初回の現地調査を実施しました。1日目は地域の方々と共に地域で行われる文化祭イベントの設営のお手伝い、そして石川町で山葡萄栽培をし、加工品を販売している石川山葡萄愛好会代表の角田信氏、買い物支援団体つながっぺ生活支援コーディネーターの吉田真澄氏から、お二人の活動や石川町への想いを伺うことができました。また角田氏にはご自身の所有する山葡萄畑にも連れて行っていただきました。廃校を活用した宿泊施設「ひとくらす」に泊まり、地域の方との交流や宿泊を楽しみました。

2日目はさつまいも収穫体験を行いました。ここで自分たちが収穫したさつまいもを使い、12月2日から7日にかけて行われた学内のイベント「Earth Week Dokkyo」でさつまいもを販売するのに加えて、焼き芋やマフィン、スコーンに調理したさつまいもスイーツを販売しました。

11月23日(土)・24日(日)に実施した2回目の現地調査では、1日目に石川町の歴史資料館の「イシニクル」を訪見し、中谷地区を含む石川町の歴史について学びました。また石川町の伝統的なお祭りである八槻市にも訪れ、地域の方々の温かさや町の雰囲気を感じることができました。宿泊施設である「堂平ガーデン」は古民家をそのまま農泊施設・キャンプ場へと改修した宿で、宿泊に加えて施設の見学や植樹体験などをさせていただきました。

2日目は中谷地区でお弁当販売などを行っている、NPO法人の「食彩あすか」さんのヒアリングを行いました。ヒアリングを通して、「食彩あすか」さんが抱えている問題とその解決案についての意見交換を行いました。

今年度の現地調査の最終活動として、中谷地区自治協議会事務長の志賀一隆氏と、「堂平ガーデン」の川島宏一氏と共に2回の現地調査の振り返りのワークショップを実施しました。今年度実施した2回の現地調査の中で出た課題や意見を踏まえて、来年度以降、地域活性化に向けた具体的な活動を行っていききたいと思います。



さつまいも堀り体験



林業体験



Earth Week Dokkyoにて収穫したさつまいもを調理・販売

## 実務と研究、そして教育

経済学部国際環境経済学科 教授 古川 光明

2024年4月に経済学部の専任教授に着任しました古川光明(ふるかわみつあき)です。国際環境経済学科の所属で、「国際公共政策論」「国際開発論」などを担当しています。どうぞよろしくお願いいたします。



私は、長年、政府開発援助の実務者として途上国の開発援助に携わってきました。そのJICAの経験を通じて、思い知らされえたことは、実務をしながら関わっている支援が本当に効果を発揮しているのかを検証することの難しさでした。それでも、関わった支援や業務に関連して、わからなかったことや謎になっていたことを、ある程度、納得することができたことについて触れたいと思います。

それは、90年後半から加速していった援助協調・開発協調についてです。初めての在外勤務先は97年に赴任したタンザニアでした。私は、赴任後、保健や教育などの担当になりました。しばらくして、ドナー会合に出席したところ、イギリスだったと思いますが、日本はなぜ、いまだにプロジェクト支援を行うのか、という猛烈な批判を受けました。当時の私は、なぜ、こんな批判を受けなければならないのかかわからず、プロジェクト支援のなにが悪いんだと反論をしたことを思い出します。実は、その当時、タンザニアでは、援助効果向上に向けた取り組みが活発化しており、プロジェクト型援助から、セクター・ワイド・アプローチへの移行が進んでいました。しかし、当時のJICAや外務省はその動きには関心を示しておらず、アフリカを中心とする援助協調・開発協調の枠に入っていませんでした。

かかる状況のなか、1998年に世銀が包括的開発枠組み(CDF)、続いて貧困削減戦略書(PRSP)の導入を決め、途上国の主導のもと、ステークホルダーとともに計画作成、予算編成、実施、モニタリング評価を行うアプローチが浸透し、支援国の国庫に直接援助資金を拠出する「一般財政支援」

が拡大していきました。特にアフリカでは開発協調や新たな援助様態の受容度が高まり、タンザニア政府は、一般財政支援、セクター財政支援、コモンバスケット、プロジェクトの順での援助受け入れを要請していました。まさにその渦中の中、JICAと外務省によるオールジャパンとしての対応を行い、農業セクターで日本がリードドナーとしてセクター・ワイド・アプローチを主導していきました。

その一方で感じたことは、本当にこの流れは正しいのか、ということでした。援助効果向上に向けたアプローチは間違っていない、しかし、期待した効果まではつなげていないのではないかと、なにかそこで見落としていることがあるのではないかと悶々とした思いでした。この思いは、帰国後、外務省に新たに設置され援助協調ユニット長を拝命し、援助協調を司るなかでも抱えていた課題でした。そんななか、JICA研究所が設置され、2009年に上席研究員となり、それまでの謎を追う機会を得ました。それをまとめたものが大来賞の受賞につながった『国際援助システムとアフリカポスト冷戦期「貧困削減レジーム」を考える』日本評論社でした。なぜ、開発協調が必要だったのか、との問いとともに、その課題の問題点も追求することができました。

上記の経験は一例に過ぎませんが、実務と研究をつなげていくことによって、より効果のある開発援助につながるのだとの確信を得ました。そして、教員として、世界の同時代の問題との関連のなかで、それらに対処する基礎理論と応用、そしてそれらと現場での実践とリアリティとをつなげる機会を学生に提供し、そのなかで多様化する国際協力のニーズに対応した新たな指針を提示できる人材の育成を目指したいと考えています。これまでの国際協力における研究と実践を重ねてきたものを微力ながらも学生たちに伝授していければと考えています。



# 現場観測による地球環境モニタリング

経済学部国際環境経済学科 特任教授 村山 昌平

はじめまして。2024年4月に経済学部の特任教授に着任しました村山昌平(むらやましょうへい)と申します。国際環境経済学科の所属で、自然科学系の環境学や特殊講義などを担当しています。どうぞよろしくお願いいたします。



これまで、約40年間、大気中の二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)をはじめとする温室効果ガスの変動の観測を行い、その変動の原因を明らかにする研究に従事してきました。地球規模の変動のように広い空間スケールの変動を捉えるためには、局所的な人間活動や植物活動等の影響が小さい大気(このような大気のことを「バックグラウンド大気」といいます)の観測が有効ですが、大学院生の時には第30次日本南極地域観測隊の越冬隊員として参加し、1年1ヶ月南極昭和基地に滞在して大気中温室効果ガスの観測を行いました。昭和基地でもCO<sub>2</sub>濃度の増加が観測されていますが、人間活動の影響を強く受けた北半球の大気が南極まで運ばれていく過程を明らかにする研究等を行いました。バックグラウンド大気の観測は、気象庁や研究機関の協力を得て、現在も日本最東端の南鳥島や北極圏スピッツベルゲン島において実施しています。他方、大気からのCO<sub>2</sub>除去効果が温暖化対策としても注目されている森林生態系によるCO<sub>2</sub>吸収に関する研究も行ってきました。岐阜県高山市の落葉広葉樹林では、1993年～現在まで温室効果ガスの変動や大気-森林生態系間のCO<sub>2</sub>の収支の観測(「フラックス観測」といいます)を実施しています(写真参照)。森林でのCO<sub>2</sub>フラックス観測

は世界各地で行われていますが、当観測は、アジアでは最長、世界でも有数の長期間のものです。長期観測によりCO<sub>2</sub>の吸収は年々の天候の違いや台風の来襲に伴う倒木等の影響で、年々変動することが分かってきました。近年は地球温暖化の影響が示唆される変動も観測されつつあります。

いずれの観測地も容易に行ける場所ではないので、しっかりと準備をして機器を設置するのですが、それでも落雷や強風、動物等による被害を受けたり、観測が長期になると装置も老朽化し、観測が中断してしまうこともありました。特に新型コロナの期間は、修理部品がなかなか手に入らない等の苦労もありました。一方、観測・研究を通して、多くの方々の協力関係を築くことができました。大発見と呼べるものはなかったですが、希に「小発見」が見つかってワクワクする経験もしました。

これからは、学生の皆さんと深刻化する地球環境問題に関して、最新の科学的知見を一緒に学んでいきたいと思っています。また、研究生活を通して経験したことを失敗談も含めて若い世代へ伝えることも行っていこうと思っています。



岐阜県高山市の森林における観測タワー

# イリノイ大学の思い出

経済学部経営学科 教授 香取 徹

獨協大学に33年間勤務いたしました。この3分の1世紀の間で私にとって一番大きな出来ごとは長期学外研修で、1995年から約2年間アメリカのイリノイ州アーバナ・シャンペーン市にあるイリノイ大学(写真1)に滞在したことです。人口3万人ほどの小さな大学街で、大学の周りはトウモロコシ畑が地平線まで続いています。広大で静かにそして暖かく大きな大地に大学が佇んでいます。この何もないイリノイの田舎が大好きになりました。

10月から3月までが永い冬、零下40度になることもあるので、まるで冷凍食品です。外出するときは車が動かなくなった時のために、車の鍵穴の凍結防止剤と分厚い毛布など命を守る用具が欠かせません。過酷な冬が終わると短い夏を精一杯謳歌します。私たちの小さな家(写真2正面)(写真3裏庭)の庭に花を植え、近くの畑で枝豆、ズッキーニ、トマトなどを栽培し、蛍が飛び舞う中、近所に住む台湾、マレーシア、香港など世界中から勉強に来ている人達とBBQです。また、テニスで何人もの友人を作ることができたことは心の癒しになりました。

家から車で1時間ほどのところに、電気もガスも使わず馬車と馬で生活するアーミッシュという人々が住む地域があります(写真4)。聖書に厳格に忠実に従おうとする再洗礼派の人々が19世紀に新世界アメリカに移住し、頑なにその生活を守っているのです。決して争わない人々、徴兵を拒否し続けます。とても信じられない生活。でもそれがアメリカの一面です。

それ以来、毎年のように私の故郷、イリノイに帰っていました。2010年、博士論文を締めくくろうと、かの地に2週間ほど獨協大学の研究費で滞在し、毎日バスで大学の図書館に通い、完成させることができました。

素晴らしい研究生活でした。ありがとうございました、獨協大学。



写真1



写真2



写真3



写真4



## 獨協大学二三事

経済学部国際環境経済学科 教授 童 適平

気づかずに、古稀になり、定年退職を迎えることになりました。獨協大学勤務12年間はあっという間でした。

獨協大学との縁は、上海復旦大学教員時代に獨協大学経済学部教員の訪問接待から始まり、2006年に日本証券経済学会春大会に参加するため、初めて獨協大学を訪問しました。特に印象は残りませんでしたが、この縁が続き、2013年に経済学部新設国際環境経済学科の教員を拝命することになりました。日本に来て三つ目の職場でした。

着任早々、十分なスペースがある研究個室は、パソコンとプリンターを備えて、迎えてくれました。意外でしたが、すぐ仕事ができるように、気持ちよかったです。また、学部ごとに教員の研究個室が一カ所に集中することも意外でした。先人達は先見の目を持って大学を運営、企画してくれたなあと思いました。教員間の交流や学部の会議などには非常に便利でした。大学から支給される個人研究費は決して潤沢ではないが、大がかりの研究調査プロジェクトを行わない限り、大きな設備を要しない社会科学の研究においては、個人の長続きする研究に必要な書籍と資料の購入や現地での調査費用などは大抵足ります。勤務校から個人研究費の支給がない上海教員時代と比べれば天国でした。

獨協大学での担当科目は、これまで「金融論」から「経済政策論」に変わりました。今から考えれば、これもよかったです。この変わりによって、新しい知識の勉強も必要になるし、研究の角度も豊かになったおかげで、研究のフロンティアが

広がりました。

そして、講義も、理解しがたい言葉遣いや変な日本語の発音でありながら、いつも静かに聞いてくれた学生には申し訳ない気持ちであると同時にありがたい気持ちでもあります。

最後に特筆したいのは大学の行政システムとスタッフの対応です。在職中に、接することが多いのは教務課と教育研究支援課、そして、委員を担当した国際交流センターと大学院事務室です。初歩的な過ちを繰り返し、犯しましたが、規則を調べれば、全部私の不注意と理解不足によるものでした。それでもスタッフの方々はいつも丁寧に應對し、助けてくれました。

以上は在職12年間の思い出と感想です。このように、12年間は充実した楽しい教員生活を括ることができました。このような環境を提供して下さった大学に感謝します。



東京証券取引所を見学

### 編集後記

経済学部独自の発信媒体としてその歴史を重ねてきた『Network経済』。途中、刊行の意義を巡って議論を重ねた時期もありましたが、「プレゼンコンテスト」「ゼミ活動報告」「学生活動報告」「卒業研究概要」といった学生目線のコンテンツを中心とすることで、他の学内誌とは異なる特徴を持つ冊子へと成長したと思います。また、それと歩調を合わせるように配布先も見直し、現役学生の保護者のみならず、指定校を中心とする高校の進路担当教員やキャリアセンターを介した企業の人事担当者へと、経済学部生の今を届けるものになりました。来年度は創刊25周年の節目の年。次の四半世紀に向けて更なる飛躍を遂げていくことを願ってやみません。

編集委員長 有吉 秀樹

「Network 経済」のバックナンバーをご覧になりたい方は  
右記で参照ください。  
<https://www2.dokkyo.ac.jp/eco/nt/>



経済学部所属教員の業績は右記から見るができます。  
<https://www.dokkyo.ac.jp/research/faculty/>



## Network 経済 2025 Vol.47

©獨協大学経済学部

編集・発行 獨協大学経済学部ネットワーク経済編集委員会  
〒340-0042 埼玉県草加市学園町1番1号

編集部 TEL 048(946)1929 FAX 048(943)3153  
E-mail deaneco@stf.dokkyo.ac.jp

企画デザイン・印刷 望月印刷株式会社

※本誌の内容を許可なく転載・放送することを禁じます。

2025年3月31日

Published by Faculty of Economics, Dokkyo University  
Supported by Mochizuki Printing Co.,Ltd.